

キャンプ研究

第19巻

2016年2月発行

Japan
Journal of
Camping
Study

Vol.19

Feb. 2016

未来テクノ株式会社

～各種テント・防衛省装備品・海洋土木製品～

<http://www.mirai-techno.jp/>

東京本社 〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-9 SCI日本橋ビル9F TEL: 03-3663-7886

FAX: 03-3663-7899

江刺工場 〒023-1131 岩手県奥州市江刺区愛宕字西下川原240-1

胆沢工場 〒023-0402 岩手県奥州市胆沢区小山字中油池137

水沢工場 〒023-0402 岩手県奥州市胆沢区小山字附野71-1

キャンプ研究

第 19 卷 2016 年 2 月 15 日発行

目 次

研究論文

- 不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討 …………… 3
— 社会教育施設と適応指導教室の連携事例 —
築山 泰典・遠藤 浩・橋本 和俊・花田 道子・芳野 和賢
- テーマパークでの就業体験を利用した体験教育の試み …………… 13
～ Kidzania 就業体験と野外教育の融合～
甲斐 知彦・関口 陽介・秋山 和子
- キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究 … 21
青木康太郎・横山 誠・粥川 道子

実践報告

- 民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 …………… 31
稲松謙太郎・砂山 真一・高瀬 宏樹・岡村 泰斗
- 高校体育科キャンプ実習報告 …………… 37
— スポーツ選手の基礎力を育むことを目指して —
三島 和康
- 長期キャンプの意義を改めて考える …………… 45
— 「チャレンジキャンプ 2015 ～リヤカーで小豆島一周 110 kmの旅～」の事例から —
徳田 真彦・伊原久美子・久田 竜平・高橋 宏斗・飯田 輝
- くしろアウトドアキッズスクール 2015 冒険の旅の実践 …………… 55
森 健太郎
- キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム …………… 61
渡辺 亮・永田 千晴・丹藤 里咲・照井 智貴・白井 勇斗・弓削田崇史・比留間陵介・
高橋 侑椰・大杉 清・岩谷 悠紀・遠藤 栞・辻 直人・平山晃太郎・倉品 康夫

資 料

- 「キャンプ研究」投稿規程 …………… 69
- 「キャンプ研究」収録題目一覧 …………… 72
- CAMP MEETING IN JAPAN 発表題目一覧 …………… 76

編集後記

キャンプ研究 第19巻PDFについて

本PDFの内容について、ページ単位での印刷は可能ですが、テキスト及び画像のコピーはできない設定としておりますので、ご了承ください。転載等を希望される場合、日本キャンプ協会にお問い合わせいただきますよう、よろしくお願いいたします。

また、この冊子は販売をしておりますので、購入を希望される方は日本キャンプ協会へお申し込みください。

お問合せ先 公益社団法人日本キャンプ協会

電話：03-3469-0217 メール：ncaj@camping.or.jp

©公益社団法人日本キャンプ協会

研究論文

研究論文

不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討 —社会教育施設と適応指導教室の連携事例—

A Study of the Effects on the Continual Attendance at Camps for Junior High School Non-Attendants

-A Case of Cooperation in Social educational Facilities and Adaptation Assistance Class-

築山泰典（福岡大学）・遠藤浩（京都教育大学）・橋本和俊（福岡大学）
花田道子（九州共立大学）・芳野和賢（春日市立春日東小学校）

Yasunori TSUKIYAMA・Hiroshi ENDO・Kazutoshi HASHIMOTO
・Michiko HANADA・Kazuyori YOSHINO

The purpose of this study was to examine the effects of camps organized as cooperation in social educational facilities and adaptation assistance class, for junior high school non-attendants. Seventy seven junior high school non-attendants (male: 48, female: 29) participated in three sessions of camp during a year. This study was used self-esteem scale before camp and after camp, each 3times for all participants.

The following results were obtained

1) The score of self-esteem raised on increasing times 2) After 2nd camp, several times participants had effect on first time participants. 3) After camps 40.0% of all participants could go to junior high school.

The results showed that relationship of social educational facilities and adaptation assistance class is important.

Keywords : Camp, Junior High School Non-Attendants, Cooperation of educational institutions

1. 緒言

平成 26 年度全国中学校における不登校生徒の数は、97,036 名であり、全生徒数における割合は 2.76% である。これは、平成 25 年度と比べ 1.7% の増加であり、平成 20 年から 24 年度にかけて、前年の数を下回る減少傾向が続いたものの、平成 25 年度からは再度上昇傾向を示している¹⁾。また、全不登校生徒 97,036 名のうち前年度から継続した不登校生徒は 48,108 名と 49.6% に上り、学年別に 1 年生では 23,960 名のうち継続者 6,694 名 (27.9%)、2 年生では 34,834 名のうち継続者 17,221 名 (49.4%)、3 年生で

は 38,242 名のうち継続者 24,193 名 (63.3%) と示され、不登校期間が長期化する傾向を示している。

このような現状に対し、不登校児童生徒に対する学校復帰支援策として、「学校内での指導の改善工夫」として教員に対する研修会の開催や生徒との関係性の改善、スクールカウンセラーの専門的指導等、様々な措置が講じられているが、このような取り組みは学校内のみでなく家庭への働きかけ、教育相談センターや医療機関といった他機関との連携へと広げられている。

不登校児童生徒に対する学校復帰支援手法とし

でのキャンプは、1954年朝日新聞厚生文化事業団が「アサヒキャンプ」を実施したことが創始であり、その後児童相談所などの相談機関、適応指導教室や教育委員会・教育センター、青少年教育施設等、多様な機関にて実施されるに至っている²⁾。また、1981年からは大学にて冒険プログラムを導入したキャンプによる改善効果も報告されている³⁾。ここでは「精神医学、心理学、体育学の専門家が関与」、「不登校期間が1年未満の生徒を対象」、「不登校生徒2名と登校生徒4名を1グループにする」との条件設定により、「1泊2日の予備キャンプ」、「9泊10日の本キャンプ」、「1日のキャンプ報告会」で構成し4年間実施した結果、51名中35名(68.6%)が再登校しているとの結果を報告している。

その後、不登校中学生を対象とし、2週間のキャンプ期間における友だち関係の展開過程に関する研究^{4) 5)}や、全国の社会教育施設が主催し実施されたキャンプ参加者の2～6年後の社会適応状況に関する研究がなされ⁶⁾、ともにこれらキャンプの有効性を示しているものの、対象者の特性から、臨床・事例的な研究とされている。

福岡県では、1996年より福岡県立少年自然の家「玄海の家」が主催し、「子どもの自立を育むこと」を最終目標として掲げ、単年度に複数回実施する年間継続事業として、学生ボランティアの積極的な関わりにより、不登校児童生徒を対象としたキャンプが実施されてきた。2007年度の事業について、各回最終プログラムとして実施される「スピーチ大会」に着目し、3事業すべてに参加した3名を対象にスピーチ内容と時間や文字数といった量の変化から検証した結果、スピーチ内に他者との関わりを表現する内容の発生と、時間及び文字量の増加との効果を報告している⁷⁾。また、2009年度の事業については、ソーシャルスキルと生きる力から検討した結果、キャンプ前後での変化が認められたと報告している⁸⁾。しかし、本事業に参加した児童生徒の不登校の改善状況に対する検証は実施されていない状況にある。

不登校児童生徒は、学校や適応指導教室、そして各生徒の家庭といった空間で日常生活を過ごしている状況である。このような環境に非日常であるキャンプの場を提供し、「登校へと向かう機会

を作ること」が社会教育施設の役割でもあると言える。そのため、キャンプ参加前後の取り組みが学校や適応指導教室との連携により図ることができれば、不登校改善に向けた取り組みがより強化されるのではないかと考えるに至る。また、学校や適応指導教室、そして社会教育施設が連携を図ることで、キャンプ参加前後の変化、そして、参加経験を活用した事後の取り組みもより積極的に展開することにつながるものと考えられる。

この様な観点より、前述した不登校キャンプが2011年度から13年度までの3年間、対象を中学生と限定し、「中学校」を主管する福岡県教育庁教育振興部義務教育課が事務局機能を、「社会教育施設」を主管する同教育庁教育振興部社会教育課が企画運営機能を担い、「適応指導教室」を主管する福岡県下の6教育事務所との連携を図りながら、Friendship 友情、Relation 人間関係、Experience 体験、Sociality 社会性、Heart ハートの頭文字から「FRESH キャンプ」として学校復帰支援事業が展開された。

そこで、本研究では不登校中学生に対し、学校復帰支援手法としてのキャンプの効果と、その後の日常生活における適応指導教室等での取り組みから、不登校の改善への関連について検証することを主たる目的とする。

2. 対象及び方法

2.1.1. 年間事業計画

平成22年度福岡県下公立中学における“不登校になったきっかけ”と考える状況調査の結果によると、「無気力(23.1%)」、「いじめを除く友人関係をめぐる問題(20.2%)」、「不安などの情緒的混乱(16.3%)」が上位を占める状況である。その結果、中学生期に必要とされる、他者と関わることで構築される「自我意識の確立」は困難なものとなり、自己を認識する機会も喪失し、自己肯定感の低下につながるものと考えられる。このような生徒たちが日常的に関わる適応指導教室における取り組みとしても、第1段階に「職員との関係性の構築」が設定されている。そのため本事業においても、「参加者と支援スタッフとの関係性を構築すること」を第1段階のステップとし、その後「参加者同士の関係性の構築」を経て、「社

会との関わりと役立ち感の醸成」を最終段階として捉え3回シリーズの構成とした(図1)。また、長期不登校者に対する事業の意味としては、単発のものでなく、継続的な関わりによる改善効果の必要性もあると考えたからである。

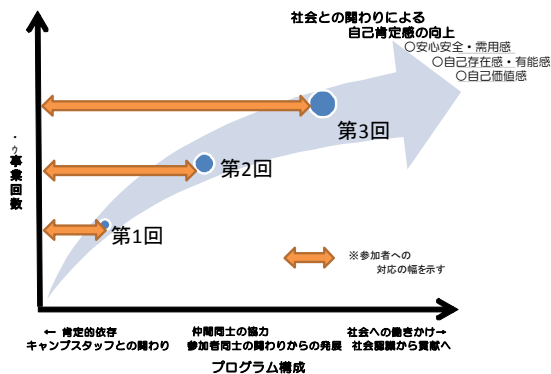


図1 事業全体の概念図

各回の事業プログラムには、1) 仲間づくりを目的としたゲームや活動、2) 新たな経験や体験を含むチャレンジ体験、3) 地域社会との関わりを実感する地域貢献体験を組み込んだ内容とし、1) では肯定的依存段階から「安心安全・受容感」を、2) では参加者同士の協力から「自己存在感・有能感」を、そして3) では社会への働きから「自己価値観」をそれぞれ育むことを企図したものである。

2.1.2. 事業運営

本事業実施のため、学識経験者2名、臨床心理士1名、適応指導教室代表者6名、社会教育施設代表者3名、教育事務所指導主事6名の18名からなる不登校中学生復帰支援実行委員会が設置され、福岡県教育委員会義務教育課と社会教育課、そして県教育センターが事務局機能とそれぞれの機関が各回のキャンプ企画及び運営を担う体制がとられた。

実際のキャンプ運営は、福岡県立少年自然の家「玄海の家」の社会教育主事が一貫してディレクターを務め、義務教育課、社会教育課県教育センター職員及び、玄海の家職員がスタッフとして関わり事業を進めていった。また、グループを担当するグループカウンセラーは、福岡県下の大学に所属する学生がボランティアとして各グループに

2名ずつ配置する体制をとった。この学生ボランティアの役割としては、参加者に近い目線で関わることで、身近な目標として認識されることを期待したものである。さらに、不登校児童生徒と登校している児童生徒を同じキャンプに参加させ、同じグループ活動することが不登校者に対し、教育効果が示されることが報告されているが、「通常学期の平日」に開催される登校者の参加は不可能である。そのため登校者に求められる機能を学生ボランティアに期待することとなる。「通常学期の平日」に開催される理由としては、本事業への参加を学校への登校とみなすことが一因である。

学生ボランティアも大学で通常授業が開講されている時期の参加となるため、3回すべてに関わることは困難である。また、継続的に参加している学生でない限り、事業初日に初めて参加者と出会うことになる。そのため、各回事業開始前に、参加者に対応するための留意事項を確認することが必要となる。日々の参加者の変化を的確に捉え解釈するため、独自に作成した「参加者状況確認リスト」を活用し、記録していくこととした(資料1.)。これは、参加者1名に対し2名のグループ担当学生ボランティアが1) 初日夜に一日の状況からその日の様子を記録する、2) キャンプ最終段階での参加者の成長目標を設定する、3) 毎夜確認記録作業を行うとの手続きを進めることにより、具体的に参加者の状況を把握し対応方針を明確化するための手段である。また、多くの学生ボランティアは大学卒業後教員等の教育職を目指す学生であるため、彼らの成長にもつながる手法であると考えたためでもある。この記録は、次回キャンプの際、初めての学生ボランティアであっても、参加生徒に関する、重要な情報収取手段として活用することができるものとも考えた。

2.1.3. 各事業内容

本研究では2012年度に3回開催された事業を研究対象とした。第1回は7月10日～13日の3泊4日の日程で、36名の参加によって実施された。ここでの主な活動内容は、仲間づくりを目的としたイニシアティブゲーム、チャレンジ体験としてのカヌー体験、地域貢献体験としての幼児との交流であった。第2回は10月30日～11

月3日の4泊5日の日程で33名の参加によって実施された。ここでの主な活動内容は、仲間づくりを目的とした創作活動やゲーム、チャレンジ体験としてのカッター体験や登山を含む遠征やスポーツ選手との交流であった。この回のみ、地域の保育園との日程調整ができず、地域貢献体験が実施できない状況であった。最後の第3回は、1月29日～2月1日の3泊4日の日程で19名の参加によって開催された。ここでの主な活動プログラムは仲間づくりを目的としたグループでのめあてづくりと最終日の振り返り活動、チャレンジ体験としてのナイトパーティーの企画運営と指導、地域貢献体験としての幼児との交流であった。第3回は寒い時期での実施であったため、活動的なプログラム展開が困難な状況となった。また、仲間づくりの活動は、冒険教育を礎とするプロジェクトアドベンチャーの考え方や手法を取り入れた内容であった⁹⁾。

各回とも食事は参加者自らの自炊であるが、野外炊事を取り入れながらも施設内の調理室での調理も取り入れた。また宿泊は施設泊とした。

全ての回で、参加前には義務教育課から各参加者の調査書が配布回収され、同課は参加受付を一括する機能を担った。また、各家庭に対し、参加前にあいさつなどの言葉がけや会話、家族と一緒に過ごす時間の確保など、具体的な関わり内容が依頼された。適応指導教室ではキャンプ実施後、特に生活リズムの定着や、他者との関わりに対する働きかけ、そしてチャレンジ登校といった取り組みが積極的に展開されるよう促された¹⁰⁾。

2.2. 対象者

対象者は、本事業に参加しデータが取得できた77名(男子：48名、女子：29名)である。この時、学年別には1年生10名(男子7名、女子3名)、

表1 参加状況

参加状況	N	(%)
第1回のみ	20	(36.4%)
第2回のみ	12	(21.8%)
第3回のみ	4	(7.3%)
第1,2回	4	(7.3%)
第1,3回	1	(1.8%)
第2,3回	11	(20.0%)
全て	3	(5.5%)
合計	55	(100.0%)

2年生27名(男子19名、女子8名)、3年生40名(男子22名、女子18名)であった。しかし、複数回参加している生徒が19名含まれるため、対象となる実人数は55名である(表1)。

内訳は、男子33名、女子22名であり、中学1年生が8名、2年生が19名、3年生が28名との状況であった。不登校開始学年は小学校4年生から中学校3年生まで幅広いが、中学1年生が21名(38.2%)と最も多い状況であった。また、不登校継続年数は、2年未満が23名(41.8%)と最も高かった(表2)。

表2 対象者の属性

	N	(%)
対象者の性別		
男性	33	(60.0%)
女性	22	(40.0%)
対象者の学年		
中学1年	8	(14.5%)
中学2年	19	(34.5%)
中学3年	28	(50.9%)
不登校開始学年		
小学4年	4	(7.3%)
小学5年	4	(7.3%)
小学6年	5	(9.1%)
中学1年	21	(38.2%)
中学2年	18	(32.7%)
中学3年	3	(5.5%)
不登校継続年数		
1年未満	14	(25.5%)
2年未満	23	(41.8%)
3年未満	11	(20.0%)
4年未満	4	(7.3%)
5年未満	3	(5.5%)
各項目の合計	55	(100.0%)

2.3. 調査方法

2.3.1. 調査内容及び手続

教育現場で用いられる心理尺度及びIKR簡易版を参考に、福岡県教育センターが作成した自尊感情調査を使用した。これは15項目4件法からなる質問紙で、「安心安全・受容感」、「自己存在感・有能感」、「自己価値観」の3要因から構成される内容である。本調査を3回のキャンプ前後、開講式と閉講式にて実施した(資料2)。

また、キャンプ後の不登校改善状況に関しては、参加者が属する学校や適応指導教室からの情報提供を得ることとした。

2.3.2. 統計処理

調査項目に対し、キャンプ事前と事後の間、また継続的参加の効果を検証するために、初回参加者と継続的参加者との間で平均値の検定 (T 検定) を用いた。なお、この分析にはシミック株式会社の HALBAU (High quality Analysis Libraries for Business and Academic Users) 7 を用いた。この時、統計的有意水準は 5% を用いた。

3. 結果及び考察

3.1. 全体での変化

3 事業すべて参加者延べ 77 名のキャンプ前後での自尊感情調査の平均値及び標準偏差を示した (表 3)。

第 1 回の事業では安心感・受容感で 13.82 から 15.39 へと有意な上昇を示し ($t=2.52, P<.05$)、自己存在感・有能感も 13.21 から 14.82 へと有意な上昇傾向を示した ($t=1.93, P<.1$)。その結果、合計点が 39.04 から 43.75 へと有意な上昇が示された ($t=2.37, P<.05$)。これは、1 回目の事業においては、キャンプ指導者及びスタッフとの「肯定的依存関係の醸成」を目指す意図の下、事業を実施したが、その目標が達成されたものとする。

第 2 回の事業においては、自己存在感・有能感が 14.00 から 15.73 へ有意な上昇を示し ($t=2.01, P<.05$)、安心安全・受容感で有意な上昇傾向を示した ($t=1.72, P<.1$)。また、合計点においても 43.23 から 47.20 へと有意な上昇傾向を示した ($t=1.69, P<.1$)。ここでも第 2 回目の目

標である「仲間同士の協力」を意識した指導者及びスタッフの関わりが達成できたものとする。

最後の第 3 回では、安心感・受容感で 15.90 から 18.32 へと有意な上昇を示し ($t=3.25, P<.05$)、自己存在感・有能感も 15.00 から 16.42 へと有意な上昇傾向を示した ($t=1.92, P<.1$)。また、合計点も 44.95 から 49.42 へと有意な上昇を示し、キャンプ後の値は、全てを通じて最も高値を示す結果となった ($t=2.37, P<.05$)。

以上 3 事業の合計での比較では、安心感・受容感で 15.13 から 16.86 へ、自己存在感・有能感は 13.96 から 15.57 へと有意な上昇を示し (安心 : $t=3.71, P<.001$; 自己 : $t=3.26, P<.01$)、自己価値観においても 13.04 から 14.07 へと有意な上昇傾向を示した ($t=1.89, p<.1$)。そして合計点は 42.13 から 46.49 へと有意な上昇を示した ($t=3.39, P<.001$)。

これら結果は、複数回参加した生徒も 19 名いるためその影響も考えられるものの、全体での割合は 24.68% と 1/4 程度であることから、各回の事業及び全体を通しての評価として、本事業は参加者の自己肯定感を向上させる結果を示したものとする。また、合計点では回を重ねるごとに事後の得点は上昇を示した (図 2)。

3 回構成のプログラムの中で、「安心安全→自己存在感・有能感→自己価値観」と段階を経た参加者への課題設定が存在するため、指導者及びスタッフの対応の相違が得点の上昇に影響したことも考えられる。そのため、2 回目以降の複数回参

表 3 事業前後における全体での比較

事業回数	項目	N	Pre		Post		T値	P
			平均	SD	平均	SD		
1回目	安心安全・受容感	28	13.82	2.29	15.39	2.38	2.52	*
	自己存在感・有能感	28	13.21	3.13	14.82	3.09	1.93	†
	自己価値観	28	12.00	3.26	13.54	3.70	1.65	n.s.
	合計	28	39.04	7.19	43.75	7.68	2.37	*
2回目	安心安全・受容感	30	15.87	3.16	17.30	3.28	1.72	†
	自己存在感・有能感	30	14.00	3.21	15.73	3.48	2.01	*
	自己価値観	30	13.37	3.09	14.17	4.08	0.86	n.s.
	合計	30	43.23	8.17	47.20	9.90	1.69	†
3回目	安心安全・受容感	19	15.90	2.77	18.32	1.70	3.25	*
	自己存在感・有能感	19	15.00	2.26	16.42	2.29	1.92	†
	自己価値観	19	14.05	2.25	14.68	2.89	0.75	n.s.
	合計	19	44.95	5.94	49.42	5.06	2.50	*
全体	安心安全・受容感	77	15.13	2.91	16.86	2.86	3.71	***
	自己存在感・有能感	77	13.96	3.02	15.57	3.11	3.26	**
	自己価値観	77	13.04	3.05	14.07	3.66	1.89	†
	合計	77	42.13	7.63	46.49	8.34	3.39	***

†: $p<.1$, *: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

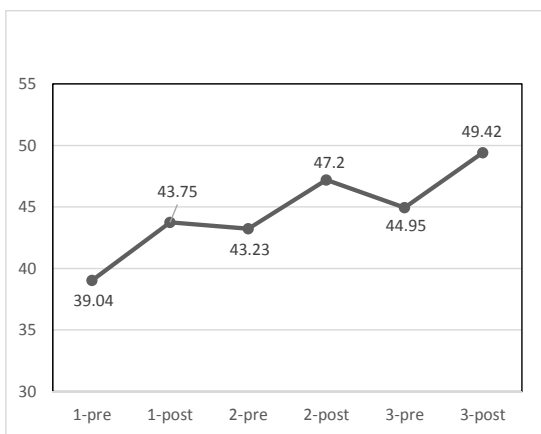


図2 合計点の変化

加者と初めての参加者とに分けた分析を進めることとする。

3.2. 事業による複数回参加者の影響

複数回参加者と初めての参加者との比較となるため、2回目以降の事業における分析となるがそれぞれの平均値及び標準偏差を示した(表4)。

第2回の事業において初めての参加者、2回目となる参加者ともに15名であった。この時、合計得点で初めての参加者は、43.80から48.93へと有意な上昇を示したが、2回目の参加者は42.67から45.47へと上昇を示したものの有意な変化には至らない結果となった(初めて: $t=2.13, P<.05$ 、2回目: $t=0.69, ns.$)。初めての参加者は、自尊感情得点の中でも特に、自己存在感・有能感が13.27から16.07と有意な上昇を示している($t=2.80, P<.01$)。全体得点の変化をグラフで表現した時も、傾きは明らかに初めて参

加した生徒の方が大きくなっている(図3)。

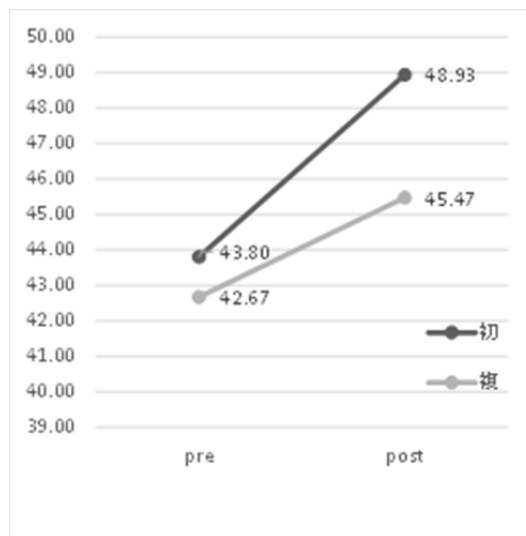


図3 複数回と初めての得点比較(第2回)

初めての参加者と2回目の参加者が、15名ずつと同数であったこと、またこの回のプログラムが、島への遠征等、初回と比べると活動量も多く、身体的な負担が大きくなったことなどが初めての参加者に比べ2回目の参加者の伸びが低くなった結果に影響を及ぼしたものと考えられる。

次に、第3回に関して同様に初めての参加者と複数回の参加者との比較を行う。なお、この複数回には、3回目の参加者3名も含まれることとなる。この時、初めての参加者3名に対し、複数回の参加者は16名との結果であった(前出表4.)。初めての参加者が3名であり、統計的解釈は困難であるが、合計得点で、初めての参加者は

表4 初めての参加者と複数回参加者との比較(2回目、3回目)

事業回数	参加頻度	項目	N	Pre		Post		T値	P
				平均	SD	平均	SD		
第2回	初めて	安心安全・受容感	15	16.80	2.08	17.87	17.87	1.40	n.s.
		自己存在感・有能感	15	13.27	2.76	16.07	2.71	2.80	**
		自己価値観	15	13.73	2.52	15.00	3.65	1.11	n.s.
		合計	15	43.80	1.59	48.93	7.31	2.13	*
第2回	2回目	安心安全・受容感	15	14.93	3.81	16.73	4.15	1.24	n.s.
		自己存在感・有能感	15	14.73	3.54	15.40	4.19	0.47	n.s.
		自己価値観	15	13.00	3.63	13.33	4.44	0.23	n.s.
		合計	15	42.67	10.18	45.47	11.96	0.69	n.s.
第3回	初めて	安心安全・受容感	3	16.00	3.46	19.67	0.58	1.81	n.s.
		自己存在感・有能感	3	15.00	2.65	16.67	1.16	1.00	n.s.
		自己価値観	3	13.67	1.53	15.00	1.00	1.27	n.s.
		合計	3	44.67	7.02	51.33	1.53	1.61	n.s.
第3回	複数回	安心安全・受容感	16	15.69	2.75	18.06	1.73	2.69	*
		自己存在感・有能感	16	15.00	2.28	16.38	2.47	1.64	n.s.
		自己価値観	16	14.13	2.39	14.63	3.14	0.51	n.s.
		合計	16	45.00	5.98	49.06	5.43	2.01	†

†: $p<.1$, *: $p<.05$, **: $p<.01$

44.67 から 51.33 へと上昇し、複数回の参加者は 45.00 から 49.06 へと有意な上昇傾向を示した (初 : $t=1.61, n.s.$; 複 : $t=2.01, p<.1$)。また、初めての参加者は安心安全・受容感で 16.00 から 19.67 へ上昇を ($t=1.81, n.s.$)、複数回の参加者は 15.69 から 18.06 への有意な上昇を示している ($t=2.14, p<.05$)。複数回の参加生徒の中には、3 回目の参加となる生徒も 3 名含まれるが、2 回目の活動的なプログラムに比べると季節の影響もあり、屋内での活動が多い内容であったこと、また複数回の参加者が 16 名と初めての参加者 3 名と比べ多かったことにより、事業開始時より「顔見知りが多い」との安心感があることがその場に存在した影響ではないかと考えられる。その安心感の中で初めての参加である 3 名に対してプラスの影響を及ぼし合計得点の比較で 3 回を通じ最大値に至ったのではないかと考えられる (図 4)。複数回参加している生徒が、不登校生徒を対象としたキャンプにおける「登校生徒の役割に近い働き」を担った結果ではないかとの考えに至った。

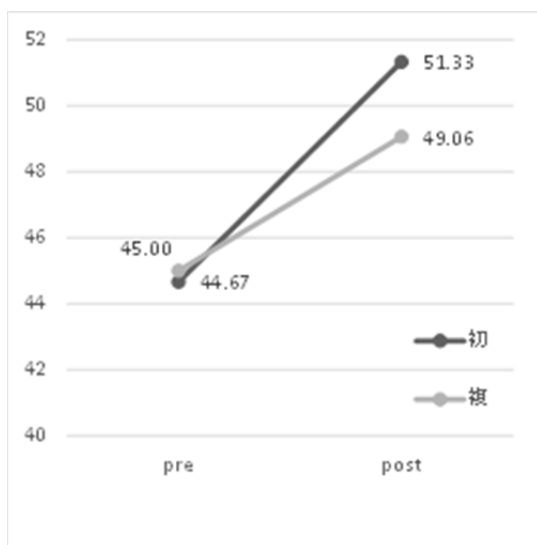


図 4 複数回と初めての得点比較 (第 3 回)

ここで、3 事業とも参加した 3 名に焦点化し分析を進める。A は 3 年生男子であり不登校継続年数は 2 年程度、B は 3 年生女子で不登校継続年数は 2 年以上、C は 2 年生で不登校継続年数は 1 年未満である。3 名の自己肯定感得点の変化は 1 回目より順に 39.43 から、43.00、42.00 から 42.67、41.33 から 50.33 へと第 3 回で大幅な上

昇を示している (図 5)。

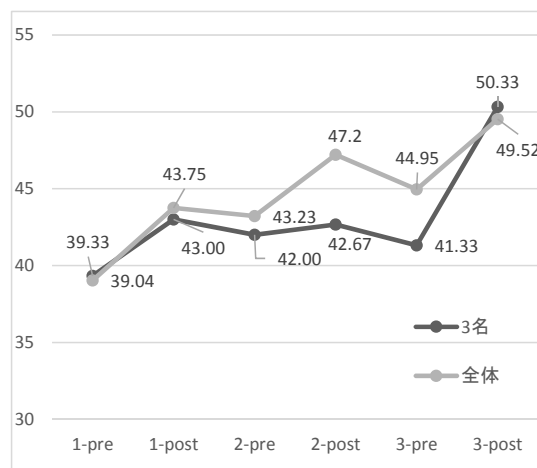


図 5 3 回全て参加生徒の得点変化

この時、2 回目の事前から 3 回事前までは停滞を示している。第 2 回の事業は 4 泊 5 日と期間も長く、活動内容も他と比べハードなものであった。しかし、この経験が第 3 回目での大幅な上昇につながった可能性もあるものとする。また、全体での比較においても合計点の推移から「前回の事業の効果」が、次回の事業まで継続される傾向が示されている。このことは、参加者が日常的に関わる適応指導教室での取り組みや、キャンプにも帯同した職員の方々の関わりによる影響があるものとする。本事業は、このように、社会教育施設が学校や適応指導教室との連携により実施したことによる特徴がある。そこで、次にキャンプ参加後の参加者の不登校改善状況から、直前参加事業における得点の変化を捉えることとする。

3.3. 不登校改善状況からの得点の比較検討

中学校、適応指導教室、そして社会教育施設が連携した本事業に参加した生徒 54 名のうち、本キャンプへの参加をきっかけとその後の不登校状態解消に関して、「変化なし」の生徒は、12 名 (22.2%) いるものの、好ましい変化が見えた、または適応指導教室へ通級する日が増えたとする「改善」の生徒が 20 名 (37.0%)、学校に登校できるようになった、または登校する日が増えた「復帰」の生徒は 15 名 (27.8%)、1 か月の学校の休みが 3 日以内になった「解消」の生徒は 7 名 (13.0%) との結果であり、復帰及び解消となっ

た生徒は合わせて 22 名 (40.8%) となった。

そこで、不登校改善状況から「変化なし」の 12 名と、「復帰・解消」の 22 名に対して、比較検討を行った (表 5)。

表 5 改善状況別の比較 (変化なしと復帰・解消)

	変化なし(n=12)		復帰・解消(n=22)		T値	P
	平均	SD	平均	SD		
開始年齢	11.92	13.11	13.41	0.80	3.60	**
継続年数	2.08	1.17	1.09	0.87	2.82	**
年齢	13.92	0.79	14.46	0.80	1.87	†
参加回数	1.41	0.67	1.36	0.58	0.24	n.s.
自己肯定合計	44.83	8.67	45.91	8.26	0.36	n.s.

*†:p<.1,**:p<.01*

不登校開始年齢では、「変化なし」が 11.92 歳に対し「復帰・解消」が 13.41 歳との有意な違いが認められた ($t=3.60, P<.01$)。また継続年数では、「変化なし」が 2.08 年に対し「復帰・解消」が 1.09 年と有意な違いが認められた ($t=2.82, P<.01$)。学校への復帰を目指した様々な支援に関して、「早期に対応することの重要性」が言われるが、本研究においても復帰・解消の改善を示す生徒は「中学入学後の不登校生徒で継続 1 年程度の者」との状況を示しているものと考えられる。一方、参加回数では、1.41 回と 1.36 回であり、差がない状況が示され、複数回の参加が必ずしも学校復帰にはつながっていないことを示す結果であった。また、自尊感情に関しても、44.83 と 45.91 であり、両群間に差は認められない結果であった。

ここで、3 回を通じて最も高い自尊感情得点を示した第 3 回についてのみ「変化なし」の生徒 4 名、「復帰・解消」の生徒 9 名を対象に比較検討を行うと、不登校開始年齢、継続年数及び参加回数に差は認められないものの、自尊感情得点で「変化なし」が 46.25 であるのに対し、「復帰・解消」では 52.22 と有意に高い値を示した ($t=2.48, p<0.5$) (図 6)。

また、この自尊感情得点のうち自己価値観の項目で、12.50 に対し 16.11 と有意な高さを示す結果であった ($t=2.13, p<.1$) (図 7)。

このことから、学校復帰につながる自尊感情得点に関して 50 点が示されるが、登校生徒に対する調査は実施されていないため、不登校解消に向けた、診断的基準としての設定はできない。しかし、ここで初めて「自己価値観の有意な上昇」が

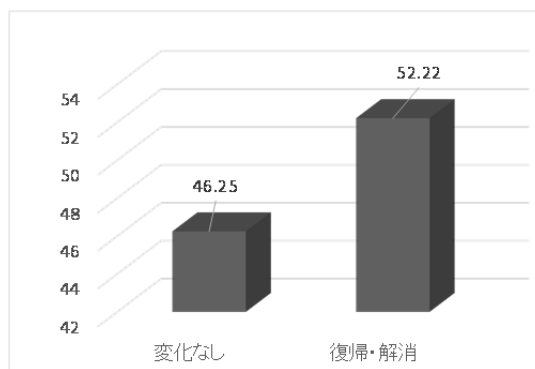


図 6 第 3 回での復帰状況別得点変化 (合計)

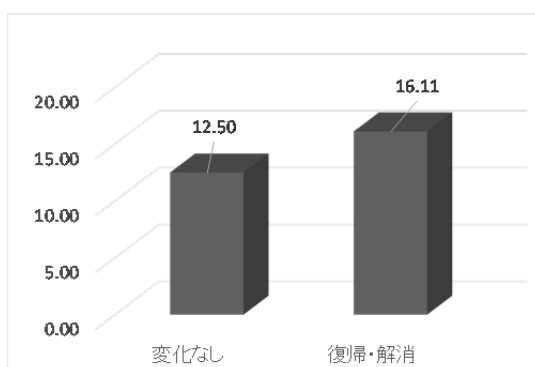


図 7 第 3 回での復帰状況別得点変化 (自己価値観)

示された。このことは、3 回の継続的事業で、「安心安全・受容感」から「自己存在感・有能感」へ、そして「自己価値観」との構成が適切であったことの表れではないかと考える。

本研究においては、キャンプ事業参加前の不登校状況は調査されていない。そのため、参加前の状態によって改善状況も当然変化してくるものと考えられ、今後の研究課題となるものと考えられる。

4. 結語

福岡県教育委員会が、学校や適応指導教室、そして社会教育施設と連携し、不登校中学生を対象として年間を通じて 3 回実施したキャンプについて検討を行った結果、

- 1) 各事業前後での比較において、自尊感情の有意な向上を示した。
- 2) この時、「安心・安全」「自己存在感・有能感」の項目においても有意な上昇を示した。
- 3) 回を経るに従い、キャンプ後の自尊感情得点は 43.75 から 47.20、そして 49.42 と上昇を

示し続けた。

- 4) 複数回の参加者と初めての参加者に分けて比較した結果、各回においては初めての参加者の方が自尊感情において有意な上昇が示された。
- 5) キャンプ後に不登校状況が「復帰・解消」となった生徒を対象に分析した結果、その背景として「中学入学後の不登校であり、継続年数も1年程度」との結果が示されたが、自尊感情の違いは認められなかった。
- 6) 第3回のキャンプ参加者を対象に不登校改善状況で比較した結果、自尊感情得点 52.22 点と最高値が示され、また自己価値観の上昇が背景として存在することが示唆された。

以上、6 点の知見に至った。

不登校を捉える際、家庭においては母親が、学校においては担任教員といった「個人が負いこむ状況」が示されることが多い。また、過去の不登校生徒児童を対象としたキャンプにおいても、キャンプ主催団体のみが関係している状況も多いものとする。教育手段としてのキャンプを捉える際、キャンプという非日常での体験からの成長を、いかに日常生活での成長に活用できるかが重要となる。そのためには、家庭や学校といった「日常的に関わる人々」との連携・協力が必要なこととなる。

今回、県教育委員会としての連携のもと、「日常と非日常との橋渡し」が実践され、不登校という社会的課題に対し効果が認められたことは、関係各機関の連携協力による、不登校生徒に対する学校復帰支援の有効性を示唆したものとする。不登校生徒の多くは、他者との関わりに困難さを抱えることがその原因の多くとされる。そのような状況にある不登校者に対し、個人や個別の組織・機関ではなく、様々な連携・協力により、「つながりから、つながりを育てる」ことを目的に学校復帰支援を展開していくことが必要ではないかとの考えに至った。

最後に、福岡県立少年自然の家「玄海の家」で社会教育主事として不登校生徒を対象としたキャンプに関わり、今回報告した福岡県教育委員会連携の礎を作られ、2015 年 3 月に急逝された福岡県小学校主幹教諭稲垣浩俊氏に追悼の意を表しご

冥福を祈ります。

付記：本研究は、平成 26 年度～平成 28 年度福岡大学研究推進部領域別研究「冒険教育研究チーム」（研究代表者：藤井雅人）による研究であり、記して感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2015）平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について、24-33
- 2) 堀出知里、飯田稔（2005）不登校児キャンプの実践方法の変遷、日本野外教育学会第 8 回大会プログラム研究発表抄録集、28-29
- 3) 飯田稔（1992）森林を生かした野外教育、林業改良普及双書 111、122-135
- 4) 堀出知里、飯田稔、井村仁（2004）2 週間のキャンプに参加した不登校中学生の友だち関係の展開課程、野外教育研究第 8 巻第 1 号、49-62
- 5) 堀出知里、飯田稔、井村仁（2004）2 週間のキャンプに参加した不登校中学生の友だち関係の展開課程に関する事例研究、野外教育研究第 8 巻第 1 号、63-76
- 6) 小田梓、坂本昭裕（2009）不登校児は長期冒険キャンプ後どのように社会へ適応していくのか、野外教育研究第 13 巻第 1 号、29-42
- 7) 築山泰典、藤井雅人（2009）年間継続事業としての不登校キャンプの効果 - ふりかえりとしての体験スピーチ会からの検討 -、福岡大学スポーツ科学研究第 40 号 1 号、11-22
- 8) 築山泰典、藤井雅人、中嶋友優、田中忠道（2010）年間継続事業としての不登校キャンプの効果 第 2 報 - ソーシャルスキルと生きる力からの検討 -、福岡大学スポーツ科学研究第 41 号 1 号、9-19
- 9) 岩瀬直樹、甲斐崎博史、伊垣尚人（2013）子どもたちが主役！プロジェクトアドベンチャーでつくとっても楽しいクラス、学事出版、56-69
- 10) 福岡県教育委員会（2014）、不登校中学生の学校復帰支援の手引き、22-23

資料 1 参加者状況確認リスト

フレッシュキャンプ 参加者状況確認リスト

この用紙は、1名の参加生徒に対し、班担当スタッフ2名が評価し、職員が把握・指導し活用することとします。
 評価は、キャンプ内の生徒の姿を捉えるためのものであり、順位付けや、優劣をつけるものではありません。
 キャンプ内での参加生徒の自主的な学びや奮起を称賛することを、この用紙の使用目的とします。

班 (参加生徒名:) 記録者:

確認項目	評価目安 1:課題が多い 2:課題がある 3:普通 4:良い 5:大変良い					最終日目標	行動目標目安
	初日 (7月10日)	2日目 (7月11日)	3日目 (7月12日)	4日目 (7月13日)	5日目 (7月14日)		
生活全般	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
目的活動での 集中・継続	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
目的活動での 集中・継続	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
他者との関わり (スタッフ)	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
他者との関わり (参加者)	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
自己への内省	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
自己の表現	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	

※初日夜に担当で相談し最終目標数値と行動を設定して下さい。
 (行動に関しては、具体的に簡潔に記入下さい。)

活動時の様子メモ

翌日以降につながる情報(活動内容との関わり、その時の様子等)をメモして下さい

初日:

2日目:

3日目:

4日目:

最終日(回収のキャンプにつながるような情報):

資料 2 自尊感情調査

アンケート(キャンプ前)

名前() (男・女) 年() 級()
 学年(中1 中2 中3)

・このアンケートは、このキャンプをよりよいものにしていくための調査です。
 学校の成績とはまったく関係がありません。
 ・下のそれぞれの質問について、自分がもっともあてはまると思うところから○印をつけてください。
 ・最近1週間の振り返りながら、あまり書えずきないで、ドンドン書えてください。

番号	質問	はい	少しはい	少しはいえ	いいえ
1	わたしの話しがければ みんな親切におうしてくれたいと思います。				
2	わたしは、やさしい人々にかこまれて けって1人ではないと思います。				
3	わたしは、他の人から「なにかまはすれに されている」と感じることはまずありません。				
4	わたしには、心をつらうあつて話ができる人 があまりいないように思います。				
5	「わたしは、何かにあさえつげられている」 という感じはあまりありません。				
6	わたしは、新しいともたちをつくるのは かんたんだと思います。				
7	わたしは、多くの人に好かれていると思います。				
8	まわりの人は、わたしをよくあそびに さそってくれます。				
9	わたしは、自分の役割をはたすことが とても大切なことだと思います。				
10	まわりの人は、あまり自分をあいてに してくれないと思います。				
11	わたしは、ものごとを人なみには (他の人と同じ位)うまくやれます。				
12	わたしは、自慢できるところが あまりありません。				
13	わたしは、自分のことが好きです。				
14	わたしは、だいたいにおいて、 自分に満足しています。				
15	わたしは、もっと自分自身を 尊敬(すごいと思う)できるとなりたいです。				

フレッシュキャンプ楽しみましょう!

テーマパークでの就業体験を利用した体験教育の試み ～ Kidzania 就業体験と野外教育の融合～

An Experience-Based Education Approach Utilizing Work Experience at a Theme Park: Integration of the KidZania Work Experience and Outdoor Education

甲斐知彦 (関西学院大学人間福祉学部)・関口陽介・秋山和子 (KCJ GROUP 株式会社)

KAI Tomohiko, SEKIGUCHI Yosuke and AKIYAMA Kazuko

We have reported that the work experience at KidZania was very similar to staff experience at organized camps, and there was also a similar educational impact as in outdoor education. In this study, we believed we could devise a new training-program approach with a higher educational impact by combining work experience at KidZania, a theme park, and outdoor education. We thus planned an educational program blending the two elements and then verified its impact. As a result, we observed a higher impact with the combined experience than with a single experience of either element in terms of both “Fundamental Competencies for Working Persons” and the ENDCOREs, a scale of communication skills, thereby suggesting the possibility that the fusion of the work experience at KidZania and outdoor education could generate a higher educational impact in Fundamental Competencies for Working Persons and communication skills.

Keywords : Outdoor education, Kidzania, work experience, Fundamental Competencies for Working Persons, communication skills

1. はじめに

近年、ディズニーリゾートをはじめとするテーマパークのスタッフのサービス提供に関する能力の高さが評価され、その育成方法に注目が集まっている²⁾。著者がオリエンタルランドが開催するディズニーアカデミーに参加し、その育成方法を確認したところ、概略としては、研修室での室内研修にはじまり、Off the Job Training、On the Job Training と展開されており、従来、キャンプリーダーを抱える組織が行ってきた研修制度⁶⁾と酷似しており、テーマパークと野外教育で行うスタッフ育成方法に大きな差はないと考えられる。さらにこれら二つは、非日常的な空間で展開されることも共通しており、ゲストやキャンパーに提供されるサービスや支援には多くの共通点が見ら

れる。

そして、同じくテーマパークに分類されるところのキッズニアでは、そのコンセプトが「Edutainment」となっており、「教育」という概念が非日常的な空間に持ち込まれた点では野外教育とより近い存在といえる。KCJ GROUP 株式会社が運営するキッズニア（東京、甲子園）は、「Edutainment」をコンセプトに、子どもたちが職業体験を通して、「働く」ということを楽しみながら学ぶことのできるテーマパークである。キッズニアには多くのスポンサー企業が参画し、その企業によって提供されたアクティビティを仕事として子どもたちが実際に体験する。体験した労働に対しては「キッズ」という賃金が支払われ、稼いだキッズはパーク内で使うことができ、社会

のお金の流れや社会の中での役割としての職業を、体験を通して学ぶことができる場である。その効果については既にこれまでの調査で示されているが⁷⁾、キッズニアで働く（体験する）子どもたちには様々な教育的効果があり、キッズニアは単なるテーマパークではなく、教育を行うテーマパークである。一方、提供者であるキッズニアの従業員（スーパーバイザー）は、他のテーマパーク同様、非正規雇用（アルバイト）が大半を占めている。そのため、働くまでの教育プログラムは、短期間で完成するようにデザインされ、効率よく人材を育成することができるものとなっている。スーパーバイザーの中には大学生も存在するが、この教育プログラムで高い能力を獲得し、学生ながらキッズニアの運営に欠くことができない存在となっている。多くの場合、アルバイトは、マニュアルに従って行動することのみが求められ、その組織のミッションを考えて自らが行動を作り出すことまでは要求されない¹²⁾。しかしながら、キッズニアでの就業は、スーパーバイザーの多くが非正規雇用のため、アルバイトといった立場に関係なくゲストに対応することが要求される。また、野外教育と同様に子どものみを預かり、アクティビティを展開するため、保護者の目は厳しく、子どもに不利益になることについては容赦なく指摘される。そのため、キッズニアでの就業は、他のアルバイトに比べ、多くのストレスにさらされることになり現場対応力やストレス耐性などを身につけるために役立つと考えられる。すなわち、キッズニアでは、ゲストである子どもだけでなく、提供者であるスーパーバイザーにとっても教育的効果を及ぼす可能性が考えられる。この点については、著者らにより既に示したとおりである⁸⁾。

そこで、本報では、これまでに多くの教育的効果が報告されているキャンプとキッズニアでの就業体験を融合させた研修プログラムの効果を検証し、新たな研修プログラムの開発、および野外教育の研修手段としての効果を確認することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査項目

2014年7月に実施された一般社団法人日本経済団体連合会（以下、経団連）の新卒採用（2014年4月入社対象）に関するアンケート¹³⁾において、企業が選考にあたって重視した点を問う設問で「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」が上位を占める結果となった。（図1参照）「コミュニケーション能力」は、10年連続で第1位となる結果であり、「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」についても、上位5項目として変化がない結果となっている。図1に示すとおり、特に「コミュニケーション能力」や「主体性」は、近年、その比重が大きくなっており、仕事をするための能力としての重要性が高まっていることがわかる。また、経済産業省では、2006年より、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」を提唱し、若者を取り巻く環境の変化が著しい現在において、「基礎学力」「専門知識」に加え、これらをうまく活用するための「社会人基礎力」の育成が重要であると述べている⁹⁾。「社会人基礎力」は、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力（さらに下位能力として、12項目がある）で構成され、先述の経団連の調査で企業が選考にあたって重視すると挙げた「コミュニケーション能力」をはじめ、上位を占めた能力（「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」「責任感」）を含む能力である¹⁰⁾。そのため、若者の「社会人基礎力」を醸成することは、社会に出て多様な人々と仕事をしていく上で求められる能力を獲

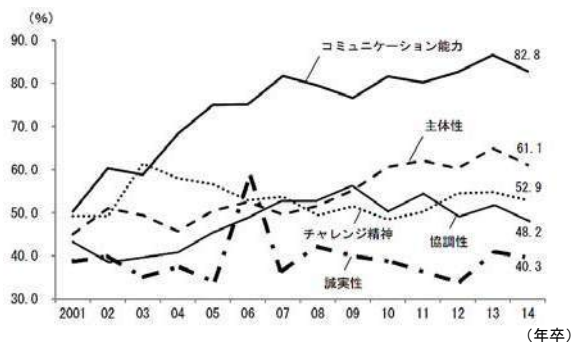


図1 「選考時に重視する要素」の上位の推移
(経団連調査)

得することとなる。

そこで、著者らは、本報での検証項目として、社会で生き抜く力、すなわち、「社会人基礎力」および「コミュニケーションスキル」を取り上げた。なお、社会人基礎力については、北島ら¹¹⁾が作成した36項目の質問からなる質問紙(6件法)を使用し、コミュニケーションスキルについては、コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsを用いて評価した。ENDCOREsは藤本ら³⁾によって開発されたコミュニケーションスキルを測定するための質問紙で、24項目の質問(6件法)から成り、基本スキルとしての「表現力」「解読力」「自己統制」、対人スキルとしての「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6つの能力を測ることができる尺度である。調査の実施については、調査実施者が質問文を読み上げ、回答者はそのペースにあわせて回答することとした。なお、得られた測定値に対する統計解析には、Excel統計2015を使用し、研修の事前、開始時、終了時の比較については一元配置分散分析を、タイプの異なる研修間についてはt検定を行った。また、本研究は関西学院大学研究倫理規定に基づき実施された。

2.2 対象

筆者とKCJ GROUP株式会社で企画した「キッズニア Spring インターンシップ 2015」(インターンシップの概要を参照)の参加者10名(平均年齢19.9歳±0.32歳)について、事前調査(平成27年1月6日)、研修開始時(平成27年3月13日)、研修終了時(平成27年3月31日)に「社会人基礎力」および「コミュニケーションスキル」について調査を実施した。なお、就業体験のみの研修に関する比較対象として、筆者らが同様に就業体験のみで行ったインターンシップ【対象:大学生10名(平均年齢21.1歳±0.32歳)】を、無人島のみの研修に関する比較対象として、筆者らが同様に行った無人島研修【対象:大学生11名(平均年齢20.7歳±1.01歳)】を採用し、就業体験および無人島研修をそれぞれ単独で実施する研修プログラムと両者を融合した研修プログラムで比較し、その効果を確認した。

(1) インターンシップの概要

本研究で調査対象としたインターンシップの概要は以下の通りである。

1. 就業体験のための研修(1日):平成27年3月13日

1日の日帰りプログラムとして、Kizania 甲子園の概要、就業のための研修を実施。

2. 就業体験 Stage1:平成27年3月16日~20日

週5日で実際にスーパーバイザーとして各パビリオンにて勤務。この期間では、各パビリオンでアクティビティを行うためのマニュアルをしっかりと理解し業務をこなすことが目標となる。

3. 就業体験 Stage2:平成27年3月23日~27日

前期間と同様に週5日でスーパーバイザーとして各パビリオンで勤務するが、この期間では、本来の仕事、すなわち、Missionを実現することを意識して業務にあたる。Kidzaniaのコンセプトは「Edutainment」であり、子どもたちに体験を通じた気づきを促し、そこから学ぶことをMissionとしているため、各アクティビティを行いつつ、このことを実施する期間となる。

4. 無人島研修:平成27年3月29日~31日

これまでの就業体験では提供者として、そして、マニュアルに従う形で研修に参加したが、この期間では逆に参加者として、そして、マニュアルのない研修に入る。すなわち、無人島の研修では、就業体験時とは、提供者ー参加者、マニュアルありーマニュアルなしといった点で真逆の体験をし、そこでの様々な気づきから自らが学ぶことを目指す期間とする。なお、キャンプスキルについては初日の午前中に研修し、無人島では安全に関する事項のみを伝達しマニュアルのない生活を送る。

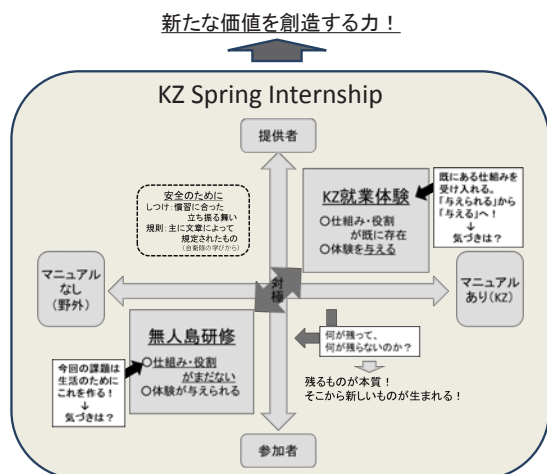


図2 本研修の考え方

なお、この研修では、図2に示すとおり、前半の就業体験では、提供者としてマニュアルに従い、ミッションを子どもたちに伝えることを意識させ、後半の無人島研修では、参加者としてマニュアルのない生活を送ることを体験させることとした。そのため、図2に示すとおり、体験は第1象限と第3象限にあたる対極の体験となるが、対極でありながら、両者に共通する事柄を見出し、そのことを気づきとして学ぶことを強調した。

(2) 比較に用いたプログラムの概要

比較体験1 (就業体験のみ)

1. 就業体験のための研修 (1日)：平成26年8月5日

研修室において、就業体験を行うにあたっての講義を受講。

2. Off the Job Training (1日)：平成26年8月6日

研修室において、就業体験を行うにあたっての仮想トレーニングを受講。

3. On the Job Training (1日)：平成26年8月7日

現場において、現役スタッフに指導を受けながら業務を学ぶ。

4. 現場での就業体験：平成26年8月8日～31日

週5日のペースでスーパーバイザーとして勤務する。

比較体験2 (無人島研修) (平成26年9月6日～9日)

キャンパススキルについては初日に研修を行

い、現地では安全に関する事項のみ伝達され、各自で考え無人島での生活を送る。そして、それらを通して、様々な気づきを生み、自らが学ぶことを目指す。

3. 結果

(1) 社会人基礎力

図3は事前調査から研修開始時、研修終了時の社会人基礎力の得点変化および比較体験の最終得点を、図4は事前調査から研修開始時、研修終了時および比較体験の社会人基礎力の下位因子の得点変化、すなわち、「アクション」「シンキング」「チームワーク」の変化を、そして、表1は下位因子を含む社会人基礎力得点および検定結果を示したものである。

図3および表1に示すとおり、事前調査時から研修開始時においては有意な変化は認められず、スタート時から研修終了時へは得点が上昇する結果となった (P < 0.01)。また、本研修後の得点は、同様に Kidzania 甲子園において行われた比較体験1 および無人島で実施された比較体験2 に比べ有意に高い結果となった (P < 0.01)。また、図4および表1に示すとおり、下位因子についても同様に、事前調査時から研修開始時においては有意な変化は認められず、無人島研修後の研修終了時へは得点が上昇する結果とな

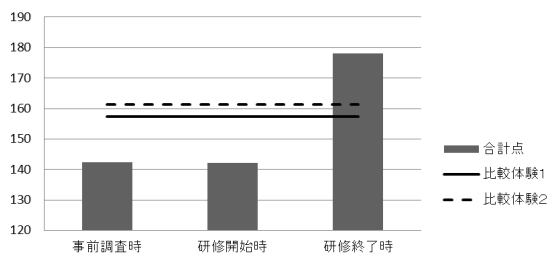


図3 社会人基礎力の得点変化

表1 社会人基礎力 (合計および下位因子) の得点変化および検定結果

	合計	アクション	シンキング	チームワーク
事前調査時	142.3	36.3	31.5	74.5
研修開始時	142.2	38.4	28.7	75.1
研修終了時	178	45	43.3	89.7
比較体験1	157.3	157.3	157.3	157.3
比較体験2	161.4	161.4	161.4	161.4
事前-開始時	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
開始時-終了時	**	**	**	**
就業体験のみとの比較	*	n.s.	*	*
無人島のみとの比較	*	n.s.	*	*

†: P<0.10 *: P<0.05 **: P<0.01

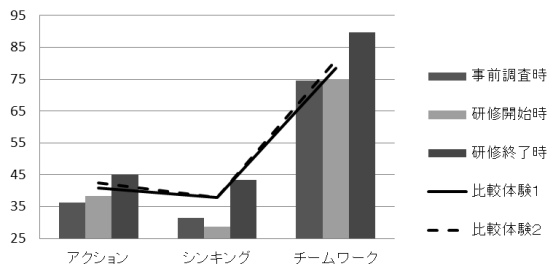


図4 社会人基礎力（下位因子）の得点変化

った ($P < 0.01$)。また、本研修後の各因子の得点は、比較体験1および比較体験2に比べ、シンキング、チームワークにおいて有意に高い結果となったが ($P < 0.01$)、アクションについてはその得点は高いものの統計的には有意ではなかった。

(2) コミュニケーションスキル

図5は、各因子間を比較するため、ENDCOREsによって得られた各スコアを藤本らが行った大学生に対する調査結果⁴⁾（「表現力」：4.32±1.37、「自己主張」：4.15±1.24、「解読力」：4.97±1.20、「他者受容」：5.34±0.97、「自己統制」：4.80±0.95、「関係調整」：4.99±1.03）に基づき、Tスコア化し、その変化を示したものである。また、表2はコミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsのTスコア変化および検定結果（検定にはTスコア化前の素点を用いた）を示したものである。図5および表2に示すとおり、事前から研修開始時までの変化は各因子によって様々であるがその変化が統計的に有意であったものは「関係調整」であり、有意な低下であった ($P < 0.01$)。また、研修開始時から終了後の得点については上昇が確認でき、その上昇は統計的に有意であった ($P < 0.01$)。なお、本研修後の各因子の得点は、比較体験1および比較体験2に比べ高い結果となったが、その変化が統計的に有意であったものは比較体験1については、「表現力」「自己主張」「他者受容」 ($P < 0.05$)、「自己統制」「完成調整」 ($P < 0.01$)「解読力」(有意傾向)であり、比較体験2では、「他者受容」(有意傾向)のみとなった。また、藤本ら⁴⁾が示す大学生の基準値については無人島研修後の研修終了時には全ての項目で上回る結果となった。

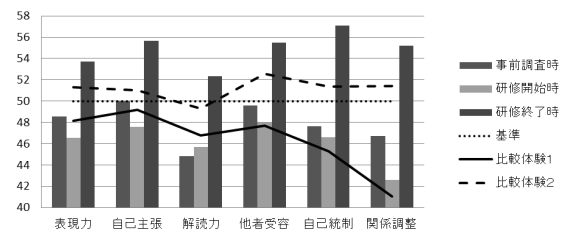


図5 ENDCOREsの得点変化（Tスコア）

表2 コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREsの得点変化および検定結果

	表現力	自己主張	解読力	他者受容	自己統制	関係調整
事前調査時	48.6	50.0	44.8	49.6	47.6	46.7
研修開始時	46.6	47.6	45.7	48.0	46.6	42.6
研修終了時	53.7	55.6	52.3	55.5	57.1	55.2
基準	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0
比較体験1	48.2	49.2	46.8	47.7	45.3	41.0
比較体験2	51.3	51.0	49.3	52.6	51.4	51.4
事前-開始時	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**
開始時-終了時	**	**	**	**	**	**
就業体験のみとの比較	*	*	†	*	**	**
無人島のみとの比較	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	*

T: $P < 0.10$ * : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$

4. 考察

(1) 社会人基礎力

社会人基礎力の向上について、青木ら¹⁾は、大学生に対し、3泊4日のキャンプ実習を実施し、その参加者の社会人基礎力が向上したことを報告している。青木は、大学生の社会人基礎力が向上した理由を実習中に主体的行動が求められたこと、グループメンバーの意見をしっかり聴くことといった行動の積み重ねが社会人基礎力の向上に繋がったと述べている。本報の研修では、就業場面においてはMissionを伝えるという点でStage2で主体的に行動することが求められ、ゲスト、同僚に対する傾聴はStage1、Stage2ともに求められる。さらに無人島研修では安全に関するのみが示された後、各自が考えて無人島での生活を過ごすため、自ずと主体的になるとともにメンバー間の情報交換が積極的に行われた。そのため、これらのことから青木らと同様に社会人基礎力の向上を認める結果になったのではないかと考えられる。また、北島ら¹¹⁾は、看護学生の社会人基礎力について報告しており、高校から引き続き入学した学生よりも社会での就業後、入学した社会人学生の方が社会人基礎力が高いことを報告している。このことは社会での就業体験が社会人基礎力を高めることを示しており、本報での社会人基礎力の向上は、キッザニア甲子園での就業体験が実際の社会での就業に近い形で実施された

ことを物語るものと考えられる。そして、この就業体験での成果の上に無人島での体験効果が加わり、比較体験1、比較体験2を越える成果が得られたのではないかと考えられる。

(2) コミュニケーションスキル

ENDCOREsによるコミュニケーションスキルの変化について、藤本⁴⁾が実施した大学生の調査結果を基準と考えれば、本報の対象者は、研修スタート時においては、全ての項目で基準値を下回っていたが、無人島研修後の研修終了時には全ての項目で有意に上昇し、基準を上回ることとなり、本研修がコミュニケーションスキルを向上させたことがわかる。藤本⁵⁾はより多くのコミュニケーション経験がスキルの改善に繋がると述べており、本報でのコミュニケーションスキルの向上は、就業体験のみならず、無人島研修をあわせることで多様な体験を行うことができ、その中で多くのコミュニケーション経験が積み重ねられ向上したものと推察される。また、藤本⁵⁾は、コミュニケーションスキルについて、全ての項目で得点が高い「万能型」、表出系スキルの得点は低いがその他の項目が高い「受動型」、反応系スキルは低いがその他の項目が高い「能動型」については、自分のタイプを認識した上でその場に応じた話者役割（発話行為の主体である会話が会話コミュニケーションにおいて果たす機能）を果たせばよいが、その他のパターンを示すコミュニケーションタイプについては、コミュニケーションスキルを向上させることが望ましいと述べている。そのため、本報の研修参加者は、全ての項目が高い「万能型」となり、さらに基準値を上回っていることから自分のタイプを認識し、その場に応じた話者役割を果たせばよい域に達したと考えられる。

5. まとめ

本研究では、我々はこれまでにキッザニアにおける就業体験がキャンプでのスタッフ体験に酷似していることを報告し、その効果がキャンプにおけるものと同様にあることを報告した。そこで、本研究では、新たな試みとしてテーマパークであるところのキッザニアでの就業体験と野外教育を融合することでより高い教育的効果が現れる研修

プログラムになるのではないかと考え、キッザニアでの就業体験と野外教育を融合した教育プログラムを企画し、その効果を検証した。具体的には、2週間にわたるキッザニア甲子園での就業体験と無人島での野外教育をあわせたプログラムを作成し、その前後の社会人基礎力およびコミュニケーションスキルの変化を検証した。そして、その結果、「社会人基礎力」、および「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs」において、それぞれを単独で行うプログラムより高い効果が得られることが確認され、キッザニアでの就業体験と野外教育の融合が社会人基礎力およびコミュニケーションスキルの獲得に、より高い教育的効果を生む可能性を示唆する結果となった。

【引用文献】

- 1) 青木康太郎、粥川道子、杉岡品子（2012）キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 第3号 pp27-39
- 2) 福島文二郎（2010）9割がバイトでも最高のスタッフに育つディズニーの教え方、中経出版
- 3) 藤本学、大坊郁夫（2007）コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み、パーソナリティ研究 第15巻第3号 pp347-361
- 4) 藤本学（2013）コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討、パーソナリティ研究第22巻第2号 pp156-167
- 5) 藤本学（2014）スキルとしてのコミュニケーション（大坊郁夫編「幸福を目指す対人社会心理学」、ナカニシヤ出版）、pp207-209
- 6) 今井正裕：「キャンプディレクター必携」第3章キャンプの指導者と指導技術 2. キャンプ指導者養成の実際 キャンプディレクター必携 日本キャンプ協会 2006年4月
- 7) KCJ GROUP 株式会社（2014）：キッザニア白書 2014
- 8) 甲斐知彦、関口陽介、秋山和子（2015）キャンプリーダーの視点から見た就業体験が学生に及ぼす影響—キッザニア甲子園での就業

- 体験から得られたもの— 身体運動文化論攷
14 巻 pp.29-39
- 9) 経済産業省 (2010) 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査、平成 21 年度就職支援体制調査事業
 - 10) 経済産業省 (2006) 社会人基礎力説明資料、
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
 - 11) 北島洋子、細田泰子、星和美 (2011) 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討、大阪府立大学看護学部紀要
17 巻 1 号 pp13-23
 - 12) 松尾豊 (2015) 人工知能は人間を超えるか、株式会社 KADOKAWA、53-56
 - 13) 日本経済団体連合会 (2014) 新卒採用 (2014 年 4 月入社対象) に関するアンケート調査結果の概要

キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす 効果に関する研究

A Study on Safety Education in Camp Improve Risk Perception Capabilities of Participant.

青木康太郎（北翔大学） 横山 誠（大阪国際大学） 粥川道子（北翔大学）

Kotaro Aoki (Hokusho University) Makoto Yokoyama (Osaka International University)
Michiko Kayukawa (Hokusho University)

This study is a basic research to develop new training system to improve the safety management capacity of nature experience activity leaders. Therefore, in this study, conducted research on risk perception by using the KYT (Kiken Yochi Training) sheets for camp participants, it is possible to verify the change in risk perception rate before and after the camp, clarify the effect of safety education in the camp is on the improvement of the risk perception capabilities. Subject of research was a university student 112 people who participated in training camp of 2014. The research was conducted using a questionnaire (KYT sheets) to pre and post camp training. KYT sheets used by research was "Wood-Chopping" and "Outdoor Cooking" to experience in the camp training, and "Outing to the riverside" to not experience.

The results of this study, the following things became clear.

- Experienced "Outdoor Cooking" in the camp has improved risk perception of participants than not experienced "Outing to the riverside".
- Experienced "Outdoor Cooking" in the camp has improved the recognition for the hazard such as "That firewood is messy" and "leave them newspaper" , on the other hand, not experienced "Outing to the riverside" has improved the recognition for the overt danger such as "Tree stuck the nail" and "Broken glass bottle" .
- Safety education in the natural experience activities has improved the risk perception capability of participants. In particular, activities that are experienced in the camp improved the cognitive ability for hazard.

Keywords : Nature Experience Activity Leader, Training Camp, Safety Education Risk Perception

1. 緒言

近年、学校教育や社会教育の現場において自然体験活動の充実が図られるなか、浜名湖カッターボート転覆事故のように、指導者のヒューマンエラーによる重大事故の報道も後を絶たない。このような重大事故を未然に防ぐためには、自然体験活動の安全管理に関する正しい知識とそれを実践できる技術を身につけた指導者を養成していかなければならない。

自然体験活動におけるリスクマネジメントのプロセスは、「危険因子の発見・把握」→「危険因子の評価」→「危険因子への対処」と言われており、最初の段階で危険因子が発見されなければその後のプロセスにつながらないことから、安全管理において危険認知は最も重要な段階とされている¹⁾。こうした危険認知能力の代表的なトレーニング法としては、全国子ども会連合会が作成した危険予知トレーニングシート（KYTシート）が

挙げられるが、活動中の様子を表現したイラストでは刻一刻と変わる実際の活動場面をイメージしづらいという課題があり、より実践に近い新たなトレーニング法の開発が望まれている。そこで甲斐(2010)は、KYTシートより一歩進んだトレーニング法として実際の活動の様子を撮影した動画を用いて危険予知トレーニングを試行し、動画によるトレーニングのほうがより現実に近い形で危険予知ができることを明らかにした²⁾。このような指導者の危険認知能力については指導経験等の多寡によって差が生じやすいことも先行研究³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾で示唆されており、最近では危険認知やそのトレーニング法に関する研究も徐々に行われるようになってきた。しかし、実際に青少年教育施設や民間団体等で行われている指導者養成講習会やリスクマネジメント研修会の現状を概観すると、こうした研究の成果が活用され、安全管理に関する科学的なトレーニング理論や効果的なトレーニング法が確立されているとは言い難い状況にある。

危険認知能力は安全に関する知識や技術だけでなく、時には指導者の経験や勘に頼る部分も大きい。実践的な危険認知能力の向上を図るためには、活動現場でのOJT(On the Job Training)が最も効果的な手段となる。しかし、経験や勘に頼るところが大きい故、OJTでは単に指導経験を重ねることだけになってしまいやすく、どのように活動状況を把握し、危険な行為や箇所を素早く的確に認知するにはどのようにしたらいいかといった危険認知に関する科学的な方法論は未だ確立されていないのが現状である。そのため、今後、より実践的で効果的なトレーニング法を開発するためには、こうした危険認知の在り方を科学的に検証し、指導者の安全管理能力を効果的に高める方法論を明らかにしていかなければならない。そこで、筆者らは、OJTによる危険認知能力のトレーニング効果の一端を探るため、自然体験活動における安全教育に着目した。

安全教育とは参加者が主体的な安全行動をとることができるように教育することであり、その方法には安全学習と安全指導がある。安全学習とは事前に野外活動における基礎的な安全の知識や適切な意思決定ができる態度を養うものであり、安全指導とは野外活動を通して野外における安全に

関する問題に対して安全な行動のあり方を学び、積極的に安全行動様式が取れるように導くことといわれている⁷⁾。自然体験活動の指導に当たっては、活動そのものの知識や技術を教えるだけでなく、活動中に生じる危険やそれを回避する方法も教えるなど適切な安全指導を行っていかねばならない。このような安全指導は、活動中の事故やケガのリスクを軽減させ、活動の安全性を高める有効な手段になるが、そのためには、いかに危険認知能力を高め、今後の安全行動に結びつけていくのがポイントになる。渡邊(2011)は、安全に対する態度が身につけていない参加者は危険を避ける行動はおろか何が危険であるかさえも判断できないと指摘しており、安全教育を行うにあたってはどこにどういった危険があるかを実践現場の生の教材を使って指導することが効果的だと述べている⁸⁾。

自然体験活動における安全指導が参加者の危険認知能力の向上や安全行動の改善に影響を及ぼしていることはこれまでも数多く示唆されているが、こうした安全指導の教育効果を科学的に検証した研究は数少ないといえる。今後より実践的で効果的なトレーニング法の開発が望まれるなか、自然体験活動の実践現場で行われる安全教育が参加者の危険認知能力に及ぼす影響を明らかにすることで、指導者の安全管理能力を向上させる新たなトレーニングシステムの開発に資する基礎資料を得ることができると考える。

II. 研究目的

本研究は、キャンプの参加者を対象に危険予知トレーニングシート(KYTシート)を用いた危険認知テストを行い、キャンプ前後の危険認知率の変容を検証することで、自然体験活動における安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 調査対象

(1) 調査対象者

調査対象は、平成26年度にH大学で行われた野外教育実習(3泊4日のキャンプ)に参加した大学生112名とした。当該実習はH大学の中学

校及び高等学校教諭 1 種免許（保健体育）養成課程の必修科目であるが、実習生の 3 分の 1 程度は教員養成課程を履修していない学生であった。

分析対象者は、全プログラムに参加し、データの欠損がなかった参加者に限定した結果、110 名（有効回答率 98.2%）となった。

(2) 平成 26 年度野外教育実習の概要

当該実習の目的は次の 3 つであった。①様々な活動や課題にグループで挑戦することで、グループにおける自分の役割を発見する力や使命感、責任感を養うとともに、社会性やコミュニケーション能力の育成、自ら主体的・積極的に行動する態度や意識をはぐくむ。②野外活動を通じて自然の素晴らしさや大切さに対する気づきを促し、環境保全意識の向上を図る。③野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得させる。

実習期間は 3 泊 4 日であるが、参加者が多かったため 112 名を前半 56 名（9 月 9 日～12 日）、後半 56 名（9 月 13 日～16 日）に分け、表 1 に示したプログラムをそれぞれ実施した。実習期間中はすべてテント泊で、食事の大半は野外炊事となっている。メインプログラムは、2 日目の ASE（Action Socialization Experience）と 3 日目の北日高岳登山である。実習期間中は、毎晩ふりかえりの時間を設け、その日に感じたことや気づいたことを意識化させるとともに、グループ内で気づきを共有するよう指導を行った。班編成は、部活動や所属ゼミ、出身校が異なるように配慮し、1 班 8～9 人の男女混合班とした。各班にはトレーニングを受けた上級生がグループカウンセラーとして配置され、各活動や生活場面において当

該実習の目的が達成されるよう適宜必要な指導を行った。

2. 調査方法

調査期間は平成 26 年 9 月 9 日から 9 月 16 日とし、実習の事前（前半：9 月 9 日、後半 9 月 13 日）と事後（前半：9 月 12 日、後半 9 月 16 日）に自記式の質問紙を用いて集合調査で危険認知テストを実施した。

3. 調査内容

危険認知テスト用の質問紙（図 1）は、全国子ども会連合会が作成した危険予知トレーニングシート（KYT シート）を用いて作成した。危険認知テストに採用した活動場面は、実習で実施する「薪割り」、「野外炊事」の場面と実習では実施しない「川遊び」の場面とした。実際に活動する「薪割り」、「野外炊事」は活動を始める前に安全教育として活動中に起こりうる事故やケガとその対処法について指導することから実習後は参加者の危険認知率が有意に向上することが予想される。そこで実習で活動をしない「川遊び」の危険認知率



図 1 危険認知テスト（質問紙）

表 1 主なプログラムの流れ

	1 日目	2 日目	3 日目	4 日目
午前		朝のつどい 朝食（野外炊事） ASE ・イニシアティブゲーム ・ローエレメント	朝のつどい 朝食（野外炊事） 北日高岳登山	朝のつどい 朝食（弁当） テント等の撤収 マインドクローキー グループシェア
午後	開講式 アイスブレイキング ビーイング テント等の設営 夕食（野外炊事）	↓ 昼食（おにぎり） ↓ 夕食（野外炊事）	↓ 昼食（弁当） ↓ 夕食コンテスト	↓ 昼食（弁当） 閉講式
夜	ふりかえり	ふりかえり	ふりかえり	

と比較し、それぞれの変容の違いを検証することで、安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響を明らかにできると考えた。

危険認知テストの手順(図1参照)は、指導者として野外活動の指導や監視を行っているという想定でイラストを見るよう教示した上で、作業①として、野外活動(薪割り、野外炊事、川遊び)のイラストを30秒間見せ、その間に「危ない」、「ケガをしそう」と感じるところがあれば、その箇所を○で囲うよう指示した。次に、作業②として、イラストに書いた○印に1から順に番号をつけさせ、理由欄の番号に合わせて「危ない」、「ケガをしそう」と感じた理由を書くよう指示した。なお、イラストにつけた○印が10個以上のあった場合、理由は10個まででいいこととした。

この作業を活動場面ごとに繰り返し、危険認知テストを行った。

4. 危険認知率の算出方法

プレテスト(学生スタッフ25名)の結果をもとに3人以上が指摘した危険箇所をまとめたところ、各活動場面の危険箇所数は「薪割り」が8箇所(図2)、「野外炊事」が10箇所(図3)、「川遊び」が9箇所(図4)となった。

この危険箇所数を基準に、参加者ごとに危険認知率(認知した件数÷活動場面の危険箇所数×100)を算出した。その際、こちらが想定した危険箇所に該当しない箇所を選んだ場合はその他と

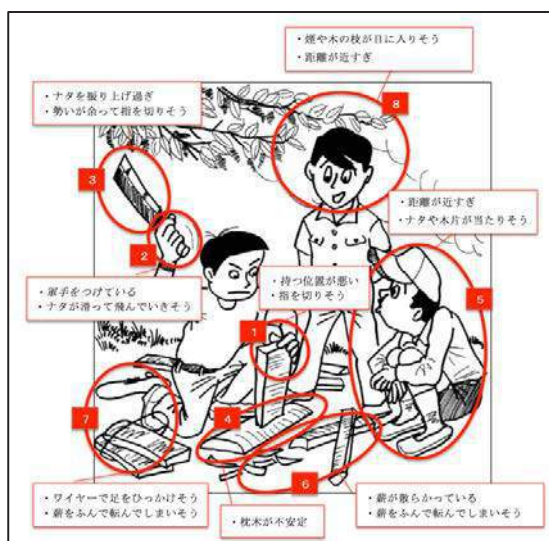


図2 「薪割り」の危険箇所

して扱い、危険認知率の算出からは除外した。また、危険認知率の変容の要因を検証するため、各活動場面の危険箇所に対する認知率(認知した人数÷N×100)を算出した。

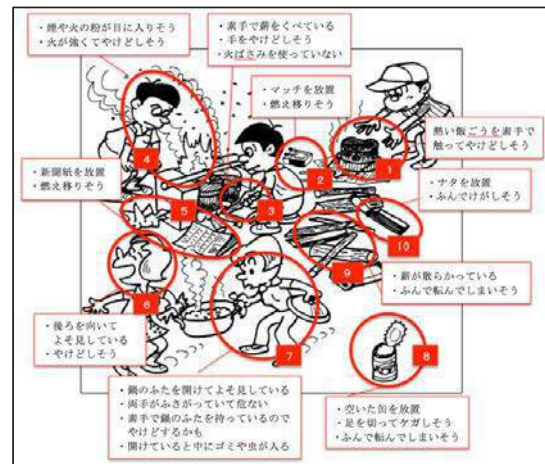


図3 「野外炊事」の危険箇所

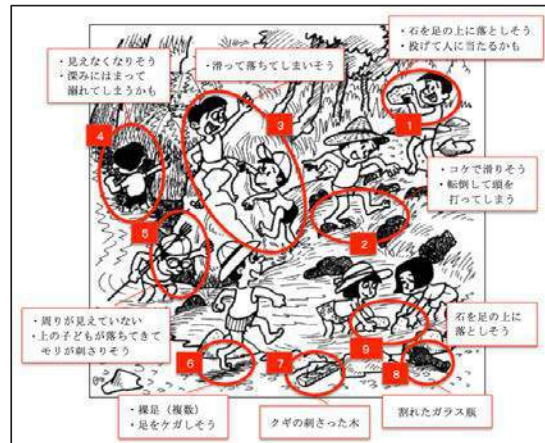


図4 「川遊び」の危険箇所

5. 分析方法

各活動場面(薪割り、野外炊事、川遊び)における参加者の危険認知率の変容の違いを明らかにするため、測定時期ごとに各活動場面における参加者の危険認知率の平均(M)及び標準偏差(SD)を算出し、参加者の危険認知率を従属変数、測定時期と活動場面を要因とした二要因混合計画の分散分析(AsB-Type Design)を行った。なお、交互作用に有意差が認められた場合、後の分析として多重比較(Bonferroni)を行うこととした。また、各活動場面の危険箇所ごとに危険認知率を算出し、測定時期(事前、事後)でその割合の差を比較することで、どの危険箇所の認知率が最も向

上したのかなどを検証し、危険認知率の変容の要因を明らかにすることとした。

統計処理は SPSS statistics 19 を用いて行った。

III. 結果

1. 各活動場面における参加者の危険認知率の変容

各活動場面における参加者の危険認知率の変容は図5に示したとおりである。分析の結果(表2)、測定時期 (F (1,327) =216.4 p<.001) と活動場面 (F (2,327) =79.7 p<.001) の主効果、交互作用 (F (2,327) =21.0 p<.001) に0.1%水準で有意差が認められた。

そこで、後の分析として多重比較を行った結果、測定時期の単純主効果では、事前 (F (2,327) =66.4 p<.001)、事後 (F (2,327) =60.0 p<.001) ともに0.1%水準で有意差が認められ、事前では「薪割り<川遊び」と「川遊び<野外炊事」となり、事後では「薪割り<川遊び」「薪割り<野外炊事」「川遊び<野外炊事」という結果となった。また、活動場面の単純主効果では、薪割り (F (1,327) =115.8 p<.001) と野外炊事 (F (1,327) =132.3 p<.001) に0.1%水準、川遊び (F (1,327) =10.4 p<.01) に1%水準で有意差が認められ、すべての活動場面で「事前<事後」という結果であった。



図5 各活動場面における参加者の危険認知率の変容

表2 各活動場面における参加者の危険認知率の平均 (M) 及び標準偏差 (SD) と分散分析の結果

活動場面	N	事前		事後		分散分析 (F)		
		M	SD	M	SD	測定時期	活動場面	交互作用
薪割り	110	29.3	14.1	45.9	15.0	216.4***	79.7***	21.0***
野外炊事	110	50.4	15.4	68.1	16.1			
川遊び	110	46.3	13.5	51.2	16.1			

***p<.001

2. 各活動場面の危険箇所に対する認知率の変容

各活動場面の危険箇所に対する認知率を実習の前後で比較したところ、「薪割り」(表3)で認知率が最も大きく向上した危険箇所は「6.薪が散らかっている」(29.1ポイント向上)で、次いで「5.距離が近すぎる」(29.0ポイント向上)、「2.軍手をつけている」(28.2ポイント向上)であった。次に「野外炊事」(表4)をみると「9.薪が散らかっている」(34.5ポイント向上)が最も大きく向上しており、次いで「5.新聞が置きっぱなし」(30.9ポイント向上)、「4.煙や火の粉が目に入りそう」(22.7ポイント向上)、「川遊び」(表5)では「7.釘の刺さった木」(17.3%)が最も大きく向上しており、次いで「8.割れたガラス瓶」(12.7ポイント向上)、「5.モリをもっている」(7.3ポイント向上)となっていた。

IV. 考察

本研究は、野外教育実習(3泊4日のキャンプ)の参加者を対象にKYTシートを用いた危険認知テストを行い、実習前後における危険認知率の変容を検証することで、自然体験活動における安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

参加者の危険認知率の変容を実習前後で比較した結果、実習で実施した「薪割り」、「野外炊事」だけではなく、実習で実施しなかった「川遊び」にも有意な向上が認められた。しかし、それぞれの変容の傾向には有意な違いが認められ、特に「野外炊事」と「川遊び」の危険認知率の変容を比較すると、実習前は「野外炊事」と「川遊び」の間に有意な差がみられなかったのに対し、実習後は「野外炊事」のほうが有意に高くなっていた。このことから、実習で実施した「野外炊事」のほうが参加者の危険認知率が大きく向上していること

表3 「薪割り」の各危険箇所における危険認知率の変容

危険箇所	参加者 (N=110)		
	a. 事前	b. 事後	(b-a)
1. 薪を持つ位置が悪い	66.4	74.5	8.1
2. 軍手をつけている	17.3	45.5	28.2
3. ナタを振り上げすぎ	28.2	40.0	11.8
4. 枕木が不安定	38.2	31.8	-6.4
5. 距離が近すぎる	55.5	84.5	29.0
6. 薪が散らかっている	12.7	41.8	29.1
7. 薪のワイヤーが放置されている	7.3	22.7	15.4
8. 煙や木の枝が目に入りそう	9.1	26.4	17.3

表4 「野外炊事」の各危険箇所における危険認知率の変容

危険箇所	参加者 (N=110)		
	a. 事前	b. 事後	(b-a)
1. 素手で飯ごうを触ろうとしている	70.9	80.0	9.1
2. マッチが置きっぱなし	51.8	65.5	13.7
3. 素手で薪をくべている	10.9	30.0	19.1
4. 煙や火の粉が目に入りそう	70.0	92.7	22.7
5. 新聞が置きっぱなし	55.5	86.4	30.9
6. 後ろを向いてよそ見をしている	87.3	86.4	-0.9
7. 鍋のふたを開けてよそ見をしている	22.7	36.4	13.7
8. 開いた缶が置きっぱなし	71.8	84.5	12.7
9. 薪が散らかっている	18.2	52.7	34.5
10. ナタが置きっぱなし	44.5	66.4	21.9

表5 「川遊び」の各危険箇所における危険認知率の変容

危険箇所	参加者 (N=110)		
	a. 事前	b. 事後	(b-a)
1. 石を足の上に落としそう	75.5	75.5	0.0
2. コケで滑りそう	71.8	68.2	-3.6
3. 滑って落ちてしまいそう	82.7	85.5	2.8
4. 見えなくなりそう	81.8	84.5	2.7
5. モリをもっている	49.1	56.4	7.3
6. 裸足	16.4	21.8	5.4
7. 釘の刺さった木	20.9	38.2	17.3
8. 割れたガラス瓶	10.9	23.6	12.7
9. 石を足の上に落としそう	7.3	7.3	0.0

が明らかとなった。また、「野外炊事」と「川遊び」の危険箇所に対する認知率の傾向を比較したところ、「野外炊事」では「薪が散らかっている」や「新聞が置きっぱなし」といった潜在危険に対する認知率の向上が大きかったのに対し、「川遊び」では「釘の刺さった木」や「割れたガラス瓶」といった顕在危険に対する認知率が大きく向上していることが分かった。

顕在危険とは「見ただけで危険があることが分かるもので、認識されやすい危険」で、潜在危険とは「一見安全そうにみえる場所や物に潜む、認識されにくい隠れた危険」といわれている。こうした潜在危険について、近藤（2011）は、ケガや事故等を誘引するのはほとんどが潜在危険で、潜在危険に気づけるようになるかが安全な活動をめざすうえでカギを握っていると指摘してお

り⁸⁾、村越(2002)は野外活動の経験が浅い指導者は経験豊富な者に比べると潜在危険を見逃しやすい傾向にあることを明らかにしている⁹⁾。つまり、自然体験活動の安全教育において大切なことは、活動中に生じる潜在危険をいかに見逃さないようにするか、またそれらにいかにつけるようにするのかということにあるといえる。こうした活動中の安全教育について、渡邊(2011)は、参加者に危険の存在を教えるため実践現場の生の教材を使って指導することは単に知識として危険を教えるよりも何倍もの効果があると指摘している¹⁰⁾。野外教育実習は「野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得させる」ことを目的のひとつとしていることから食事はほぼ毎食野外炊事としており、参加者は4日間繰り返し野外炊事を経験している。その際、参加者に対し、薪割りでは「危険な箇所、ケガをしやすい部分の周知」、「薪は散らかさずに一か所にまとめる」、野外炊事では「かまどの横や後ろには行かず、覗き込まない」、「かまどの周りには燃えやすいものを置かず、一か所にまとめておく」といった安全指導が徹底して行われている。筆者らは、平成23年度に行われた同実習でキャンプ体験による自然体験活動の指導力の向上について検証を行い、キャンプ体験によって「野外活動の技術」が最も大きく向上することや半数以上の参加者が野外炊事の指導について自信を持てるようになったことを明らかにしている¹¹⁾。以上を踏まえると、参加者は4日間繰り返し野外炊事を経験し、薪割りや野外炊事について徹底した安全指導を受けたことで、野外炊事に関する基礎的な知識や技術が身につく、それによって潜在危険に対する認知率も大きく向上したのではないかと推察される。

上記の結果より、薪割りや野外炊事といった実体験を通じて安全教育を行うほど危険認知能力は向上し、特に実際に体験した活動については潜在危険に対する認知能力が大きく向上していることが明らかになった。

V. 結論

本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- ① 「野外炊事」と「川遊び」における危険認知率の向上を比較すると、実習前は「野外炊事」

と「川遊び」の危険認知率の間に有意な差がみられなかったのに対し、実習後は「野外炊事」のほうが有意に高くなっていたことから、実習で実施した「野外炊事」のほうが参加者の危険認知率が大きく向上していることが明らかとなった。

- ② 「野外炊事」と「川遊び」の危険箇所に対する認知率の傾向を比較すると、「野外炊事」では「薪が散らかっている」や「新聞が置きっぱなし」といった潜在危険に対する認知率の向上が大きかったのに対し、「川遊び」では「釘の刺さった木」や「割れたガラス瓶」といった顕在危険に対する認知率が大きく向上していることが分かった。

- ③ 薪割りや野外炊事といった実体験を通じて安全教育を行うほど危険認知能力は向上するが、実際に体験した活動ほど潜在危険に対する認知能力が大きく向上していることが明らかになった。

以上、自然体験活動における安全教育が危険認知能力の向上に及ぼす影響を明らかにできたことは、OJTによる危険認知能力のトレーニング効果の一端を明らかにすることにつながるものであり、今後、自然体験活動指導者の安全管理能力を向上させる新たなトレーニングシステムの開発に資する基礎資料になると考える。

しかし、既に述べたとおり、KYTシートには刻一刻と変わる実際の活動場面をイメージしづらいという課題があるため、それを代用した危険認知テストでは活動中に生じる実際の危険を正確に認知できているかという点で課題が残った。事故の予兆である「ヒヤリ・ハット」は、不安全な状態・行為に潜む危険が顕在化することによって起きるものである。つまり、活動中に生じる危険はKYTシートのように常に目に見え止った状態で存在するのではなく、ある条件下において瞬間的に危険として表れるため、その瞬間を見逃すと発見できない場合もある。自然体験活動における危険認知能力においては、危険に対する知識を持ち、それを評価(判別)できる能力だけではなく、活動中に生じる瞬間的な危険を見落とさないようにする視線行動も重要なポイントとなってくる。そのため、今後はあらかじめいくつかの危険場面を

設定した実験用動画を作成し、キャンプ体験だけでなく熟練指導者や初心指導者といった指導経験にも着目し、視線行動やそれに伴う危険認知率の違いを検証することで、自然体験活動における危険認知能力の効果的なトレーニング法について明らかにしたいと考えている。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費「自然体験活動における安全管理能力のトレーニングシステムの開発」(26750248) の助成を受けて実施したものである。

引用・参考文献

- 1) 甲斐智彦 (2011) リスクマネジメント, 野外教育入門シリーズ第 2 巻野外教育における安全管理と安全学習—つくる安全, まなぶ安全—, pp8-18.
- 2) 甲斐智彦 (2010) 青少年自然体験活動リーダーのリスク知覚能力の評価とリスクマネジメント能力向上トレーニングの開発に向けての研究, 身体運動文化論放, 9, pp69-88.
- 3) 村越真 (2006) 野外活動場面における児童の危険認知の特徴, 体育学研究, 51, pp275-285.
- 4) 村越真、若月朋子 (2007) 組織キャンプにおける指導者およびキャンパーのヒヤリ・ハット事例の認知, 野外教育研究, 11, 1, pp73-82.
- 5) 甲斐智彦 (2007) 野外活動指導者のリスク知覚について—リスクマップを用いた評価—, 身体運動文化論放, 6, pp115-127.
- 6) 福田芳則 (2009) 水辺活動における「ヒヤリ、ハット」体験の分析—日本版ウォーターワイズプログラムを事例として—, ウォーターワイズ研究会 海の自然体験活動が果たす教育効果の検証と今後の方向性, pp75-84.
- 7) 渡邊仁 (2011) 野外教育における安全教育, 野外教育入門シリーズ第 2 巻野外教育における安全管理と安全学習—つくる安全, まなぶ安全—, pp55-63.
- 8) 近藤剛 (2011) アウトドアに潜む危険, 野外教育入門シリーズ第 2 巻野外教育における

安全管理と安全学習—つくる安全, まなぶ安全—, pp1-7.

- 9) 村越真 (2002) 子どもたちには危険がいっぱい—自然体験活動から「危険を見ぬく力」を学ぶ—, 山と溪谷社.
- 10) 渡邊仁 (2011) op.cit., pp74-83.
- 11) 青木康太郎, 粥川道子 (2012) キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響, 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報, 3, pp21-28.

実践報告

民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析

稲松謙太郎（株）小学館集英社プロダクション）

砂山真一（ポジティブ・アース・ネイチャーズ・スクール）

高瀬宏樹（国立青少年教育振興機構）・岡村泰斗（backcountry classroom Inc.）

1. 緒言

ヒヤリハットの報告は、野外教育分野のみならず、労働災害、医療、介護などの分野でも幅広くリスクマネジメントとして活用されており、国外でも、Close Call もしくは Accident Near Miss と呼ばれ、数多くの体系的なデータ収集や全国的な取り組みが行われる³⁾。

日本アウトドアネットワーク :JON は、我が国の野外教育分野ではじめて 2008 年にヒヤリハットの体系的なデータ収集を行い^{4) 5)}、2014 年にデータ収集方法の信頼性と一般性を高め、2015 年に「民間野外教育事業者におけるヒヤリハット分析」として、民間団体が運営するサマーキャンプに特化したヒヤリハット分析を発表した³⁾。本報告は、これらの実績に基づき、冬期のスキーキャンプに特化したヒヤリハット分析を行うものである。

スキーのヒヤリハットと傷害分析は、すでに多くの研究発表や確立された調査システムが存在する。例えば、全日本スキー連盟全国スキー安全対策協議会は、毎年スキー場傷害報告書⁷⁾を発刊し、50 程度のスキー場を対象に、4000 件以上の事故事例を詳細に分析し、発表している。また、日本野外教育学会が管理する野外教育研究のデータベースである Resource of Outdoor Pursuits : ROP¹⁾では、「スキー」と「外傷」のキーワードで 90 件の研究がヒットするなど、野外教育研究の中でも、最も件数の多い分野であった。一方で、

それらのデータは、大学スキー実習や、スキー場の傷害データを利用するなど、我が国の民間団体が行うスキーキャンプからデータを収集したものはない。

このように、ヒヤリハット分析は、多くの先行事例があるものの、民間団体の行うキャンプを対象にしたものは少ない。さらに、スキーに関してもヒヤリハットや傷害分析をした膨大な報告はあるが、同様に民間団体が行うスキーキャンプに関する情報は極めて希少である。そこで、本報告は、我が国でデータの少ない、民間団体が行うスキーキャンプのヒヤリハット分析を行い、その傾向と対策を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 対象

JON 加盟 55 団体に対し、2014/15 ウィンターキャンプにおけるヒヤリハットの報告を求めた。回答は、ヒヤリハットに遭遇した指導者が後述するヒヤリハットシートに報告し、各団体及び事業に設置が義務づけられているリスクマネージャー、リスクマネジメントディレクター、もしくはそれと同等の能力を有する指導者が、その内容を吟味し、最終的にインターネットにより、回答した。インターネットによる回答は、2014 年 12 月 20 日から 2015 年 4 月 17 日までの期間に、行われた。

2.2. 調査用紙

調査用紙は、国際的な野外教育指導者資格の公認を行っている Wilderness Education Association: WEA が開発した Accident Near Miss Report Form⁶⁾を採用した JON サマーキャンプヒヤリハットシートの「事故発生時活動内容」の回答項目に、「スキースノーボード」を加え、これを選択した場合に限り、以下に示すスキーに関する質問項目への回答を追加した(巻末資料 1)。

10.1. 対象者スキー技術：初心者（ブルークファーマーレン以下）初級者（ブルークボーゲン）中級者（シュテムターン）上級者（パラレルターン以上）

10.2. 事故発生時斜面斜度：緩斜面（10度以下/初級者コース）中斜面（10~20度/中級者コース）急斜面（20度以上/上級者コース）

10.3. 事故発生時斜面状況：整地 不整地 深雪 アイスバーン その他

10.4. 事故発生時活動内容：1人ずつ滑走中 停止中 トレイン中 フォーメーション中 検定中 フリー滑走 その他

2.3. 統計処理

まず、ヒヤリハットの傾向を明らかにするために記述統計を行うと共に、岡村²⁾が発明した体験教育評価フォーム：3E フォームを用いて、9.再発防止のための対策、つまり事故原因となった最大の問題点→5.事故の最大の原因→3.事故から最も予測される傷病の関連を可視化した。さらに、同様の分析を用いて、スキーの技術別、斜度別、斜面状況別、活動内容別に χ^2 二乗検定により、モデルを比較した。

次に、事故の特性と重大性の関連を明らかにするために、6.事故が起こった場合の傷病の重大性と、コース特性、事故者特性、天候特性、要因特性の関連を χ^2 二乗検定により分析した。

最後に、リスクマップを作成するために、5.事故の最大の原因ごとに、6.事故が起こった場合の傷病の重大性と、7.事故の遭遇頻度の回答を平均化し、6と7の座標にプロットした。それぞれの得点化は、6.事故が起こった場合の傷病の重大性が、軽傷/医療機関にいかない1点、医療機関に行く2点、全治3週間以上の重傷3点、

死亡・後遺症4点、7.事故の遭遇頻度が、一年に数回4点、一年に一度3点、数年に一度2点、数十年に一度(初めて)1点であった。

3. 結果

3.1. スキーキャンプのヒヤリハットの傾向

19団体より、158件の回答があった。そのうち、132件(83.5%)がスキーキャンプ中のヒヤリハットであった。本報告の対象とするスキーキャンプは、131件(99.2%)が滞在型キャンプであり、平均日数は3.63日であった。参加人数の特徴として、平均33.97人の規模であり、スタッフレシオは1:4.00であった。参加対象年齢について、最少年齢の130件(98.4%)が小学校低学年以下であり、平均学年は小学校2.55年生と小学校低学年を中心としていた。一方で、対象とする年齢幅の平均は、6.91学年であり、最高年齢の60件(45.5%)が小学校6年生まで、99件(75.0%)が中学3年生まで、129(97.7%)が高校3年生までと、小学生を中心としたサマーキャンプ³⁾と比べると、ある事例では参加対象を未就学児から高校3年生までにするなど、対象年齢幅が広い特徴があった。本報告においては、これらの期間、年齢、スタッフレシオ、経験年数と事故の重大性について有意な関連は認められなかった。

活動内容別の内訳は、スキースノーボードレッスン中が78件(59.0%)、スキースノーボード以外の活動中が11件(8.3%)、屋外での自由時間中が18件(13.6%)、宿舎での生活が19件(14.4%)、その他が6件(4.5%)ですべて開催地への移動中であった。活動内容と事故の重大性の関連についても、半数以上がスキースノーボード練習中に偏っており、その他の活動との有意な違いが認められなかった。スキースノーボード以外の活動と自由時間中を合わせた29件の中で顕著に見られた活動として、ソリが8件(27.6%)と雪合戦4件(13.8%)であった。ソリでは「前方の子どもにあたった」、「転倒して雪面に顔を打った」、雪合戦では「顔に雪玉が当たった」など、一見リスクの低く見える活動でも、キャンパーのコントロールのむずかしさが伺える。

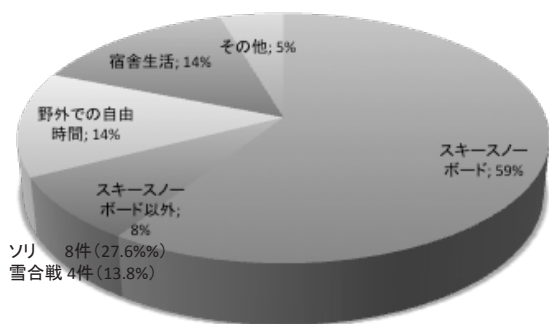


図1 スキーキャンプ事故発生時活動内訳 (n=138)

3.2. スキー滑走中のヒヤリハット

132件のスキーキャンプ中のヒヤリハットのうち、78件(59.8%)がスキースノーボードのレッスン中のヒヤリハット事例であった。発生機序を明らかにするために、「その事故の再発防止のため課題」、「その事故の直接的な発生原因」、「その事故から予想される傷病」のデータを用い、3Eフォームにより分析を行った。その結果、56件(70.9%)が「スタッフの安全管理スキル」が問題となり、「注意不足」18件(23.1%)など、様々な事故要因を引き起こし、「打撲などの軽外傷」45件(57.7%)に発展していることが明らかとなった。この結果はサマーキャンプのヒヤリハット³⁾と類似する結果となり、我が国の民間野外事業者における、夏期冬期を問わず典型的なヒヤリハットの発生パターンと考えることができる。

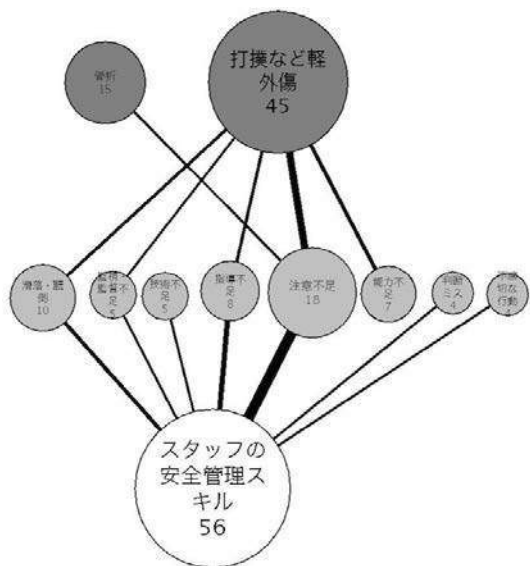


図2 スキーレッスン中事故発生機序

発生時間に関しても、全国スキー安全対策協議会⁷⁾が示す、昼食を挟んだふた山分布となり、一般的なスキー事故発生パターンと一致していた。

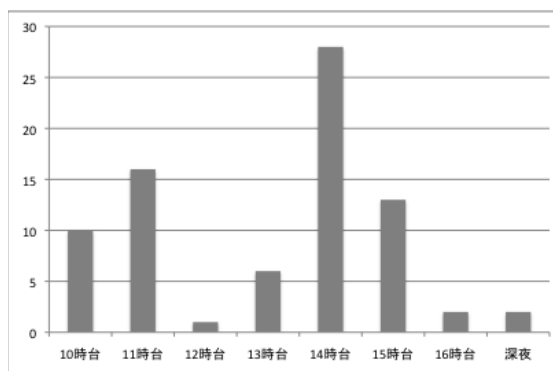


図3 スキーキャンプ事故発生時間

技術別にモデルを比較したところ、上級者(6件,7.7%)のみ「スタッフの安全管理スキル」が最も大きな問題とならず、代わりに「施設・環境の整備」が問題となることが明らかになった。また、上級者のみ「筋・靭帯損傷」と、他の技術レベルに比べると、予想される事故が大きいことが明らかになった。「施設・環境の整備」の発生機序としては、いずれも他のコースとの合流点で発生していた。

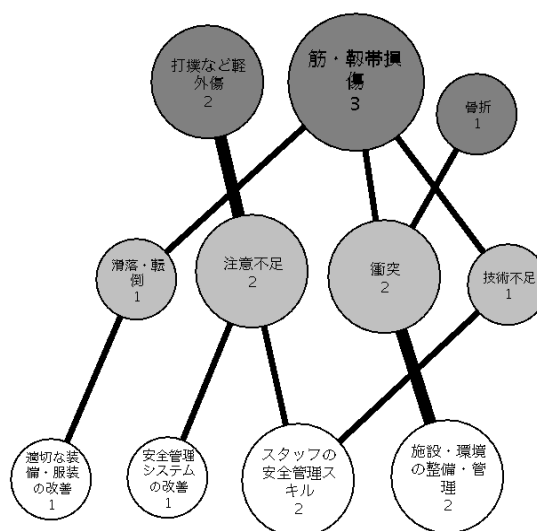


図4 上級者事故発生機序

次に、事故が起こった斜度では、51件(65.4%)が緩斜面で起きていたが、急斜面(5件,6.4%)のみで「適切な装備・服装」が顕著に問題となっており、他の斜度とは異なった傾向にあった。こ

れに含まれる80%が初級者であり、すべてペンディングの誤開放が原因であった。

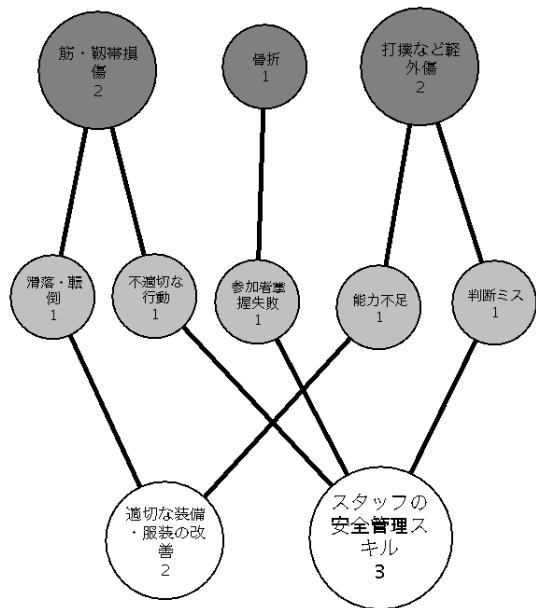


図5 急斜面事故発生機序

また、斜面状況では、55件(70.5%)が整地で発生しており、状況別のモデルの違いは見られなかった。

最後に、レッスン内容ではトレインが32件(41.0%)と最も多かったが、一人ずつ滑走(10件,12.8%)とフリー滑走(1件,1.3%)が、「スタッフの安全管理スキル」が問題とならず、「筋・靭帯損傷」、「骨折」などの重大な怪我につながる可能性を指摘していた。一人ずつ滑走についてその内訳を分析すると、70%が緩斜面、70%が初

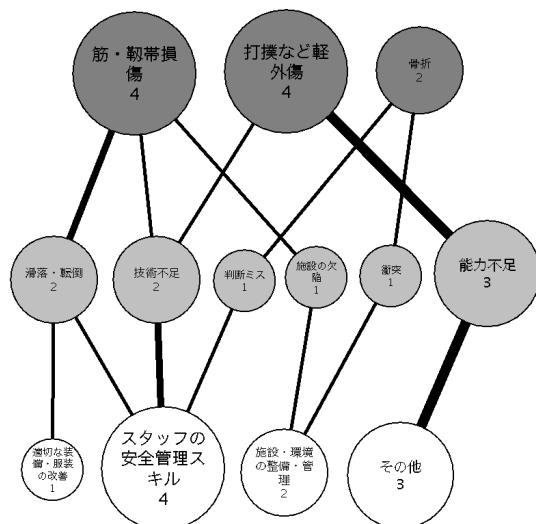


図6 一人ずつ滑走事故発生機序

心者・初級者、70%が整地であった。事故発生機序を分析すると、「スピードコントロールできずに前方の列に衝突した」が最も多かった。

3.3. スキーヒヤリハットのリスクマップ

事故原因ごとの、事故の重大性と頻度を平均化し、リスクマップにプロットした。その結果、1年に1度以上、全治3週間以上の、緊急的に対応する必要のある原因はなかった。また、91.1%が人的危険因子であり、サマーキャンプと一致しており、夏期冬期を問わず、我が国の民間野外教育事業者の典型的な事故発生要因と考えることができる。

1年に数回、かつ死亡・後遺症が予想されるハイリスクな要因を個別に検証したところ、以下の3件があげられた：「注意不足：リフトからストックを落とした」「不適切な行動：リフトからスキーが落ちてきた」「監視監督不足：スピードを上げて止まれなくなった」。

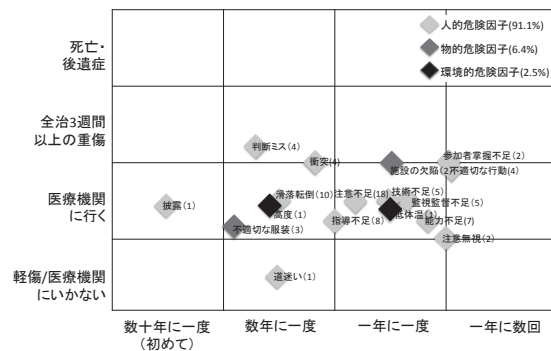


図7 スキーヒヤリハットリスクマップ

4. 総括

我が国における民間野外教育事業者が行うスキーキャンプは、小学校低学年、初級者レベルを対象としていた。一般的な事故発生機序は、スタッフの安全スキルを向上させ、注意力を向上することによって、軽微な打撲、軽外傷の多くを減少させることができることが明らかとなった。一方で次に示すいくつかのケースでは、事例が少ないものの、さらなるリスクマネジメントが必要が示唆された。まず、上級者では、コースの合流地点での事故発生の確率が高いため、練習バーンのレイアウトや参加者への追加のセーフティトークが必要となろう。さらに、初級者を急斜面に連れて

行くときは、プルーク姿勢によるビンディングへの負荷が高まり、誤開放の確率を高めるため、プルークで斜滑降をさせるなど滑走方法の工夫や、横滑りができるまで、急斜面には連れて行かないなどの配慮が必要である。さらに、初心者・初級者の一人ずつ滑走では、十分に注意はしているものの、スピードをコントロールできなくなることや、待機している列との衝突の確率が高まるため、能力に合った斜度の選択や、隊列の上部に止まらせない等の指導の徹底が必要である。最後に、リフト徐行中のものの落下は、重大な事故になる可能性が高いので、ものを落とさないためのリフトの乗降方法の徹底、リフトのしたでは止まらない等の配慮も必要である。

本研究においては、上述した個別事例で十分なデータがえられなかったが、今後同様のデータを蓄積していくとともに、本報告において示唆された個別の事例を検証していくことが今後の課題である。

引用文献

- 1) 日本野外教育学会 (2015) Resource of Outdoor Pursuits、<http://joes.gr.jp>
- 2) 岡村泰斗 (2015) 経験評価方法、特許第 5769152、株式会社 backcountry classroom
- 3) 岡村泰斗、稲松謙太郎、砂山真一、高瀬宏樹 (2015) 民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析、キャンプ研究、18、29-36
- 4) 砂山真一 (2013) 野外教育プログラムでのヒヤリハット事例の分析、日本野外教育学会第 16 回大会プログラム研究発表抄録集、68-69
- 5) 高瀬宏樹、佐藤初雄、北川健司、三好利和、町頭隆児、伊藤勝則、大嶽和彦 (2011) ヒヤリハット調査から見るアウトドア事故の傾向について (第 1 報) - 日本アウトドアネットワーク加盟団体の分析から -、日本野外教育学会第 14 回大会プログラム研究発表抄録集、34-25
- 6) Wilderness Education Association (2000) Wilderness Education Association Affiliate Handbook 6th Edition
- 7) 全日本スキー安全対策協議会 (2005) スキー傷害報告書、全日本スキー安全対策協議会

2014/15WINTER アクシデント・ニアミス（ヒヤリハット）レポート

このシートは、事故発生寸前で回避したか、より大きな事故につながる可能性があったが軽傷病ですんだ出来事（以下事故と呼ぶ）について、その事故を観察・関与した現場の指導者が記入し、コースディレクターに報告すると共に、事故防止のための対策を協議し、安全の向上に役立てるものです。

1. コース概要

団体名： _____ プログラム/コース名： _____
 記入者： _____ PD MD リーダー・カウンセラー インストラクター その他
 コースタイプ：デイキャンプ（2014年 月 日） 宿泊型（2014年 月 日～ 月 日）
 参加者人数： _____ 人 対象：未就学 学生（ 年生～ 年生） 社会人 全スタッフ人数： _____ 人

2. 事故概要

事故発生日時：2014年 月 日 午前 午後 時ごろ コース 日目/全 日中
 対象者氏名： _____ 年齢： _____ 才 性別：女 男 当該コース/団体事業参加回数：約 _____ 回
 事故発生時：プログラム中 プログラム外 交通機関による移動中 事故発生場所：屋内 屋外
 天候：晴 曇 雨 雪 地表：乾燥・平 濡・滑 雪 氷 岩 凹凸 ブッシュ 水上
 事故発生時活動内容：
野外生活（テント生活） 環境学習（環境ゲーム） 野外炊事（調理・たき火） 創作活動（クラフト等）
レクリエーション（キャンプファイヤー・野外ゲーム） 野外スポーツ（**スキー・スノーボード以外の**登山・サイクリング・カヌー等）
ロープコース 野外での自由活動・自由時間 宿舎生活（宿舎での食事・睡眠・自由活動） その他
スキー・スノーボード→**10に必ずご回答ください。**

3. その事故から最も予想される、傷病の種類は何ですか。

【外傷】打撲など軽外傷 筋・靭帯損傷 凍傷 骨折 脱臼 脳損傷 おぼれ(窒息) 眼障害
口内障害 水ぶくれ 火傷 裂傷 擦傷 日焼け
 【疾病】アレルギー反応 高度障害 低体温 熱障害 循環器障害 呼吸器障害
消化器系障害 下痢 下肢障害 泌尿器系障害 皮膚感染 眼球感染

4. その事故から最も予想される、傷病の部位はどこですか。

頭 顔 眼 首 肩 上腕 肘 前腕 手首 手・指 胸 腹 背中 腰
臀部 大腿 膝 下腿 足 爪先 踵 全身

5. その事故の最大の原因は何ですか。

【環境要因】高度 雪崩 低温 視界不良 脱水 滑落・転倒 落石・落木 水難
雷 動物・害虫 植物毒 日焼け 天候
 【人的要因】服毒（薬・アルコール） 監視・監督不足 注意不足 能力不足 技術不足 判断ミス 疲労
参加者把握不足 オーバーユース 指導不足 注意無視 既往症 不衛生 衝突
不適切な行動 技術的システム 心理的 不健康 知識不足 道迷い 失敗
 【物的要因】装備不良 不適切な服装 施設の欠陥 装備の誤使用 装備不備

6. その事故が起こった場合の傷病の重大性はどの程度ですか。

軽傷/医療機関にいかない 医療機関に行く 全治3週間以上の重傷 死亡・後遺症

7. その事故はどの程度の頻度で遭遇しますか。

一年に数回 一年に一度 数年に一度 数十年に一度（初めて）

8. その事故の経緯を記述してください（いつ・どこで・だれが・どうして・どうなった）。

9. その事故の再発防止のための対策とし最も必要なものを選択し、具体的に対策を記述してください。

安全管理システムの改善 適切な装備・服装の改善 施設・環境の整備・管理 参加者情報収集の充実
プログラムの見直し・改善 スタッフの安全管理スキルの向上 団体の組織・意識改革 その他

10. 事故発生時活動でスキー・スノーボードを選択した場合のみ回答してください。

10.1. 対象者スキー技術：初心者(プルカール以下) 初級者(プルカール～ゲート) 中級者(システムターン) 上級者(パルシステム以上)
 10.2. 事故発生時斜面斜度：緩斜面(10度以下/初級者コース) 中斜面(10～20度/中級者コース) 急斜面(20度以上/上級者コース)
※斜度の選択は事故発生バーンのグレンデリ情報を参考にしたり、現場指導者の感覚的な回答で構いません。
 10.3. 事故発生時斜面状況：整地 不整地 深雪 アイスバーン その他
 10.4. 事故発生時活動内容：1人ずつ滑走中 停止中 トレン中 フォーメーション中 検定中 フリー滑走 その他

実践報告

高校体育科キャンプ実習報告

—スポーツ選手の基礎力を育むことを目指して—

三島和康（はつかいちキャンプ協会・福山 YMCA 国際ビジネス専門学校）

Kazuyasu MISHIMA

1. はじめに

本稿では、広島県立神辺旭高校体育科が 2013 年度から開始した「野外活動」キャンプ実習での 3 年間の取り組みについて、プログラムの企画運営指導に携わった点から整理し、今後の展望について報告することを目的とする。

体育やスポーツの専門教育を主とする高校の学科として体育科がある。スポーツの強豪として有名な学校も多く、全国に 50 校以上がある。2020 年開催の東京オリンピックに向け、今後は一層の期待が寄せられると思われる。体育科は競技の方に注目されがちであるが、身体を動かすことの楽しさや健康について学んだり、生涯スポーツとしての体育、運動を学んだりする場でもある。学習指導要領では、原則履修科目として「体育理論」、「体づくり運動」及び「野外活動」が指定されている。このような体育科において、競技スポーツとは異なる「野外活動」が、キャンプ実習としてどのように実施されているかは、キャンプ指導者として興味のあるところである。

神辺旭高校体育科よりキャンプ実習の企画運営指導依頼を受けた際、全国の体育科で行われているであろう、「野外活動」キャンプ実習の情報収集を試みた。しかし、WEB 検索では、各学校ホームページ等での簡単な活動報告しか見つからなかった。また、調査研究の点から、国内の論文等の学術コンテンツのデータベースである CiNii や野外運動データベース（ROP）で検索を行ったが、体育科に限定すると関連する情報は見当たらなかった。よって、体育科の要望を取り入れなが

ら、打ち合わせを重ね、手探りでプログラムの企画案を作成しなければならなかった。このように、試行錯誤しながら始まったキャンプ実習も 3 年が経過し、これまでの取り組みを整理して報告することで、今後のキャンプへの有益な示唆となると考える。

2. キャンプ実習実施に至るまで

神辺旭高校体育科は広島県で 2 番目に設立された体育科で、陸上、ソフトテニス、フェンシング等で全国高等学校総合体育大会に選手を輩出している強豪校である。同校では「野外活動」科目で新たにキャンプ実習を開始しようと、広島県のはつかいちキャンプ協会に企画運営指導の依頼を行った。キャンプ協会では、高校体育科からの依頼という初めてのケースに、対応できるかすぐに協議を行った。そのメンバーの中に、広島県で最初に設立された普通科体育コースの卒業生がいて、サッカーチームのキャンプ等にも関わったり、ASE 活動によるチームビルディングの経験もあったことから、依頼に対応できるのではという判断になった。こうして学校側とのやり取りがはじまり、体育科キャンプ実習の企画案の作成が進められた。

授業としてのキャンプ実習のため、学習指導要領のねらいに応じたプログラムが大前提であったが、それらをふまえながら、競技に熱心に取り組む体育科の生徒たちが、個人の成長だけでなく、部活でも活かせる力を育めないか検討を重ねた。作成した企画案を体育科の教員に確認していただ

きながら、目的やプログラム、実施場所、日数、指導方法、予算などの詳細を詰めていった。キャンプ協会へ依頼をしてきた教員が、大学時代のキャンプ実習で冒険的な活動やソロビバークの経験があり、こうしたプログラム内容に理解をいただいたり、主任教員からもダイナミックにチャレンジできる冒険的な活動やグループワークを支持していただき、企画内容がまとまっていった。実習の目的は、自然体験活動をつうじてスポーツ選手としての基礎力の向上をめざすこととした。スポーツ選手基礎力とは、選手個人やチームの成長に必要とされる、主体性、行動力、課題分析力、課題解決力、計画力、ストレスコントロール、チームワーク力等とした。これらの力を実習の中で効果的に育むために、実習場所、日数、指導者数、指導方法についても検討や調整を行い、最終的には教員と一緒に現地を下見し、登山などのプログラムを一部体験していただき了解を得た。

日程は4泊5日になり、授業や部活との調整が行われた。指導については、生徒を8名程度の班に分け、各班にカウンセラー付けて、活動の支援やプロセスへの介入をすることとした。装備については、キャンプ場やキャンプ協会等の装備を利用し、生徒が新たに購入するものを最小限にした。安全上、上下セパレートの雨具のみ購入となった。学校側での日程や事前準備、予算も大掛かりなものとなった。また、キャンプ協会側でも、指導者や装備の確保、施設との調整など、これまでにない規模での準備と対応が必要となった。キャンプ協会単独では対応が困難なため、利用する県立森林公園施設や自然体験活動を専門とするNPO法人に協力依頼をして、協働チームとして実施することとなった。また、教育旅行を扱う旅行会社にも協働チームに入ってもらい、旅行会社と学校が旅行契約を結んだ。指導者には、野外生活技術、リスクマネジメント力、グループカウンセリング力が高く求められるため、キャンプ協会等のネットワークを通じて、県外の指導者にも協力を依頼した。

こうして、キャンプ協会を中心とした協働チームと学校との協力のもと、キャンプ実習が実施できる体制が整った。

3. 2013年度キャンプ実習

3.1 実習概要

初年度のキャンプ実習は、2013年7月1日から5日で行った。活動拠点のキャンプ場がある県立森林公園は標高900mの山中にあり、東京ドーム86個分の広さがある。宿泊棟や体育館もある青少年教育施設である。立ち上げの年ということで、参加者は1年生40名と5年生40名の合計80名で、主となるプログラムは学年単位で行い、朝夕の集いは2学年合同で行った。食事は班毎の自炊が中心で、プログラムに応じてスタッフによる給食や弁当、食堂を利用した。指導運営体制は、教頭、体育科主任、担任、副担任の7名の教員と、キャンプ指導者11名の18名で、教員も班のカウンセラーを担当した。その他、施設スタッフ、旅行会社スタッフにも協力をいただいた。班分けは学校側で事前に決定した男女別8名1班で、各学年5班の編成となった。就寝前は班毎に必ずふりかえりを行い、各自しおりに日誌をつけた。

2013年度キャンプ実習概要

目的：自然体験活動を通じたスポーツ選手基礎力の養成 日程：7月1日（月）～5日（金）4泊5日 場所：県立森林公園キャンプ場、十方山 対象：体育科1年生40名、2年生40名 指導体制：教員7名、キャンプ指導者11名 班編成：学年別、男女別、1班8名×5班 ＊班カウンセラーはキャンプ指導者と教員 食事：自炊、スタッフ給食、弁当、食堂 集い：リヤカー遠征時を除き、朝夕に集いを実施
【1日目】開校式、目標設定、野外安全講習、野外生活技術講習、登山／リヤカー遠征講習
【2日目】十方山登山(1年生)、リヤカー遠征(2年生)
【3日目】十方山登山(2年生)、リヤカー遠征(1年生)
【4日目】ASE、料理コンテスト、キャンプファイヤー
【5日目】撤収、ふりかえり、閉校式

3.2 実習報告

実習直前まで大雨が続き、プログラムを一部変更しての開始となった。曇り空の中、キャンプ場に到着した生徒たちを指導者、スタッフが全員で

迎えた。研修室で開校式とオリエンテーションを行ない、指導者やスタッフの紹介、プログラムの確認を行った。昼食から班毎での活動となり、カウンセラーも加わって自己紹介などを行った。生徒たちは野外活動の経験がほとんどないため、午後からの最初の活動は、野外での安全や生活についての講習を行った。続いてロープワークやテント、タープの設営方法など、基礎的な野外スキルの講習を行った。その後、キャンプ場に移動して実際に設営を開始した。夕食はグループで自炊を行ない、実践的に野外炊事技術の習得を図った。夜は学年別に翌日のプログラムの講習を行った。1年生は登山、2年生はリヤカー遠征である。

2日目、曇り空のもと学年別でプログラムを開始した。1年生の登山は、広島県で標高第3位の十方山に登る。累積標高差914m、往復で9kmのルートを生徒で登る。登山口から急登が続き、起伏のあるやや険しい山であるが、山頂は十方位全てが見渡せるほど眺望がよく、日本海、瀬戸内海の両方を望むことができる。山頂では達成感を感じてもらいたい。カウンセラーのサポートを受けながら、生徒がルートの確認し、ペース配分や休憩決めながら登った。先頭の班と最後尾の班で40分以上の時間差が生じたが、全班が登頂することができた。残念ながら山頂は霧のため眺望がなかった。生徒は所属する部活や種目によって体力が異なるため、登山中に班内でお互いに助けあう姿が多くみられた。

2年生のリヤカー遠征は、森林公園内の任意の場所を生徒で設定し、その場所でビバークして戻るプログラムである。予定では十方山登山口の手前にある野営場までの11.4kmをリヤカーで移動して野営場に宿泊、翌日登山する計画（先に登山する1年生は下山後に野営場で宿泊し、2年生が使ったリヤカーでキャンプ場戻る）であったが、実習直前の大雨の影響を受け変更した。ビバーク地は班毎にミーティングを行い、出発地点のキャンプ場からできるだけ遠い場所、森の中、東屋などの屋根がある場所、トイレや水場に近い場所等をそれぞれ選んだ。また、必要な装備や食材等についても班毎に決定した。各班計画に基づいて準備を進め、昼食後、それぞれビバーク地を目指して出発した。設営後に夕食を自炊し、日が暮れた

後はランタンを囲んで話をしたグループが多かった。周囲には誰もいないため、暗闇を照らすランタンの周りに自然と輪ができた。

3日目は2日目と学年を入れ替えて、十方山登山とリヤカー遠征を行った。2年生の登山では、前日に1年生が全員登れたことを受けて、クラスとして気合が入っていた。登山中、グループ内での声かけや休憩の取り方、悪路の対応の仕方など、2年生の方が良くできていた。高校生活や部活での経験の多さに加え、リヤカー遠征での達成感や夜の語らいで、班毎で凝集性が高くなったと思われる。予定のペースで全班が7合目の休憩場所に到着する頃、非常に強い雨雲が1時間後に接近してくることが分かり、下山することにした。まだ雨は降っておらず、山頂まであと少しという場所での判断に生徒達は驚いた様子であったが、教員からも話があり、すぐに気持ちを切り替えてくれた。雨雲は予想よりも早く到達し、滝のように激しい雨となった。身の危険を感じるほどの強い雨であったが、全員無事に下山した。生徒たちは山頂に行けなかったことを残念がったが、判断に従って正解だったこと、自然の脅威を体感できたことを前向きにとらえ、全員無事に下山できたことの達成感を感じていた。雨は下山後に小雨となった。

キャンプ場でも激しい雨が降り、出発時間を遅らせてリヤカー遠征を開始した。装備をブルーシートで覆って濡れないようにしたり、ビバーク地を屋根がある東屋の近くに変更したりするなど、班毎で対策を考えて実行した。日没後公園内は霧に覆われ、東屋の下やテントの中で話したグループもあれば、早くに就寝した班もあった。前日の登山の疲れも影響したと思われる。

4日目、時々小雨が降るなど、天候が回復しないためプログラムを変更した。雨が続き生徒の着替えがなくなったり、靴が濡れたままの状態のため、乾燥室などを使って乾かした。気持ち的にリフレッシュできた時間であった。午後からは体育館で班毎にASEを行い、順位に基づいて夕食の食材を獲得できるようにした。ASEでは運動能力を発揮できる機会もあり、それまでなかなか活躍できなかった生徒も躍動した。2年生の方が課題解決までの時間が早く、リーダーやフォロワー

などの役割分担がスムーズで結果を伴うことが多かった。2年生の活躍は1年生への大きな刺激となり、最後の夕食づくりに勢いがついた。

夕食は学年で異なる炊事場を使い、班毎で獲得した食材と調味料を使って野外炊事を行った。創作料理のコンテストとして、時間制限のある中、各班が工夫して調理した。料理が得意な生徒が分かるなど、学校ではみられなかった生徒の新たな一面をみんなが知ることができた。1年生の方が料理はうまく、優秀賞は1年生の班から選ばれた。

夕食後は学年毎にキャンプファイヤーを行った。キャンプ指導者が進行した影響もあるが、2年生は実習をふりかえる静的な内容が中心となり、部活やクラスで今後どうしていきたいか、発表する場になった。1年生は、夕食がうまくできたことや、料理コンテストで表彰されたこともあり、にぎやかな内容となった。

最終日、午前中は装備の片付けや返却など、撤収を行った。実習中は一貫して装備の大切さを生徒に伝えており、自分が愛用するシューズやグラブ等と同じように、丁寧に片づけや清掃して返却してもらった。昼食後、班毎のふりかえり、閉校式を行ってキャンプ実習を終了した。

3.3 実習を終えて

荒天でのプログラム変更、登山中の大雨による下山の判断など、プログラムの運営は大変であったが、リスクマネジメントや目的と対応した活動が実施できたという評価を学校からいただいた。プログラムはASE活動と料理コンテストが好評であった。登山とリヤカー遠征もよい評価であったが、荒天のための変更は仕方ないものの、本来の企画のように、より高いチャレンジ内容にして欲しいと要望があった。生徒への指導や関わり方は、教員、キャンプ指導者ともに難しさがあった。部活では厳しいルールがあったり、監督や先輩、後輩との関係性もあり、それに基づいた指導が行われている。一方でキャンプでは、キャンプ指導者は生徒を支援しながら、生徒の持つ良さを見つけて褒めたり、主体的な行動や反応を待つ指導が多い。実習中は教員とキャンプ指導者がカウンセラーを担当したため、指導方法が班によって異なったり、お互いにバランスをとるのが難しい

場面や時間があつた。食事に関しては、想定以上の生徒の食欲に十分に対応ができなかった。

初年度を終えての課題

課題：プログラム、指導や関わり方、食材量



リヤカー遠征

4. 2014年度キャンプ実習

4.1 実習概要

2年目は梅雨を避けて実施時期を10月に変更した。目的や活動場所、キャンプの基本的な運営方法は同じままに、初年度の改善点等を反映させたプログラムや指導を行うこととした。対象は1年生38名で1学年のみである。学校からは教頭、担任、副担任の3名が、キャンプ指導者は前年度も指導したメンバーを中心に10名が参加した。施設スタッフ、旅行会社スタッフにも協力をいただいた。プログラムの変更点は次のとおりである。リヤカー遠征は登山口手前の野営場までの11.4kmを移動し、野営場に泊まる。十方山登山は7合目にビバークしてご来光を見て下山する。そのため、テント、寝袋、調理器具、水、食材、トイレ等、必要な装備一式を生徒達自身がザックを背負って持って登る。男女の体力差を考慮し、班員は男女混合とした。4日目夜はソロビバーク、最終日はボランティア活動を行うこととした。生徒への関わりや指導については、キャンプ指導者が全班のカウンセラーを担当して指導することとした。

2014 年度キャンプ実習概要

<p>目的：自然体験活動を通じたスポーツ選手基礎力の養成</p> <p>日程：10月14日（火）～18日（土）4泊5日</p> <p>場所：県立森林公園キャンプ場、十方山、立野野営場</p> <p>対象：体育科1年生38名</p> <p>指導体制：教員3名、キャンプ指導者10名</p> <p>班編成：男女混合、1班6名～8名*5班 *班カウンセラーはキャンプ指導者のみ</p> <p>食事：自炊、スタッフ給食、弁当、食堂</p> <p>集い：ビバーク時を除き、朝夕に集いを実施</p>
【1日目】開校式、目標設定、野外安全講習、野外生活技術講習、リヤカー講習
【2日目】リヤカー遠征、料理コンテスト、野営場泊
【3日目】十方山登山、山中ビバーク
【4日目】早朝登山、下山、ソロビバーク
【5日目】撤収、ボランティア、ふりかえり、閉校式

4.2 実習報告

今年度は山中でのビバークやソロビバークを行うため、1日目の野外安全講習と生活技術講習は時間をかけて実施した。また、2日目から4日目にかけてリヤカー遠征と登山を行うため、キャンプ場から持ち出す備品の使い方や選び方についても時間を十分にとって講習を行った。講習後は、班毎にカウンセラーを交えての確認も行った。夕食の自炊も、山中での炊事を想定しながら行った。

2日目、班毎にリヤカー遠征と登山の準備を進め、昼前に時間差で公園を出発した。途中リヤカーが荷崩れた班も出たが、想定していた3時間余りで、全班野営場に到着した。長距離の移動は、登山に向けたペース配分や休憩のタイミングを班毎に生徒がマネジメントする演習であった。夕食は食材争奪の活動を実施し、獲得した食材で班毎に自炊した。

3日目、最終的な登山準備をおこない、装備のパッキングを行った。登山用のリュックを各班に3つ渡し、それ以外は生徒持参のリュック等を利用した。野営場から登山口へはバスで移動した。野営場から登山口までは1km程であるが、途中の道路が土砂崩れのため通行できず、30km以上の道を迂回せざるをえなかった。10時30分ごろ班ごとに登山開始。カウンセラーがペースを作

りながら慎重に登り、休憩も多めにするようにした。14時過ぎにビバークをする7合目に全班が到着した。設営後、夕食づくりを行ったが、日没時までには夕食が終わらない班もあった。班毎にミーティングを行い、20時過ぎに就寝した。

4日目、4時50分に起床し出発準備。山頂を目指し、ヘッドライトで暗闇を照らしながら登山道を進んだ。樹林帯を抜けた8合目辺りから周囲が明るくなり、ご来光への期待が高まる。6時に山頂到着。しばらくして、雲の切れ目からまばゆいオレンジ色の朝陽があふれた。

朝食後に下山。山中では簡易トイレを設置し、排泄物は専用のバッグに入れて処理したため、生徒達が分担して持って降りた。下山後はバスでキャンプ場へ戻り、休憩後ソロビバークを行った。初めに講習を行い、シェルター、タープ、かまどを各自で設営した。夕食は乾麺のうどんと缶詰、ソーセージ。生徒同士の会話や協力はできない設定のため、自分だけで課題解決を行う時間だった。早々に火を起こしができ、温かいうどんを食べて焚火を楽しむ生徒もいれば、日が暮れても火がおきず、缶詰だけを食べて眠ってしまう生徒もいた。

最終日、カウンセラーが生徒達に起床を告げ、教員とスタッフが温かい朝食を作って生徒たちを迎えた。班毎に朝食を食べながら、昨夜の体験を語りあった。午前中は装備の撤収、片づけを行い、その後ボランティア活動として常設テントの撤収作業を行った。昼食、班毎のふりかえり、閉校式を行ってキャンプ実習を終了した。

4.3 実習を終えて

放射冷却の影響で夜が非常に冷え込み、寒さ対応に悩まされた5日間だった。班や個人でのチャレンジがより必要となる登山、リヤカー遠征、ビバーク活動は、実習の目的達成により効果的であったと評価をいただいた。しかし、体育科の生徒にとっては、プログラム強度はまだ十分ではないという指摘があり、下山後もリヤカーでキャンプ場まで戻るなど、次年度に向けた改善点となった。指導や関わり方については、生徒がキャンプ指導者の待つ姿勢や良いところを伸ばすといった

部分を優しさとしてとらえ、言動に甘えが多く出た。部活動を全力で取り組むのと同じように、キャンプでも全力で取り組むよう、カウンセラーを中心に指導者全員で様々なアプローチを行ったが、部活動や日常の学校生活から解放された気持ちが最後まで勝っていた。食事に関しては、食材を増やし、生徒にもお米を持参してもらうなど工夫をしたが、調理器具で一度に作れる分量が限られたり、プログラム上の時間的な制約もあってさらなる工夫が必要だった。

2年目を終えての課題

課題：プログラム、指導や関わり方、食材、調理器具



山頂で日の出を見る

5. 2015年度キャンプ実習

5.1 実習概要

3年目は、寒さ対策として実施時期を10月初旬に変更した。目的や活動場所、キャンプの基本的な運営方法はこれまでと同じままに、前年度の改善点等を反映させたプログラムや指導をすることとした。対象は1年生40名。学校からは教頭、担任、副担任の3名が、キャンプ指導者は10名が参加した。施設スタッフ、旅行会社スタッフにも協力をいただいた。プログラムの変更点は次のとおりである。落ち着いた環境の中で、じっくりと装備の準備や生徒との関係を作れるよう、1日目午後はASE活動から開始し、体育館内でのテント泊とした。リヤカー遠征は下山後キャンプ場までの復路を加えた。ソロビバークは実施せず、教員と生徒だけでキャンプをふりかえる時間としてキャンプファイヤーを取り入れた。最終日のボランティア活動をやめて、班毎のふりかえりの時間とした。生徒への関わりや指導については、

班の中でリーダー、サブリーダーの役割をつくり、5日間のプログラムの中でそれぞれ1回は担当し、カウンセラーに変わって班員に指示を出して班を動かすようにする。また、その取り組みを班員全員でふりかえり、評価したのちに、次の担当者へ交代することで、生徒の主体性やリーダーシップを養うことを重視した。食事については、高カロリーで軽く、調理師しやすい食材を中心に準備した。

2015年度キャンプ実習概要

目的：自然体験活動を通じたスポーツ選手基礎力の養成 日程：10月5日（月）～9日（金）4泊5日 場所：県立森林公園キャンプ場、十方山、立野野営場 対象：体育科1年生40名 指導体制：教員3名、野外指導者10名 班編成：男女混合、1班6名～8名＊5班 ＊班カウンセラーはキャンプ指導者のみ 食事：自炊、スタッフ給食、弁当、食堂 集い：ビバーク時を除き、朝夕に集いを実施
【1日目】開校式、目標設定、ASE、野外安全講習、野外生活技術講習、リヤカー講習、体育館泊
【2日目】リヤカー遠征、野営場泊
【3日目】十方山登山、山中ビバーク
【4日目】早朝登山、下山、キャンプファイヤー
【5日目】撤収、ふりかえり、閉校式

5.2 実習報告

1日目、体育館でのASE活動からリーダー、サブリーダーが班員に指示を出した。身体を使ったグループワークのため、生徒にとっては指示を出しやすい環境であったが、カウンセラーのサポートが重要であった。続いて、班毎に装備の使い方や安全について学んだ。夕食は体育館周辺で、ガスバーナーを使って班毎に自炊した。夜はリヤカー遠征と登山の準備を行い、ふりかえりを行った。リーダー、サブリーダーを担当しての気づきや感想、班員からのコメントがあり、翌日担当するリーダー、サブリーダーと交代した。宿泊は体育館内でテント泊をした。

2日目、11時頃、班毎に時間差出発してリヤカー遠征を開始した。2時間30分程で全班が野

営場に到着した。リヤカーの荷崩れも少なく、スムーズな移動であった。リーダー、サブリーダーを交代し、テント設営、野外炊事を行った。指示の出し方も少しずつ良くなってきた。全体での登山講習後、早めの就寝で翌日に備えた。

3日目、野営場にリヤカーを残し、1km程道路を歩いて登山口へ向かった。登山口でリーダー、サブリーダーを交代し、班毎に登山を開始した。辛い登りの中でもリーダー、サブリーダーが指示を出す姿がみられた。班員もそれに応えながら、リーダー、サブリーダーに声をかける姿が見られた。14時頃に全班7合目に到着した。設営後、夕食づくりを行った。日没までにほとんどの班で食事が終わり、班での団らんの時間となった。20時過ぎに就寝した。

4日目、4時50分に起床して山頂を目指す。6時前に山頂に到着。雲から太陽が顔を出し、強い朝陽が広がった。ご来光を浴びながら、生徒達は肩を組み壮行歌（競技大会等に出発する仲間を送り出す際に歌う歌）を合唱した。

下山後は野営場へ戻って昼食。リヤカーに荷物を積みキャンプ場へ出発した。下山しても気持ちが切れることなく、登りが続く11.4kmの道を全班が歩いた。最も早い班で3時間、パンクのアクシデントがあった班も4時間で到着した。教員とスタッフが温かい夕食を作って生徒を迎えた。夜はカウンセラーが班を離れ、教員と生徒だけでキャンプファイヤーを行った。

最終日、各班で朝食を自炊した後、片付けと撤収を行った。また、班毎に集まって、じっくりと5日間のふりかえりを行った。昼食後、閉校式を行ってキャンプ実習を終了した。

5.3 実習を終えて

天候に恵まれた5日間だった。登山後もリヤカーでキャンプ場に戻るなど、体力的にかなりハードな内容であったが、生徒達は元気に最後まで頑張っており取り組んだ。指導や関わり方に変化を付けるために取り入れたリーダー、サブリーダー制は、生徒がリーダーシップやフォロワーシップを体験的に学ぶことができ、効果的であった。生徒の全力で取り組む姿が多くみられたが、リーダー、サブリーダーに任せてしまう場面も多くみ

られた。生徒の自己評価とキャンプ指導者、教員からの評価が大きく異なることもあった。主体的に取り組んだことに満足するだけでなく、より良いプロセスや結果を求める向上心を育むことの大切さを感じた。食事に関しては、食材と調理器具を変更（軽量・高カロリー食材、バーナーの多用、大鍋の使用）して改善された。その他、火おこしやロープワークの要望がでた。

3年目を終えての課題

課題：指導や関わり方、火おこし、ロープワーク



山中でのビバーク

6. 生徒の感想

実習後に生徒が書いた感想の一部を紹介する。

【十方山登山】

「危険な場所も沢山あったが、何事もチャレンジが大切だと思った。」「全員が挑戦し頑張っているから自分も山頂まで行けたと思う。集団の力の素晴らしさを知った。」

【リヤカー遠征】

「みんな不安に思っていることが分かり、少し楽になった。」「お互いが思っていること、感じていることを出し合い、いい人間関係が築けた。」「リヤカー遠征は班員の絆を深める最高のプログラムだと思った。」

【苦しかったこと】

「グループがまとまらないことが一番辛かったし、それを変えられない自分が情けなかった。」「班長になって、リーダーとしての務めを果たす責任が重くて大変だった。」

【学んだこと、成長したと思ったこと】

「リーダーの存在そのものの大切さを痛感し

た。」「仲間や平素の当たり前のことに感謝する自分になれたと思う。」「これまでは行動する時にいつも判断を任せていたが、自分が考え行動できるような場面が多々あり成長できたかなと思った。」「周りを見られる人、人のために行動できる人を目指していきたい。」「本気とはどういうことか？少し分かったような気がする。」「自分が心を開いて仲間に寄って行かないと、人も寄って来ないことが分かった。」

7. 今後の展望について

体育科の生徒に効果的なキャンプ実習を目指し、回を重ねながらプログラムや指導方法を改善してきた。毎回改善点は出るが、体育科の「野外活動」キャンプ実習としての、一つの形ができてきたように思う。実践者の立場として、今後もこうした積み重ねを大切にしたい。また、今後は実習の成果やプログラムの効果、指導方法について、研究の立場からみていきたい。これらの情報を発信していくことで、全国にある体育科のキャンプ実習の一助となり、生徒達の成長に寄与できればと思う。このような実習へ関わられるのも、学校をはじめ、協働チームとして関わっていただいている指導者、施設スタッフ、旅行会社スタッフの皆様の協力のおかげです。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

長期キャンプの意義を改めて考える

— 「チャレンジキャンプ 2015 ～リヤカーで小豆島一周 110 kmの旅～」の事例から—

徳田真彦（大阪体育大学大学院）・伊原久美子（大阪体育大学）・
久田竜平・高橋宏斗・飯田輝（大阪体育大学大学院）

Masahiko Tokuda, Kumiko Ihara, Ryuhei Hisata, Hiroto Takahashi, Hikaru Iida

1. はじめに

本実践報告は、2015年8月23日から8月29日（6泊7日）にかけて行われた、大阪体育大学野外教育研究室主催の「チャレンジキャンプ 2015 ～リヤカーで小豆島一周 110 kmの旅～」の事例を基に、本キャンプの特徴的な取り組みについての紹介及び、改めて長期キャンプの意義について見つめることを目的に執筆した。

実施内容を報告する前に、まず本事業を行うに至った経緯について述べる。2015年3月、淡路島にて行われた「青少年体験活動 AWAJI ミーティング」に参加した時の事、ある団体が長期キャンプの事例報告を行っていた。1週間無人島へと移り、野外生活を行うキャンプ、1週間以上をかけて兵庫県をリヤカーで縦断し、瀬戸内海から日本海を目指すといったキャンプ、2つのキャンプについての事例報告であったが、その発表スライドに移る子ども達は、実にさまざまな表情を見せていた。楽しい表情、悲しい表情、辛い表情、怒っている表情など、キャンプの中で起こる出来事一つ一つが、子ども達にさまざまな感情を生起させ、日に日に逞しくなっていく様子が見て取ることができた。強く逞しく成長している様子を目の当たりにし、長期キャンプに秘められた可能性に強く興味を抱いた。さらには、近年キャンプ参加者の低年齢化、キャンプ期間の短期化が進む中で、参加対象をできる限り広く設定し、長期のキャンプ活動を行うことにこだわり、プログラムの企画・運営に一切の妥協を許さない、そんな姿勢に

感銘を受けた。まさに「キャンプの価値を高める」ことを体現しているように感じたからだ。今まで、キャンプの企画をしてきたが、果たしてどこまでプログラムに対して責任を持っていたか、その向こう側にいる参加者の事をどれだけ思い、企画を行っていたか、改めて考えさせられることとなった。そんな出来事があった後、大学へ帰ってから長期キャンプへの想いは膨らみ、参加者の事を思い、「全力」を尽くしキャンプ活動を行いたい、そんな気持ちから長期キャンプ実施へと踏み切ることとなった。

一方キャンプ白書 2011 によると、現在全国各地で行われているキャンプのほとんどが日帰り、1泊2日、2泊3日という期間に集中している（図1）。これらの原因は、様々な理由が考えられるが、何より参加者の確保の難しさが挙げられるだろう。長期キャンプとなると日程調整等が難しく、参加費も高額になるため、敬遠されがちで参加者を集めるのは難しい。それに比べると、短期キャンプは日程調整が簡単で一般的に安価であるため、参加者を集客しやすく実施するのは長期キャンプに比べると容易い。そのような背景から、短期キャンプが多く成されていることが考えられる。近年では短期キャンプにおいて「生きる力」の向上といった諸能力の育成に効果が得られていることが報告されており（青木ら、2005：遠藤ら、2006：福島ら、2006：大阪府キャンプ協会、2006：福田ら、2009：中川ら 2005）、期間に適合した目標設定や、それぞれの地域の利点を活

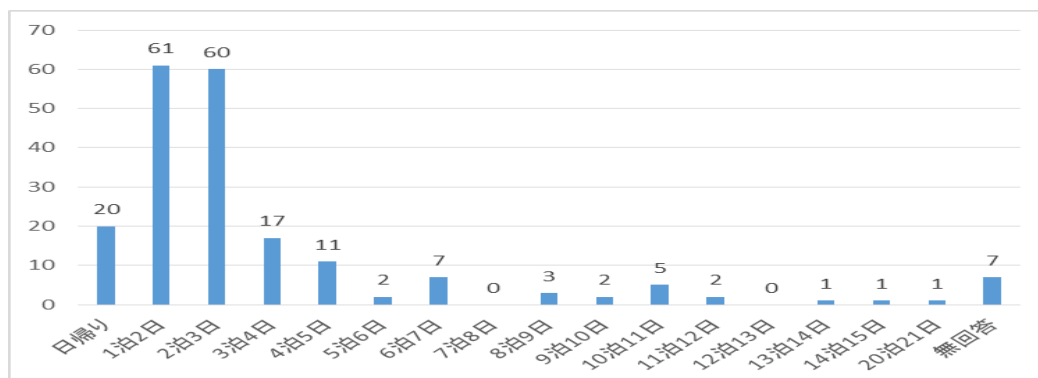


図1 キャンプ実施期間

かしたプログラムを行うことで効果が得られると言われている。そのような中、長期キャンプの実施件数は減少しており、今後長期キャンプの実施がますます難しくなっていくことが推察される。しかし、長期間に渡って参加者とともに活動し得られる関係性や、参加者の成長、感動の大きさなどは長期キャンプならではのものがあるのは事実であり、今後の長期キャンプ実施へのアプローチとして、今一度長期キャンプの「意義」について考えたい。

2. チャレンジキャンプ 2015 概要

2.1 立案

本キャンプを計画するに先立ち、本キャンプを行う目的を「遅くなる」、「協力する」、「自然を感じる」の3つに設定をした。今日の社会はいじめ問題や、子どもの自殺、教育問題など、数々の課題が挙げられ、さらには勝ち組、負け組といった競争化の流れはさらに勢いを増している。そのような社会背景に屈することなく、遅しく、仲間と手を取り合い、豊かな感性を持って生きて欲しいという願いから上記の目的を設定した。キャンプ期間の設定に関しては、著者・及び共同研究者のさまざまな活動との兼ね合いをみながら、最も長くキャンプ期間が設定できる2015年8月23日から8月29日の6泊7日となった。最も悩んだのが上記3つの目的を達成するために「何をするのか」であった。著者をはじめ、共同研究者と共に「長期だからこそ出来るプログラム」に関して議論を重ね、どうしたらより良い体験をさせられるか、目的を達成できるのかといった自問自答を繰り返し、その結果、リヤカーを引きなが

ら小豆島（一周約110km）を一周するというプログラムに決定した。「リヤカー」という機材の特性上、全員が力を合わせて引くことが必要となり、さらには、いかなる状況であっても「リヤカー」を中心にまとまらざる負えない状況となることを見越しての決定であった。さらに小豆島というフィールドを選んだのは、1周110kmという距離が、6泊7日のキャンプ期間に絶妙な距離であったことも理由であるが、本州を離れ「島」へと渡ることによって、「帰ることができない」、「やるしかない」といった心理状態を作りだすことも想定しての決定であった。

2.2 集客

キャンプを行うに当たって、最も不安であったのが「参加者が集まるのか」という課題であった。できる限り興味をそそられるようなキャンプチラシを作成し、今まで他のキャンプへ参加していた子ども達や、教育委員会に依頼し地域の小学校、中学校、高校、社会教育施設へとチラシを配布した（図2、3）。さらには野外活動を行っている他団体へもチラシ配布の依頼をし、述べ4000部ほど配布した。その結果、8名の参加者が集まった。しかしながら十分数参加者が集まったとは言い難しく、今後はさらにチラシの配布地域を広げることや、Facebookを利用した宣伝、夏休みの短縮を考慮した日程への期間変更といった課題が挙げられる。

参加費については、プログラムにかかる費用（食費など）や、交通費、保険料、指導費を計算し、60000円という参加費を設定した。参加費として決して安価な金額ではなく、集客に関して懸念

があったが、自立したキャンプ活動を行うという意識から金額を下げる事無く、集客を行った。

ように働きかけを行った。



図2 キャンプチラシ(表)



図3 キャンプチラシ(裏)



写真1 参加者・保護者の様子



写真2 プログラム説明

2.3 実施

2.3.1 事前説明会

キャンプを実施する約2週間前に、大学施設内でキャンプの事前説明会を行った(写真1,2)。キャンプの目的や、小豆島の紹介、宿泊場所、プログラム確認といった実施概要の説明や、参加者同士のアイスブレイキング、保護者の質問タイムなど保護者や参加者のキャンプ参加に対する不安をできる限り少なくできるように詳細に説明を行った。その他キャンプに対するモチベーションビデオを作成し、キャンプまでに「早寝早起き」や、「自分の事は自分です」といった気持ちを持たせる

2.3.2 指導者と班編成

キャンプディレクターとして大学教員1名が指導にあたった。その他、野外教育を専門に学ぶ大学院生及び大学生5名が指導にあたった。プログラムディレクター兼マネジメントディレクター1名(大学院生)、食料係兼アシスタントディレクター2名(大学院生及び大学生)、カウンセラー2名(大学院生)の体制であった。

班編成は男女・学年混合で4人1班の2班編成で行った。各班にキャンプカウンセラー1名を配置した。

2.3.3 キャンププログラム

キャンプ初日は移動日とし、電車、フェリー、バスといったさまざまな交通機関を乗り継ぎ、小豆島へ到着した。2日目以降は小豆島一周へと出発した。キャンプ3日目に台風が直撃し、急遽施設にて待機となったが、それ以降天候は回復し、最終日まで大きなアクシデントはなくプログラム

は行われた（表 1、写真 3、4）。



写真 3 リヤカーを引く様子



写真 4 一周直後の集合写真

し、報告会を行った。スライドショーでの報告や、参加者からのキャンプエピソード発表や、完歩証明書授与などの活動を行った。また、実際に使用した装備を配置することで、参加者が装備の使い方を保護者に教えたり、装備にまつわるエピソードなどを共有する時間となり、保護者、参加者と共に作り上げるような、雰囲気での報告会を行うことができた（写真 5、6）。



写真 5 キャンプ装備を配置した様子

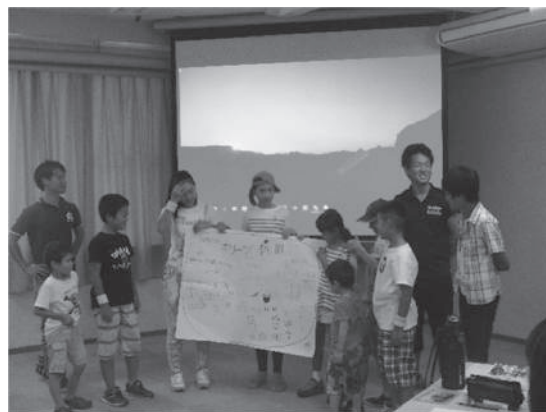


写真 6 エピソード発表

2.3.4 事後報告会

キャンプ実施から、2週間後にキャンプ活動を振り返る事後報告会を行った。当日は保護者にもキャンプの様子を少しでも感じてもらえるよう、実際にキャンプで使用したリヤカー、テント、タープ、食事装備、地図、行動食などを会場に用意

表 1 プログラム

	2015/8/23(日)	2015/8/24(月)	2015/8/25(火)	2015/8/26(水)	2015/8/27(木)	2015/8/28(金)	2015/8/29(土)	
朝	熊取駅集合 関西空港フェリー 神戸港フェリー	【リアカー】 瀬戸ビーチ	【台風により待機】 オートビレッジ吉田	【リアカー】 オートビレッジ吉田	【リアカー】 余島YMCA	【リアカー】 小豆島オートキャンプ場	小豆島出発	朝
昼	小豆島着 キャンプ地へ移動	オートビレッジ吉田 25km		余島YMCA 29km	小豆島オートキャンプ場 24km	坂手港 29km		昼
夜	夕食 プランニング 就寝	ふりかえり プランニング	ふりかえり プランニング	ふりかえり プランニング	ふりかえり プランニング	入浴 生還パーティ ふりかえり プランニング	熊取駅着 解散	夜
宿泊	瀬戸ビーチ	オートビレッジ吉田	オートビレッジ吉田	余島YMCA	小豆島オートキャンプ場	瀬戸ビーチ	自宅	

3. キャンプ評価

本事業を評価するために、自己評価として参加者に「生きる力評定尺度」、「キャンプ満足度」の調査を、他者評価として、保護者に「保護者アンケート」を記入してもらった。その結果を以下に記載する。

3.1 生きる力評定尺度

この尺度は、キャンプ参加者の心理的変容や、実質的な技術獲得に及ぼす効果を検討するため、生きる力を構成する上位3、下位14のクラスターから構成されている。本実践報告では、上位クラスターである「心理社会的能力」（質問14項目）、「徳育的能力」（質問6項目）、「身体的能力」（質問6項目）のみを取り扱うこととする。回答形式は、「非常に当てはまる」（6点）から「全く当てはまらない」（1点）の6段階によって評価するよう求めた。調査はキャンプ直前、キャンプ事中、キャンプ事後、キャンプ2週間後の計4回行った。なお、本実践報告では参加者が少なかったため、統計的分析は行わないこととした。参加者の質問紙を集計した結果、全ての上位カテゴリーがキャンプ直前に比べ、能力得点が向上し、キャンプ2週間後も得点を維持している（図4、5、

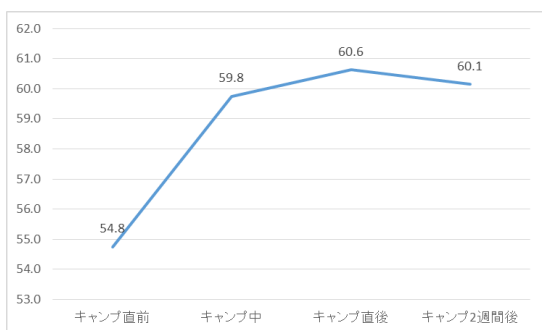


図4 心理社会的能力

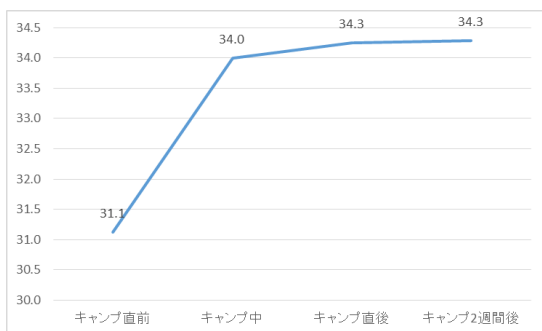


図5 徳育的能力

6)。このことから、本チャレンジキャンプが生きる力の育成に効果的であったことが推察できる。

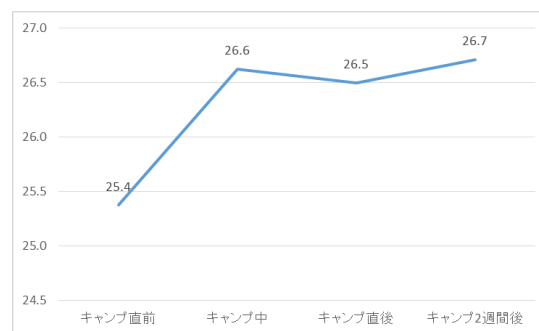


図6 身体的能力

3.2 満足度調査

調査項目は14項目で、項目内容は野外教育を専門とする教員、大学院生と議論し決定した。回答形式は、「非常に当てはまる」（6点）から「全く当てはまらない」（1点）の6段階によって評価するよう求めた。その結果、14項目の平均が5.7点と非常に高い満足度を得られた（図7）。

3.3 保護者アンケート

キャンプの評価を目的に、事後報告会の際、保護者にアンケートを行った。内容は、参加理由、キャンプ後の変化、参加費について、今後取り組んでほしいプログラム、感想といった内容であった。本実践報告ではキャンプ後の変化や感想については、特徴的な記述を取り上げて示す（表2）。保護者アンケートから、保護者からも高い満足度を得られた事が読み取ることができる。事前説明会や事後報告会、Facebookでの活動連絡といった働きかけが、保護者へのキャンプ活動の認知に繋がったものと考えられる。キャンプ活動を参加者から伝えられるのはほんの一部であり、実際に保護者からはキャンプ活動の内容をあまり話してもらえなかったという声も聞かれた。実際に子どもを「参加させる」保護者にだからこそ、キャンプ活動の意義や価値を実感してもらう必要があり、そのためにもスタッフ側から保護者に対するキャンプの認知を働きかける工夫を行うことが必要であるだろう。

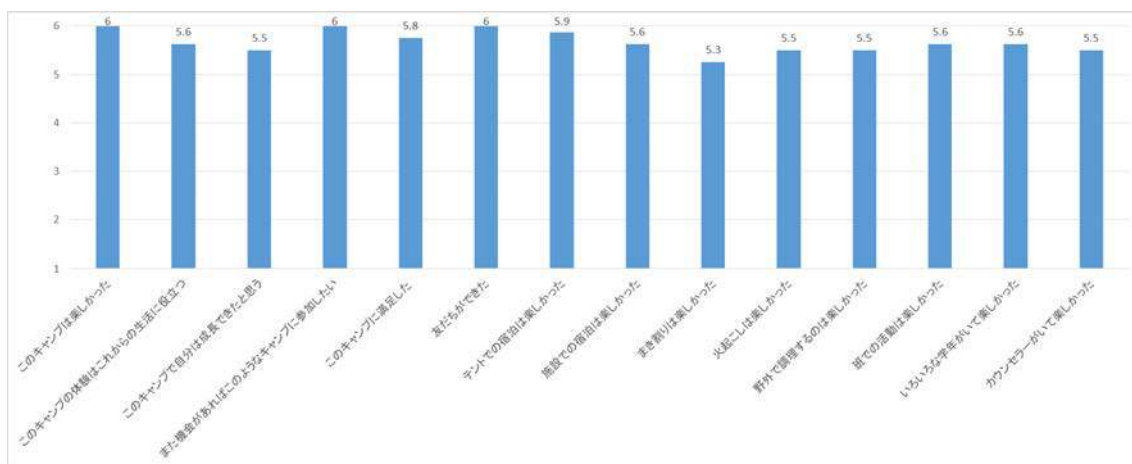


図7 キャンプ満足度 (N=8)

表2 保護者アンケート〈一部抜粋〉(N=6)

お子様がチャレンジキャンプへと参加することとなった理由
大きな挑戦ができるチャンスだと思った、チラシを見て行かせたいと思った、本人が行きたいと言ってきた
チャレンジキャンプを経て、お子様の様子に何か変化はありましたか
【A保護者】Aは自分で動くことが増え、切り替えが早くなり、今を頑張ることで先につながるような雰囲気になりました。私たちはそんなAを信じ、見守ることを大きくできるようになりました。
参加費について
妥当であった5名、やや高い1名
今後このような長期キャンプで取り組んでほしいプログラム
今回のように苦楽を共に出来るキャンプ、スキー、なんでも楽しそう
チャレンジキャンプで気になった点、ご感想
事前説明会-本番-事後報告会と参加しやすい流れであった。スタッフが男性だけであったのが心配だった。

4. チャレンジキャンプ 2015 の特徴から見る

長期キャンプの意義

ここまではチャレンジキャンプ 2015 の概要を述べてきたが、ここでは本キャンプの特徴ともいえる4つのポイントを紹介し、長期キャンプの意義について考えたい。

4.1 プログラムが参加者主体である

本キャンプのプログラム運営は、大きな枠組みはスタッフが設定しているが、詳細な起床就寝時間や、活動時間、食事時間はすべて参加者に考えさせ設定させた。スタッフ側からは①「睡眠は6時間以上取ること」②「説得力のある計画を立てること」③「全員が納得する計画を立てること」④「毎日班の誰かがPDに報告へくること」⑤「計画をしっかりと実行すること」という5つの約束事を設定し、参加者は毎晩一日の振り返りを行った後に、プログラムを設定した。印象的な出来事であったのはキャンプ3日目、台風が直撃し避難を余儀なくされ、リヤカーの移動距離を稼げな

かった際に「休養日をカットし、全ルートを踏破するプラン」「計画通り休養日を取り、島の内側を歩くショートカットプラン」の2択をスタッフ側から提示した。その際、参加者同士で話し合いをさせたが1分ほどで全ルートを踏破するプランを選択した。参加者の小豆島一周へのモチベーションが高かったこともあるが、参加者自身でプログラムを計画・運営することで、活動に対する責任感や主体性を高めることができた。これは、6泊7日という長期間のキャンプであることで、スタッフと参加者との関係性が深まり、信頼感が生まれ、信頼感が生まれたからこそプログラムを参加者に委ねるといった判断ができた。参加者は判断が自分達に委ねられることで、より責任感を持つことができるようになるし、「自分達で作るキャンプ」という意識となり、主体的な行動をするようになる。そうすることで、キャンプに対するモチベーションはさらに高くなるだろうし、チャレンジを終えた時の達成感はこの上ないものとなるだろう。こういった良いサイクルを回せる

状況に出来るのも、実施期間が長いからこそではないだろうか。

4.2 班の再編システム

キャンプ初盤から中盤にかけては4名1班の2班編成で活動を行い、テントサイト等同じ活動場所ではあったが、基本的に各班での活動が主であった。しかしキャンプ終盤に、「全員が無事に小豆島一周を成功すること」が目標であったことを再認識させた上で、あえて班を解体し参加者同士で班を新たに再編成させる働きかけを行った。これはKolbが提唱した体験学習サイクル(図8)を回す働きかけであり、再編成させ、新たな班での活動を提供することで、それまでに起こった班内の出来事を活かすといった狙いがあった。本キャンプでは毎日、「今日の自分(達)」についてふりかえりを行い、「明日からはどうしていくか」といった体験学習サイクルを回す働きかけを行っている。キャンプ初めは、成功することばかりではなく、むしろ失敗することが多い。計画がしっかり立てられなかったり、計画通り実行できなかったり、役割分担ができていなかったり、さまざまな失敗を基に修正し、失敗と修正を繰り返しながら個人、集団は成長していくが、長期キャンプにおいては必然的に失敗、修正の回数は多くなり、個人・集団共に成長できる機会が多いと言えるだろう。それらの状況を把握した上で、チームがある程度成熟した場面で、今まで形成されてきた心地よい班をあえて解体し、新たな班に再編成させることで、今まで失敗、修正してきたことを新たな集団・場面で活かせるというような状況を作った。その結果参加者はお互いの体力や学年、リーダーシップを考慮した新たな班を形成し、今まで以上のパフォーマンスを発揮して、見事ゴールへと辿りついた。キャンプ終盤、あえて班を解体することで参加者の緊張感の維持や、新たな班での新しい役割の気づき、前回の班で培った力を発揮する場にもなった。日々の振り返りなどで、体験学習サイクルを回すだけではなく、新たな場面や状況を作り、さらに高い次元で体験学習サイクルを回す働きかけとしての、班の再編成というシステムは、参加者の能力を最大限に高める働きかけとして非常に有効なものとなった。

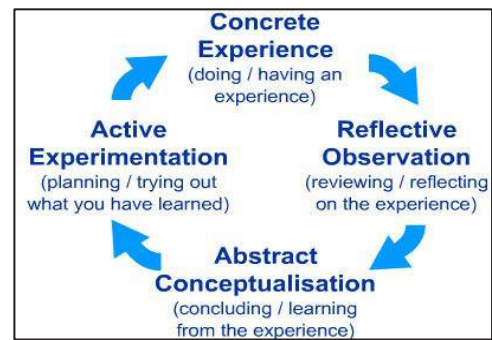


図8 Kolb 体験学習サイクル

4.3 カウンセラーがいなくなる

リヤカー最終日には一切カウンセラーが関わらず、自分達だけでリスクマネジメントやリーダーシップを取りながらゴールへ向かわせることとした。カウンセラーは先に出発し、本部スタッフが参加者後方に安全のために車でついて行くだけという状況であった。これはGroup Development(図9)とSituational Leadership(図10)の理論に則り、参加者への介入を最小限にするという働きかけであった。グループはForming、Storming、Norming、Performingといった段階を経ながらまとまっていくと言われているが、それぞれのグループ段階で指導者が取るべきリーダーシップも変化し、グループの習熟度が未熟な時は指示的なスタイル(Telling)、グループの習熟度が高まっていくにつれ指示的な声かけを少なくしていき、逆に班の雰囲気や状態をメンテナンスするようなリーダーシップへと変化させる(Selling、Participating)。最終的にグループが十分に成熟し、自分達だけで活動できるような状態になると、ほとんど班に対する介入を無くすスタイル(Delegating)を取ることが望ましいとされている。それらの理論的背景から、最終日の参加者グループは十分に成熟している状態と判断し、参加者のみでゴールを目指すといった状況を作った。その結果、一番思い出に残っていることを聞いた際には、「自分達だけでリヤカーを引いた事」という回答が多くあり、参加者への自信や達成感を十分に感じさせる働きかけとなった。以上の事からも、グループの状態に合わせたカウンセラー・スタッフのリーダーシップについても、さらに意識してキャンプ活動を行っていくべきだろう。また、長期キャンプであるため、グループの成長を

促す働きかけや、逆に見守るといった段階をじっくりと踏むことができ、リスクマネジメントやリーダーシップといった能力を高いレベルで実践させることができた。これらの段階をじっくり踏むことができない場合、参加者のみの活動というのは非常にリスクの高いものになるだろう。無論、この働きかけを行える根底には、参加者同士の信頼関係や、スタッフと参加者の信頼関係があるからこそ行える判断であり、長期キャンプだからこそ養えた関係性ならではの働きかけともいえる。

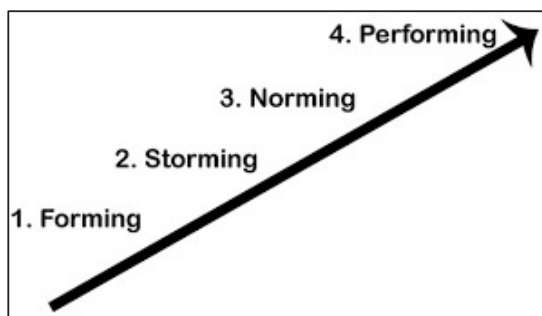


図9 Group Development

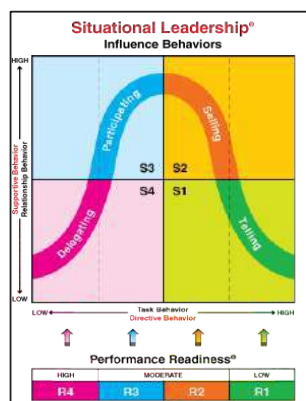


図10 Situational Leadership

4.4 スタートがゴールのエクスペディション

本キャンプでは小豆島一周という移動型のプログラムを設定したため、必然的にスタート位置が最終的なゴールとなる。スタートとゴールが同一であると、当然であるが参加者は「再び」同じ場所へ帰ってくることになる。参加者が明確にゴールをイメージすることができる事で、スタートを切った時がエクスペディション（旅）の始まり、「再び」同じ場所に帰ってきた時が旅の完結、といった参加者にとって非常にわかりやすい冒険となる。そうすることで参加者は、スタートからゴールの間にストーリー性を持つことができ、リア

ルな冒険ストーリーを体験することができる。始まり（スタート）から完結（ゴール）までのエクスペディションの中には、失敗体験や成功体験、他者との関わり合いの中で生まれる軋轢や信頼、自然への恐れや感動などさまざまなドラマがあり、そうした中で参加者それぞれにキャンプストーリーが生まれる。また、「再び」スタート位置に帰ってくる旅の終わりは、一周した事を強く実感できる事で、大きな達成感にも繋がるだろうし、スタート時の自分と今の自分を振り返る、良いきっかけとなるだろう。実際に小豆島一周を達成した時の参加者は、大きな達成感と共にそれまでに起きたさまざまな出来事を自然と振り返っていたように思う。こういったスタートがゴールのエクスペディションを設定するためには、ある程度期間が必要であり、長期キャンプだからこそできるプログラムであるといえるだろう。

以上、チャレンジキャンプ2015の特徴的なポイントを紹介してきたが、これらはある意味で長期キャンプならではのポイントでもあり、長期キャンプの意義とも言えるだろう。もちろん上述したポイント以外にも、キャンプによって意義は様々あると思うが、長期間であるからこそ核心に迫れることは多くある。改めて長期キャンプの意義について見つけ、キャンプの様々な「価値」を今一度考えていく必要があるのではないだろうか。

5. おわりに

実践論文を執筆するにあたって、野外教育への「熱い」想いを発信したいと思っていました。長期キャンプ、短期キャンプそれぞれに長所短所があり、それらを理解し、「ニーズ」と「価値」のバランスを取っていくことも野外教育者の重要な使命であるのではないかと感じています。これからも参加者の事を想い、心揺らす体験を全力で追い求めていこうと思います。

参考文献

1) 青木康太郎・福田芳則・谷健二・下地隆・小松由美 (2005) 水辺活動におけるウォーターワイズプログラムが児童の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究 8 (2) : 59-70.

- 2) 遠藤浩・築山泰典・竹内早代 (2006) 教育キャンプが参加児童の「生きる力」に及ぼす影響. 日本野外教育学会第9回大会プログラム研究発表抄録集: 24-25.
- 3) 大阪府キャンプ協会 (2006) キャンプは生きる力を育むのか. 大阪府キャンプ協会研究紀要: 7-29.
- 4) 中川もも・岡村泰斗・黒澤毅・荒木恵里・米山絵里 (2005) 長期・短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究 8 (2): 31-43.
- 5) 日本キャンプ協会 (2011) キャンプ白書 2011.
- 6) 福島康彦・福満博隆 (2006) 小中学校の宿泊体験学習における生きる力の変容 (II). 日本野外教育学会第9回大会プログラム研究発表抄録集: 22-23.
- 7) 福田芳則・池島明子・横山誠 (2009) 生活状況の厳しい教育キャンプが参加者の「生きる力」に及ぼす影響. 大阪体育大学紀要第40巻: 59-71.
- 8) 星野敏男・金子和正 (2011) 野外教育の理論と実践: 杏林書院.
- 9) Jack K Drury, Bruce f. Bonny, Dene Berman, Mark C. Wagstaff (2005): The Backcountry Classroom 2nd edition.
- 10) Kolb D. A (1984) Experiential learning: experience as the source of learning and development. Prentice Hall.)

くしろアウトドアキッズスクール 2015 冒険の旅の実践

森 健太郎 (釧路野外教育研究会)

Kentaro MORI

1. はじめに

今日、子どもたちを取り巻く社会の急激な変化が、子どもに深刻な影響を与えていることが懸念されている。平成 25 年、「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」¹⁾の中で、青少年の体験活動の定義・意義・効果が明確化されている。「学校教育における体験活動の推進」において、「長期の集団宿泊学習は、人間的に大きな成長がみられる」とされている一方、「学校から遠く離れないとできないとされることから、費用負担、教員の多忙感の増加等、課題がある」ということが懸念されている。

釧路野外教育研究会では、平成 10 年から学校の長期休業中（夏休み及び冬休み）に長期宿泊型の自然体験活動を行っている。本会の会員は、社会教育主事、大学の教員、小中学校の教員等から構成されている。釧路市では、学校教育の中で長期宿泊型の自然体験活動を行っていくことは、まだまだ課題が多いため、当研究会では、釧路市の子どもたちにキャンプを体験する場を提供している。

1.2 目的

釧路野外教育研究会では、これまで、釧路市内の小中学生を対象としたキャンプを行ってきた。目的としては、自然豊かな北海道道東を舞台に、
①自主性を育て、自立した態度を養っていくこと。
②初めて会った人と人間関係を構築し、社会性や協調性を体験的に学ぶこと。
である。

2. 前年度に実施したキャンプでの保護者アンケートの結果

平成 26 年 8 月に実施した当研究会のキャンプ（アドベンチャースクール 2014）に参加した子どもの保護者を対象に事後アンケート^{図 1)}を行った。この調査は、キャンプの前と後で、子どもにどのような変化があったのか保護者に回答を求めたものであった。

21 項目それぞれについて、「まったくそう思わない、あまりそう思わない、少しそうおもう、とてもそう思う」の 4 段階で回答を求めた。「まったくそう思わない」を 1 点、「あまりそう思わない」を 2 点、「少しそうおもう」を 3 点、「とてもそう思う」を 4 点として、集計し平均値を求め分析した。(n=14)

その結果、最も多く効果があったとみられる項目は、「友達と仲良くするようになった。」ということであった。次には、「親が近くにいなくても心配しなくなった。」「何か新しいことをするのが好きになった。」という回答が高い値を示していた。逆に、「新しい友達をつくるのが苦手になった。」などというネガティブな回答については、低い値を示していることが分かった。

これらのデータから、キャンプに参加した後、保護者からみて、「キャンプに行き子供により効果があった」と感じている保護者が多いということが分かった。このデータについては、今回のキャンプの保護者説明会の際に紹介し、さらなるキャンプへの期待を図るものとした。

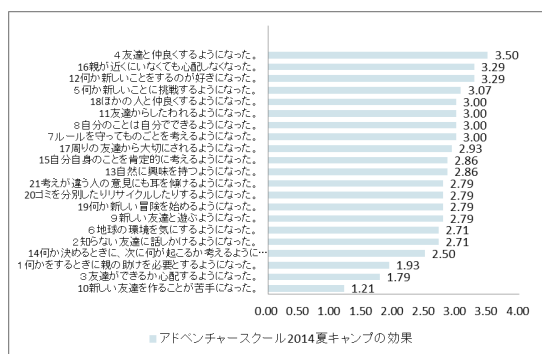


図1 保護者アンケートの結果

3. 実践内容

3.1 くしろアウトドアキッズスクールの概要

(1) 期間及び場所

平成27年8月5日～9日までの4泊5日の日程で行った。1日目、2日目はレイクサイドパーク能取（網走市）、3日目に自転車での移動を行い、ネイパル北見（北見市）で4日目、5日目を過ごした。

(2) 参加者

参加者募集にあたっては、釧路市内の全小学校（3～6年の男女）に募集要項を配布した。平成27年1月に行ったキャンプの参加者にはダイレクトメールを郵送した。今回のキャンプは、募集人数は18名であったが、申し込みが多数になり、32名^{表1)}でのキャンプとなった。そのうち、6名はリピーターであった。

表1 参加者の人数と学年

学年	人数
3年生	9名
4年生	5名
5年生	13名
6年生	5名

(3) 指導者と班編成

指導にあたっては、釧路市内の小学校の校長、教員、社会教育主事、大学生、計11名が行った。教員については、釧路市、鶴居村、弟子屈町などの学校からボランティアまたは、校外研修として参加した。養護教諭も今回のキャンプに参加していた。

班の編成にあたっては、学年、学校が分かれるようにしている。理由としては、目的にも記して

いるように、初めて会った人との人間関係を作っていく、ということを趣旨としているためである。班は4つの班に分け、1班に7～8名の参加者になるようにした。それぞれの班には、カウンセラーとして、教員や大学生がつき、指導にあたった。

(4) プログラム

表2 プログラム内容

日程	活動内容	場所
8月5日	アイスブレイク 課題解決ゲーム	レイクサイド パーク能取
8月6日	水辺のプログラム	レイクサイド パーク能取
8月7日	サイクリング 40kmの旅 (移動)	ネイパル北見
8月8日	カヌー、クラフト、 野外炊飯 キャンプファイヤー	ネイパル北見
8月9日	ふりかえり	ネイパル北見

釧路市は、海辺に位置しておりながら、海水浴などの海辺で遊べる場所が皆無である。そこで、釧路から160kmほど離れているオホーツク海にいき、海辺での活動を行うことで、「普段体験することのできないような体験」を子どもたちにさせたいと考え、プログラム^{表2)}を考えた。

釧路市からレイクサイドパーク能取（網走市）まで、貸し切りバスを利用し移動した。途中休憩を入れ、4時間半ほどかかるため、バスの中でのレクを行い、参加者の緊張がほぐれるようにした。また、キャンプ実施期間中、リスクが高いと思われるプログラム（水辺でのプログラム、サイクリング、野外炊飯）を行う前に、勉強会を行うこととした。この勉強会ではワークシートを使い、与えられた条件でどのようなリスクがあるのか考え、友達と意見を交流するものであった。また、「安全なキャンプのために～楽しく学ぶキャンプの安全～part8」²⁾も活用し、リスクに対して必要な知識の理解を図った。

1日目は、アイスブレイクと班ごとに課題解決ゲームを行った。はじめは緊張している子どもたちであったが、1日目のアクティビティを通して、少しずつ笑顔が見え始めた。1日目、夕方から次の日の朝まで荒天が予想されたため、テント設営

は行わず、バンガローと常設テントパオに分けて宿泊した。

くしろアウトドアキッズスクール ぼうけんのたび2015

ほん

のどろのビンゴ

みんなでおつけよう！のどろにある自然のもの！！
ほんのメンバー全員がおつけたら丸をつけて！！

ちゅいりいもの	とげとげのもの	食べたらおいしそうなもの	貝がら
かわいいもの	スズメ	毛虫	カモメ
すべすべするもの	びかびかしたもの	だれかの顔にいてるもの	いりにおいのもの
白い花	うまみだいなもの	ほねのあるもの	さらさらしたもの

ビンゴになった数は () でした！！

課題解決ゲームでの「森のビンゴ」能取編

くしろアウトドアキッズスクール ぼうけんのたび2015 海で起こる危険

ほん 名前

1. 海で起こる危険をさがそう。どんな危険をさがそうかがあてはまるか。

2. 予防や準備をしないままの準備では、どうしたらいいか思いまそう。

危険な準備をしない	どうしたらいいか思いまそう

3. 海で起こる危険をさがそう。

リスクについて考えるシート（海で起こる危険）



アイスブレイクでの風景

2日目は、水辺でのプログラムとして、アサリの潮干狩り、海の中の生物の観察等を行った。このリスクマネジメントの勉強会では、海の中に住む生物の危険についてはもちろんのこと、海からの照り返しによる気温の上昇が起こるなどということから、熱中症になる危険があることについて学んだ。活動の際は、十分な水分補給を行うようにした。その他考えられるリスクについても交流し、より安全に活動できるようにした。



海辺での活動（アサリの潮干狩り）



サイクリングでキャンプ地を移動

3日目は、メインプログラムであるサイクリングを行った。レイクパークサイド能取からネイパル北見までの40kmを自力で行くものであった。ここはサイクリングコースが整備されており、子どもでも比較的 safely 走行することができる。40kmのサイクリングを経験したことがない参加者にとっては、果てしなく道が続いているように感じたためか、何度かリタイヤしそうになりながらも、お互いを励まし合い、最後までたどり着くことができた。

4日目は、カヌー、クラフト、野外炊飯、キャンプファイヤーと盛りだくさんの内容であった。午前中は、サロマ湖でのカヌー体験を行った。ネイパル北見には、いかだもあり、体験することができた。また、午後からは、周辺の木材を使ったクラフト活動を行った。子どもたちは、思い思い

の作品作りに没頭していた。作品ができた後は、大事そうに首から下げている。

夕方には、野外炊飯をおこなった。班ごとにカレーを作った。火おこし、食材をきる、炒める、米を飯盒で炊くなど、子供たちは、自然に仕事分担し、活動していた。野外炊飯は、1日目にアイスブレイク的な要素として行うことがあるが、今回は、4日目に行ったことで、話をしながら楽しそうに共同作業をすることができた。リーダーシップを発揮して、指示を出そうとしている子、周



キャンプファイヤー



カヌー・イカダの活動風景



クラフトの活動



グループでの野外炊飯

りの様子を見て、自分の仕事を見つけ主体的に行動する子などを多く見ることができた。

キャンプファイヤーでは、班ごとにキャンプを振り返ることができる出し物を行った。クイズや劇などを行い、楽しくプログラムを終えた。

5日目は、班ごとに振り返りを行い、これまでのキャンプでの思い出や感じていたことなどを話し合った。

(5) 毎日の振り返り活動

本キャンプでは、活動中毎日就寝前に班ごとに集まり、思いや感じたことを話し合うことのできる場を作っている。また、十分に話し合った後、カウンセラーに対して、自分の思いを書くようにしている。「明日は、もっとたくさん友達と話そう。」「明日も活動が楽しみ。」といったポジティブな記述、「テントで寝られるか不安。」「明日のサイクリングが不安。」というネガティブな記述も見られた。素直に自分の気持ちを表現している子が多かった。

カウンセラー、スタッフは、その日のミーティングで振り返りの内容を共有した。不安に思っていることがあれば、気持ちに寄り添っていくようにし、期待に胸を膨らませていけば、気持ちに同調してさらなる意欲を駆り立てるなど、参加者一人一人の気持ちに目を向け、スタッフ全員でサポートした。



5日目の振り返りの様子

4. 成果

4.1 参加者を得るための工夫

本研究会では、これまで「参加費をなるべく抑え、保護者の負担を減らし、キャンプに参加しやすいように」と低予算でプログラムを計画してきた。スタッフは、教員がほとんどであるため、金銭的な利益を求めなくてよいところが利点となっていた。ただ、さまざまな活動をしていくには、経費がかかるため、「予算を減らしつつも、質の高いキャンプを提供していこう。」というスタッフの強い志の元、運営を行ってきた。

これまで、本研究会で行ってきたキャンプは、4年生から6年生までを対象としてきたことがほとんどであった。釧路市内の小学校、全校に募集要項を配布し、参加を募った。しかし、ここ数年18名定員のところ8名しか申し込みがないということもあった。スタッフの中には、「参加者がいないのであれば、今後キャンプを続けられないのではないか。」と感じる人もおり、本研究会のキャンプの存亡が危ぶまれていたところであった。敢え無く平成26年度のキャンプは、プログラムを変更し、実施日数も3日少ない3泊4日での活動となった。再度募集要項を配布、申し込みのないリピーターにも連絡をとり、何とか18名の参加が決定し、キャンプの実施することができた。このことを踏まえ、平成27年度は、参加対象を3年生からとし、さらには釧路市内では体験できないようなプログラムを行うなど、付

加価値をつけ、募集を凶った。また、参加者が少ないという原因は、日程に問題があるのか、釧路市に冒険教育のニーズがないのか等、あらゆる可能性を検討してきた。

その結果、平成27年度は18名定員のところ40名を超える応募があったため、抽選等を行い32名でのキャンプを行うこととなった。

4.2 プログラム中、リスクについて考える勉強会を実施

今回のキャンプでは、大きな事故、ケガには見舞われなかった。リスクに対する勉強会については、あまりリスクについて考えすぎると、活動に臆病になってしまい、せっかくのプログラムが楽しくできず、満足のいかないものになってしまうことを恐れていた。そのため、熱中症などの自分で気を付けようとするれば未然に防ぐことのできるリスクについて、中心的に考えるようにしてきた。

その結果、活動中はリスクに対して冷静に考え、こまめな水分補給、体温調整などをしっかりと行って活動していた。活動に対しても意欲的で、想定されるリスクを知ることで、活動自体も楽しめていたように感じる。

4.3 冒険教育を支えるスタッフ

道東地方において、さまざまな市町村、少年自然の家の主催などで、さまざまなキャンプが行われている。ただ、その中で、冒険教育的なキャンプを行っている団体は多くはないというところが現状である。道東は、川、山、海など自然の宝庫である。本研究会でも、その価値はわかっているにもかかわらず実際に利用していくことが難しかった。アクティビティを行うごとにバスで移動したりすることで、経費がかかりすぎることで、スタッフの経験が少ないため、縦走登山のような高リスクのアクティビティは難しいことなど、冒険教育を行うため、安全と冒険との駆け引きが常にそこにはあった。それでも、何度も下見をしたり、スタッフのスキルアップ講習会を行ったり、とより価値の高いものとなるよう実践を積んできた。自己に挑戦し、仲間と達成感を味わうようなキャンプは、子どもにとって非常に価値のあるものである。

これまで16年間、夏と冬に当研究会で冒険教

育的なキャンプを行うことができたのは、その価値に賛同、支えてくれたスタッフ、民間の事業者、参加者の保護者等のおかげである。今後も多くの方々に協力を得ながら、価値ある冒険教育を行っていききたい。

5. 課題

5.1 個人装備を整理するプログラムの充実

これは、キャンプ中の活動を通して、スタッフが感じていたことであるが、自分の荷物（服、着替え等）を整理することが苦手としている子が極めて多いことであった。保護者説明会時には、子どもと一緒に、荷物のパッキングを行うよう指示している。しかも、何日目は何を着るのかまで、ビニール袋に小分けされており、何不自由なさそうにきれいにパッキングされている子もいた。しかし、そんな子が、3日目、4日目がたつと自分のものがどこにあって、着た服、着ていない服の区別すらできない状況になっていた。これは、日常生活の中で、いかに自分で身の整理をしないか、ということである。結果、バンガローや自然の家での部屋の中が散らかってしまうというありさまとなっていた。本キャンプでは、あらかじめ、プログラムに余裕を持たせているのだが、それだけでは不十分であった。登山等リスクが高いプログラム前には、必ずカウンセラー、スタッフの目が入り、確認するようにはしているが、まだまだ時間を有する子が多いのが課題である。

つまり、個人装備の整理方法、つまりバックパッキングの方法についてもプログラムとしてしっかりと行っていかなくてはならないということである。子どもの生活力というか、荷物の片づけ方法、整理の仕方、部屋の整頓の仕方等々、自分のことは自分でできるためのスキルを向上させることも今後はキャンプにおいて必要になってくるのではないだろうか。またそれが、日常生活に戻ったときにも活用できるようにしていくことが望ましいのだろう。

5.2 キャンプを続けていくこと

参加者がいないことには、キャンプは成り立たない。これまで、本研究会の多くの活動は、「子どもゆめ基金[®]」の補助金でキャンプを行ってき

た。補助金の中で、スタッフにかかる費用、下見にかかる現地調査費用等を賄うことができた。

ただ、今後続けていくことを考えると、この補助金にばかり頼っていてはならないであろう。これまで行ってきたキャンプの規模を縮小して行っていくことも必要となる。

実際に補助金がなかった年は、参加者は、キャンプ地で現地集合解散、スタッフも限られたメンバーで運営した。宿泊場所は、へき地の小学校であったりもした。キャンプを続けていくために、プログラム内容を見直し、予算を見直すなど、試行錯誤を繰り返してきた。

「広く多くの子どもたちにキャンプを提供したい。」という本研究会の思いは変わらず、来年も再来年も続けていくためには、何が必要であるか。それは、本研究会の事業に賛同してくれる指導者の確保、育成であったり、参加者がこのキャンプに参加したいという動機づけであったり、社会的認知度、教育的価値等々、さまざまな角度から存続していくために手だてをとっていかなくてはならないと考える。

子どもたちが、この社会の中で生きていくために必要な知恵と工夫、知識、スキル等をキャンプで培っていくため、今日もキャンプを研究していくことが大切であろう。

引用文献

- 1) 中央教育審議会（2013）今後の青少年の体験活動の推進について（答申）中教審第160号
- 2) 酒井哲夫（2007）安全なキャンプのために part8 ～楽しく学ぶキャンプの安全～、日本キャンプ協会

参考文献

- 佐藤冬果ら（2014）南会津アドベチャーキャンプの実践と地域連携の可能性、キャンプ研究、日本キャンプ協会、17、15-21

実践報告

キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

渡辺亮・永田千晴・丹藤里咲・照井智貴・臼井勇斗・弓削田崇史・比留間陵介・高橋侑椰・大杉清・岩谷悠紀・遠藤菜・辻直人・平山晃太郎（帝京大学）
倉品康夫（帝京大学非常勤講師、埼玉県キャンプ協会理事）

Ryo WATANABE・Chiharu NAGATA・Risa TANDOU・Tomoki TERUI・Yuuto USUI・Takashi YUGATA・Ryousuke HIRUMA・Yuya TAKAHASHI・Kiyoshi OOSUGI・Yuuki IWATANI・Shior ENDOU・Naoto TSUJII・Kotaro HIRAYAMA Yasuo KURASHINA

はじめに

ここに今後のキャンプ活動において有益な示唆を与えることを目的に、帝京大学八王子キャンパス：スポーツ方法実習（野外活動）「キャンプ」の実践について報告する。まず、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要及び特徴的取り組みについて紹介する。また、今後の課題等についても提示する。

活動概要

1. キャンプの特徴

本学キャンパスは自然が残る都市近郊に立地しており、授業において「豊かな多摩の自然のフィールドを最大限に活用すること」が大学からの課題であった。キャンプを実施するフィールドは大学最寄りの多摩センター駅からバスで10分の近さにある。この近さのメリットを生かし、基礎授業、講義・試験以外に、実習本行とスタッフ養成等の準備をそれぞれ4日を確保し、合計8日間の日程に全学生が参加して行った。移動距離も短く、全日程日帰り、費用も安く抑えた、「安近短」のキャンプであるが、里山百選に選ばれた小野路に位置する谷戸で、「東京とは思えない山奥」¹⁾に足しげく通いつつ、学生が主体的に活動することが最大の特徴と考えられる。

2. キャンプの目的

合言葉は「裏山に登れ」。これは石巻市の大川小学校からの教訓である。「2011年3月11日の東日本震災以降、戦後最大の歴史の断絶と転換点から、さまざまな観点における、みんなが生き残れる国民的サバイバルについて考える」ことがキャンプの目的である。キャンプ場は里山の谷戸の田んぼにあり、周囲を谷戸山に囲まれていた。谷戸までの往復には、学生から常に「こんなとこ、どうやって下るの？登るの？」という声が聞こえるほどの斜面を藪漕ぎする箇所があり、バス停への近道として通過するのがお約束のタスクであった。

3. 対象学生像

本校は単価大学ではなく、様々な価値観を持った学生が集まった。教員志望の学生や、経済学部、文学部、経営学部観光系の二年度以上の学生が参加した。

4. 実施プログラム

①キャンプ生活技術、②ハイク（高尾山）、③ロゲイニング（周辺）、④冒険プログラム、⑤里山体験（田植え・間伐）及び⑥野外食育プログラム等を複合して行った。

①生活技術：基本が教えられるスタッフを養成し

て行った。

- ②高尾山ハイイク：里山以外にも良質な大自然にふれることも課題となる。そこで、大学から程近い、保全された裏高尾の自然を採勝した。
- ③周辺ロゲイニング：広い谷戸のポイントを携帯のカメラで撮影し、地図を作りポイントを周った。
- ④冒険プログラム：いざという時や将来の災害時に困らないよう、危機を想定した「楽しく身につける冒険体験」として、ハイエレメントのロープコースの設置及び指導を実施した。
- ⑤里山体験（田植え・間伐）：地主の好意で田植えを二枚行った。また、里山の手入れとして竹等を切った。
- ⑥野外食育プログラム：耐火煉瓦によるピザ釜を組み立てて、調理方法を検討した。

【実習本行】

《基礎授業》：5月9日（土）9：00～17：00

場所：帝京大学八王子校舎

内容：授業概要説明。基礎的講義及びグループワーク。

説明等終了後、計画打合せ。献立作成。準備日程参加名簿作成。キャンプサイト移動、調査実施。

《実技初日：キャンプ準備》5月10日（日）

9：00～17：00 場所：谷戸

活動概要：地域の自然インタープリテーション、キャンプサイト準備実施

《2日目：野外料理等》6月13日（土）

9：30～17：00 場所：谷戸

活動概要：里山体験、野外生活技術及び野外料理実習、レポートテーマ設定

《3日目：里山チャレンジ等》6月14日（日）

9：30～18：00 場所：谷戸

活動概要：里山チャレンジ、野外生活技術、野外料理実習とキャンプクラフト

《4日目：後片付け》6月20日（土）

9：30～16：00 場所：谷戸

活動概要：実習補遺とサイト整備

《5日目：講義及び試験》7月25日（土）

9：00～12：30 場所：帝京大学八王子校舎

活動概要：講義補遺、筆記試験及び実技試験（ロープワーク）

【サービスプログラム】

6月21日（日）

内容：高尾山ハイイク

（日本キャンプ協会後援事業）

【補講】

7月26日（日）

内容：虫採勝プログラム

5. 重層的指導体制・安全確保及び準備について

一人の教員で安全を確保するため、徹底的に各プログラムに通曉した指導担当学生スタッフを教育して、教員→指導スタッフ→キャンパーという重層的な指導システムを実現した。実習本行は担当学生指導スタッフ自身が考え行動するプロセスを講師がスーパーバイズし、教員は緊急時以外介入しなかった。教員は参与的な観察レベルで常に全体を俯瞰してリスクをチェックし、安全を確保した。

また、プログラム準備参加者には交通費を支給した。授業時間外の準備の調査・準備及びスタッフ教育であったが、結果的に全員が参加した。つまりスタッフ体験の機会は均等に与えられたと考えられる。

【授業時間外の準備学習・調査】

以下の4日間、9：30～16：00の時間に実施した。

- ①5月17日（日）内容：キャンプ場整備、トイレ作り、機材チェック、周辺探索、ピザ釜設計
- ②5月24日（日）内容：キャンプ場整備、薪作り、周辺探索、リスクマネジメント、ピザ釜資材調達
- ③6月6日（土）内容：高尾山事前調査、コース確認、リスクマネジメント、
- ④6月7日（日）内容：キャンプ場整備、薪作り、ピザ釜試験、木登り・ハイエレメント作成

4. 「安近短」キャンプのコンセプトの実現から見えてきたこと

「為す事によって学ぶ」「体験からしか学ぶことはできない」－ Learning by Doing －
会計担当者を決めて、毎回活動後に会計報告及び毎回活動前に予算計画を発表した。予算とメニューに従って、買出し当番がコストパフォーマンス

ス（費用対効果。以下「コスパ」）を念頭に、電卓を片手に買出しをおこなった。実習費の予算の執行状況を常に、履修学生に伝え、実習費の「コスパ」を高める・「元を取る」努力を通じて、当事者意識が高まり、満足度、さらに全体を把握共有することは安全性を高め、キャンプの質が向上したと考えられる。

本キャンプでは、参加学生自身がキャンプ場の施設作成に関わり、当事者意識や多様な役割行動能力、キャンプの創造・運営能力を養うようにした。誰かがやるのを期待するのではなく、自分達でやって楽しむ・体験することが、今後のキャンプでも重要なテーマである。将来、教育現場で学年キャンプ、クラスキャンプを実践する際に、地域でキャンプをする（災害による「キャンプ活動」をふくむ）時に使える力は「為す事によって学ぶ」ことによって育まれるからである。その際、指導者が使ってはいけない言葉は「権利義務、団体行動」。使う概念は「和、責任、自立、共生」となる。そもそも、キャンプとは「団体行動」とは何かを根本的に身体活動を通じて理解させることである。学校現場等で「手垢ついた」の常套句をイニシエーションの段階で教条的に使う残念なキャンプがある。迂遠であるが「ふりかえり」の段階で体験から「手垢のついた言葉」である「団体行動」から解放された明確化や概念化の段階が聞けるような仕組み作りが肝要と考える。

5. レポートについて

実習二日目にレポートテーマ設定及びグループワークを行った。キャンパスからの近さを活かし、学生たちはキャンプ場に足しげく通いながら、仲間とともに学んだ。その成果を、設定したテーマ毎に最終日の講義及び試験の日に発表した。レポートの全体テーマは「安近短の大学キャンプ実習の実践～生が主体的に為すことにより学ぶもの～」とし、以下にグループ毎のテーマとその概要、感想を報告する。

- ・キャンプ実習の収支を管理する～コスパ教育を考える～（白井、照井、比留間、平山）
実習費は6,000円（除く交通費）であった。の「コスパ」を追求して実践した。上述の会計担当者に

よる実習費の「コスパ」を高める・「元を取る」努力を通じて、全体の当事者意識が高まり、満足度、さらに全体を把握共有することは安全性を高め、キャンプの質が向上したと考えられる。

- ・ピザ釜を作って料理する～耐熱煉瓦カマド活用方法と器の選定～（弓削田、比留間、丹藤、永田、遠藤）

唐木田駅前の店で耐火煉瓦を実際に組みつつ考え、22個購入した。三階建ての構造として、ピザ釜オープンを作った。温度・時間管理、粉の配分等の試行錯誤を経て、皮が薄い様々なピザが安定的に作れるようになった。作った料理：ピザ各種、バナナケーキ、アップルパイ、焼肉、ジャガイモグラタン（オーナーのご好意で畑で収穫）。自分達で設計、耐火煉瓦購入、60kgの耐火煉瓦運搬、釜の設営とレンガの粘土塗り固め等々、「全て自分達でやったという達成感が感じられた」。



- ・鉄器の釜で炊飯する～飯盒炊飯指導で飯を食わない～（渡辺、辻）

米の1.2倍の水の量さえ守り、ただ焚き火をすれば、丸い底の鉄の釜で米は対流して、美味しいご飯に炊ける。炊飯の指導はシンプルでその他の生活技術に注力できた。「手取り足取り指導を受けないことで、自分たちだけで行ったという達成感と思考と行動が重要であること、そのためにも会話が重要であることを学んだ」。

- ・ロープコースを作って運営する～危機に裏山に登ることを躊躇させない指導～（丹藤、永田、遠藤、弓削田、高橋）
指導担当学生が教員の指導でロープで確保され

つつ、3m 間隔の二本の杉の間に数メートルの高さで三段の梯子状にロープを渡して、最高地点に支点を作り、ロープで降りる作業を通じて、ロープスコースの設営を行なった。指導担当学生が教員の指導で、役割を交代しつつ、確保方法及びリスクマネジメントを検討した。実習本行は指導担当学生がプログラムを指導し、それを教員がスーパーバイズした。



- ・裏山に道を作る～裏山をフィールドにする試み～（平山、辻）

小学校教員を目指す学生も参加していたため、危機に対する見識、想像力、構想力、行動力という観点から「危機に際して自分で判断して裏山に登れる子どもを教育する」というテーマについて考え、裏山をフィールドにする試みを行なった。

- ・高尾山登山をファシリテートする～身近な山の自然の偉大さにふれる～（大杉、岩谷、遠藤、丹藤、永田）

観光地という観点から、観光学科の学生を中心に事前調査をおこなった。本行は埼玉県キャンプ協会主催、日本キャンプ協会後援の高尾山ハイクの指導実習を行った。事前調査の時と同じく、自然の偉大さを身近に触れるには多少人気のない場所を選ばなければいけない、ということを感じた。しかし、人気のない場所を選ぶとどうしても急な山道を進まなくてはいけなくなる。人気のない場所と急な山道は比例する。高尾山の人気のない場所にコアなファンをつけるには、ディープな登山客に対して「知る人ぞ知る」がキーワードとなってくると考えた。この問題の明確な答えは今後検証が必要であるが、道中に食べた摺差豆腐や、途

中で見つけたカフェなどは、あまり大々的ではない小さなものではあるが、その違いの分かる、例えば隠れた名店オタクを好むニッチな客層を獲得する糸口になるのではないだろうか。



- ・キャンプでコーヒーを飲む・昼寝をする～インタビューからキャンプの中でぼんやりするを考える～（大杉、岩谷）

ぼんやりすることは意外と自分の記憶に残っている。なぜかと考えるとぼんやりすることは時間の無駄なく、人間に必要な時間なのではないだろうか。ぼんやりすることによって心に平穏が生まれ、結果自分の心の安定につながっているのではないか。授業やアルバイトなどの用事に追われている普段、屋外でゆっくり昼寝をするということはまずないので、コットで昼寝をした時はなんともいえない心地よさを感じた。自動販売機で購入するものは、美味しいか美味しくないかで判断しがちだが、実習中に飲んだものは、そのような基準ではなく、周りの景色とか自然の音とかが味にプラスの価値を与えてくれた。日常とは違う風景が、コーヒーを飲むという行為を特別なものにしてくれた。活動した学生のインタビューから、コーヒーが美味しく、リラックスできたという意見は多かった。キャンプにおいてコーヒー等を飲むことは、キャンプをより有意義なものに思われる。キャンプでの昼寝とコーヒーは、疲労回復とリラックス効果が期待できるだろう。

- ・ホンマ製作所薪ストーブを活用する～カマドではない薪ストーブの利点～（高橋）

2011年3月11日の震災でとても役立った薪ストーブを使い、薪を効率的に使用しながら、自

然の中で水餃子やカレーなどを作って味わった。薪ストーブを使う際の共同作業の良さや燃焼効率の利点を体験的に学びながら、楽しくキャンプを体験することが出来た。

6. スポンサー集め

本キャンプでは、学生にスポンサー集めをしてもらっている。どのようにスポンサーを集めるか、学生自身が試行錯誤しながら体験的に行ない、うまくいくこともあれば、先輩が獲得したスポンサーシップを失ったケースもある。お願いからお礼、報告まで取り組むなかで、大きな学びとなる。以下に、学生の感想の一部を紹介する。「社会学科で広告のゼミに所属しているため、キャンプ実習のスポンサー集めをやることになりました。これから売り出すものや、売れ残っていそうな物をいただけないかということのポイントに、スポンサーになっていただけそうな会社に電話やメールをお願いをしました。その際には、キャンプや体育実技の社会的使命向上や生涯スポーツとしてのキャンプの充実に努力する旨等を添えるようにしました。結果的には、食肉関連会社がスポンサーになっていただくことになり、7kgという巨大な肉の塊を協賛して頂きました。」

7. おわりに

大学と地域との結びつきや、地域資源の活用が注目されている。自分が学ぶ大学のある地域のことを理解し、その地域の自然や文化を学ぶことは、全ての学生にとって大切な意味をもつ。学生が主体的、体験的に学べる環境を整えることで、学生の学びは一層深まると考える。体験からの学びは、知識を知恵に変え力となる。キャンプ実習は学生にとって有意義な学ぶ場である。キャンプは地域の自然を活用しやすい利点がある。また、重層的な指導システムを取り入れることで、直接体験が乏しいと言われる今日の学生を支援することができる。課題はあるものの、今後も継続してこのような形での実習を進めていきたい。

【謝辞】

本実技は活動場所を快くご提供された天野様、倉庫等の便宜を根気強く御回り頂いた藺田様及び

(株) ロゴスコポーレーション様の物品協賛等々、多くの方々のご好意・ご縁をいただき実施できました。この場をお借りしまして改めて感謝申し上げます。

追記

著者の一人、岩谷悠紀（観光経営学科4年生）さんが、2016年1月2日にクモ膜下出血で逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。合掌

注

- 1) 学生感想（OL フィールド調査）「唐木田駅から小野路までのルートの調査をしました。東京とは思えない山奥で、車道に出れば人はいませんが、次の山に入れば人はいません。半日、山では人に会いませんでした」

参考文献

- 1) (財) 日本サッカー協会, 2006, 現代の子ども事情, JFA リーフレット, (財) 日本サッカー協会
- 2) 田中利典, 2004, 修験道に学ぶ, 野外教育研究 8-1:1-12
- 3) 黒田次郎・倉品康夫ら, 2012, スポーツビジネス概論, 叢文社
- 4) 倉品康夫, 2011, 災害も乗り越える持続的な社会を実現する生涯スポーツとしての自助的キャンプのあり方, 日本スポーツ産業学会第16回大会口頭発表
- 5) 倉品康夫, 2011, 防災訓練とキャンプの接合・補完性の原理を考える, 野外教育学会第14回大会実践報告
- 6) 倉品康夫, 2009, 活動の質を高めるチャレンジとリラックスの落差の追求, キャンプ研究第13巻1号, 社団法人日本キャンプ協会
- 7) 中島由賀, 宮木詩織, 宮本芳樹, 倉品康夫, 2009, 実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義, キャンプ研究第13巻1号, 社団法人日本キャンプ協会
- 8) 倉品康夫, 2008, 読書による観想的キャンプ生活—中村春二口訳『方丈記』の野外教育的価値に注目して—, 日本体育学会東京支部第35

回大会

- 9) 倉品康夫,2007, キャンプ用具・用品を活用した大学体育実技の実践報告 - 野外生活の質向上及び生涯スポーツ実践に貢献する成熟したキャンプ用具・用品, 日本スポーツ産業学会 第 16 回大会
- 10) 倉品康夫,2000, “Snow Cave and Sand Box”, 第 5 回国際キャンプ会議 (英文発表)
- 11) 小泉紀雄, 倉品康夫,1997, 野外活動における冒険プログラムの役割, 日本体育学会

資料

公益社団法人 日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
 - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
 - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとする。
 - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
 - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
 - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
 - 4) その他、本会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
 - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
 - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
 - (1) 体裁は、A4版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
 - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12頁以内（1頁1,600字以内）、実践報告は8頁以内を原則とする。
 - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
 - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
 - (5) 要旨（200語以上300語以内）とキーワード（5語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
 - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例¹⁾」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

(記載例)

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野外一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野外次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野外三郎（2010）野外生活技術、野外一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者 2 名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
 - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
 - 2) 各査読者による審査結果は、次の 4 つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
 - A: そのまま掲載可能
 - B: 一部修正すれば掲載可能
 - C: 大幅に修正可能ならば掲載可能
 - D: 掲載不可
 - 3) 2 名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
 - 4) 上記 3) に当てはまらない場合のみ、2 名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき 3 回までに満たされなかった場合は不採択とする。
- (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
- (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60 日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。

- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計 3 部（オリジナル 1 部、コピー 2 部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
- (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに 5,000 円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町 3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内
公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

キャンプ研究投稿連絡票

送付日 年 月 日

投稿原稿の種類	<input type="checkbox"/> 研究論文	<input type="checkbox"/> 実践報告
投稿者氏名 ふりがな 氏 名 英字表記	姓 _____ 名 _____ _____ _____	
所属など	_____	
会員番号	_____ (団体会員の方は団体会員番号をご記入ください。)	
原稿題目 _____ _____		
原稿内訳	原稿本文 _____ 枚	写真 _____ 点
図表 _____ 点		
投稿者連絡先 〒 _____ 都 道 府 県 _____ _____ T e l . _____ F a x . _____ E - m a i l _____ @ _____		
※平日昼間に連絡可能な連絡先をご記入ください。 (勤務先) 会社名 _____ T e l . _____ (携帯電話) _____		
別刷りの希望 <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり _____ 部 (別途実費)		

※添付書類確認欄 (原稿送付時にチェックしてください)

■ キャンプ研究投稿連絡票

オリジナル原稿 1 部 (プリントアウトしたもの) とコピー 2 部の計 3 部

原稿内の写真と図表

原稿データを保存した各種メディアまたは原稿データを添付したメールの送信

資料◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告
●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創
[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する
[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助
[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分及び影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学ぶの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウスリフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ
[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾～新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみ～
[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンバク大学の幼児キャンプ ●“共育”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～
[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ～馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討～ ●人と人つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通してのひとのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鷺敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷺敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発～港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み～ ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ
[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効果 ●親子いきいきリフレッシュキャンプ―事業中止から学ぶこと― ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から―

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅰ)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅱ)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅲ)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山 YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006―第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入した ASE が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふおーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ2702 ☆事業の試みから― ●ユニバーサルキャンプ2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第 10 巻第 3 号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第 11 巻第 1 号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 -第 11 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き-AOCF 創立- ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告

[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究~花山キャンプを事例として~ ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ~10 年の軌跡~

■第 11 巻第 2 号 (2007/9/30)

[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間つくりとエコ・キャンプをめざして-野外活動を通して気づくこと-

[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究-身体障害者模擬患者を通して- ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第 11 巻第 3 号 (2008/1/30)

[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある

[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について-白山市アドベンチャーキャンプの実践から-

[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響

[報告] ●第 11 回日本キャンプ会議全体報告~みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) ~

■第 12 巻第 1 号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 -第 12 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動 (実修) について-メイン州、キャンプ・オーアトカの場合- ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバレ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟-「雪のスゴイ!」を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008 ●ぱるぱるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の (小学-大学) 男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発-プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して- ●連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告-他団体との連携と運営のポイントに着目して- ●『若者自立支援事業「本当にやりたい!」ことプロジェクト」実践報告』 ●サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクト-余島プロジェクト- ●「読書」による観想的キャンプ生活-中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目して-

[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-キャンプが青少年の成長に及ぼす効果- ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-プログラムと自然・生活環境に着目して- ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-参加者と指導者に着目して-

■第 12 巻第 2 号 (2008/9/30)

[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第 12 巻第 3 号 (2009/1/31)

[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識-不満足評価の視点に着目して-

[報告] ●キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第 12 回日本キャンプ会議全体報告~みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) ~

■第 13 巻第 1 号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 -第 13 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割-米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム- ●病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプを~医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組み~ ●休止スキー場を活用したキャンプの試み-白山市アドベンチャーキャンプの実践から- ●

指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状～天津市山野運動基地～ ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者をめざす女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジとリラクセスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える (1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～ [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～ ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ●Means-End Analysisを用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～ ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13巻第2号 (2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (安全管理編)～

■第14巻第1号 (2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●

G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALTプログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響

●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー

●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着

目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership

参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカント

リースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラム

に関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について

[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果

測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み

●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使った

チームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親

プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

■第14巻第2号 (2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後に生かせる

対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育

プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的と

したキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻 (2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修 (野外活動) の現状

と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps～病児キャンプの世界的ネット

ワーク～

■第16巻 (2013/3/10)

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・

ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修 (野外活動) の現状と課題ー第2報ー

■第17巻 (2014/3/10)

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

[実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ (パパチルキャンプ) の実践

●「災害に備える」野外力をきたえよう～アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

■第 18 卷 (2015/2/15)

- [研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーフキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故 (2009) 報告書より～ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析
- [実践報告] ●Frost Valley YMCA の価値教育 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす効果
- [事業報告] ●グリーフキャンプ・フォーラム抄録「子どものグリーフサポート～地域社会の役割・キャンプの役割～」
- Camp Meeting in Japan 2014 ～第 18 回日本キャンプ会議～全体報告 海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

◆CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

■第 1 回日本キャンプ会議 (1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

- [研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について
- [報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸ー東京) 中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第 2 回日本キャンプ会議 (1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

- [基調講演] ●全日本学生キャンプの草創
- [研究の部] ●野外炊さんの薪 (マキ) の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおける A 子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について (2)
- [報告の部] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●子ども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第 3 回日本キャンプ会議 (1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

- 台湾における童軍 (ボーイスカウト) 教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1 ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプと NPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える (II) ～5 泊 6 日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第 4 回日本キャンプ会議 (2000/10/2 ～ 5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第 4 回日本キャンプ会議は第 5 回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第 5 回日本キャンプ会議 (2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

- 幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営－YMCA プロジェクト・SEED のケース－ ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第 6 回日本キャンプ会議 (2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組みーハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプとする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告ーアウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第 7 回日本キャンプ会議 (2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ 2003 ●長期キャンプ「わんぱく子ども宿 (10泊 11日)」の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法 2 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第 8 回日本キャンプ会議 (2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぴーすキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集める CAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第 27 回ウィンタースクール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005 ー第 9 回日本キャンプ会議 (2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第 12 回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004 夏の体験学習 夏! 君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成 (映像発表) ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動 (私の体験) ●OBS プログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟 (ACF) の創立

■第 15 回 Camp Meeting in Japan 2011 (2011/9/22 ~ 25、静岡県立朝霧野外活動センター)

※第 15 回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立 45 周年記念 第 20 回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 ー第 16 回日本キャンプ会議 (2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[特別講演] ●「グリーフ (ワーク) ×キャンプ」にできること

[口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術ー石巻での 21 日間の支援からー ●「~のんびり遊ぼう~ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」~アカデミーキャンプの実践報告~ ●YMCA フレンドシップキャンパー子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子供たちと森の楽校サマーキャンプ~「つくる」を遊ぶ夏季学校~ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査ーその 1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者 8,000 人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究~広島県廿日市市の事例から~その 1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響ーその 1 ●大学生の宿泊研修 (野外活動) の現状と課題 (第 2 報)

[ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果 (3) - 4ヶ年調査結果の分析- ●東日本大震災被災地でのグリーフキャンプの実践報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究~広島県廿日市市の事例から~その 2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体

験活動の指導力に及ぼす影響—その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査—その2

■ Camp Meeting in Japan 2013 ー第17回日本キャンプ会議(2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター)
 [口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性ーOutdoor Training Programを導入したTS Campー
 ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴ー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの4日間」 ●幼稚園・保育園との連携〜あかぎの森のようちえん実践報告〜 ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリーンケアキャンプに参加して〜被災地の子どもたちとともに〜 ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組みー新しい公共型運営についてー国立赤城青少年交流の家取り組みからー ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える〜広島県での取り組み(報告)〜
 [ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

■ Camp Meeting in Japan 2014 ー第18回日本キャンプ会議(2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)
 [口頭発表] ●LEAVE NO TRACEの日本での必要性と普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修(ドイツ)報告 ●組織キャンプにおけるLeave No Traceプログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京YWCA森林ワークキャンプ〜プロに学ぶ森づくり体験〜 ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討〜わが国での実践にあたって〜 ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気にも及ぼす効果 ●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究 ●キャンプの力はこんなところにも!〜ストレス耐性を高める効果〜 ●ICUジュニアキャンパス・キャンプ〜大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践〜 ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み〜アメージングガイドができるまで〜 ●災害時対策教育プログラムの実践について
 [ポスター発表] ●キャンプの国際比較 その1「日本型キャンプ」をさぐる 1-2 日本のキャンプスタイル ●岡山県A大学におけるキャンプインストラクター養成実習の現状と改善策 ●地域のチカラを活かしたコラボレーション〜通年型農業キャンプ 風っ子ファームの取り組み〜 ●南会津アドベンチャーキャンプの事業評価と地域連携 ●青少年の体験活動等に関する実態調査(平成24年度調査)の報告
 [あれこれ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現〜目で見てわかるコミュニケーション〜 ●One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験
 [全体会] ●海外のキャンプ事情〜日本の状況との比較から〜

■ Camp Meeting in Japan 2015 ー第19回日本キャンプ会議(2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター)
 [口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての一考察 ー文献による調査を通してー ●Day Campの可能性〜1日の中で子どもたちに主体をあずける〜 ●米国キャンプ・オーアトカ(Camp O-AT-KA)における日課プログラムの意義ー余暇教育としてのキャンプ・プログラムー ●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ●登山におけるストレスコーピングに関する研究 ●スポーツチームに対するASEプログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響-チーム所属年数に着目して- ●WEA野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ●災害ボランティアとキャンプ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ●スキーキャンプのヒヤリハット ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響 ●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ●あかぎワールドコミュニティ〜余暇教育としてのキャンププログラム〜 ●自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ●「海ガキ・山ガキになろう! 2014 夏」実践報告
 [ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ●Café de CAMPの作り方ー参加者をつくる空間ー
 [あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現〜目で見てわかるコミュニケーション〜 ●工作体験(お箸づくり)を通じての安全で正しいナイフの使い方ービクトリノックス工作イベントサポートプログラムー ●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント(実践編)
 [全体会] 子どもシンポジウム ●ろう(聾)の子どものためのキャンプ〜デフキッズキャンプ〜 ●被災地の子どものためのキャンプー南会津アドベンチャーキャンプー

※ Camp Meeting in Japan 2006 –第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 –第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として編集されています。

※ 『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各 1,000 円（税・送料込み） ※ 第 17 号まで
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各 1,000 円（税・送料込み） ※ 第 18 回分まで

なお、以下は完売しました。

- ・『キャンプ研究』 第 2 巻、第 4 巻第 1 号
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 第 1 回～第 5 回

編集後記

より多くの人達にキャンプの価値や魅力を理解してもらうためには、継続して社会にキャンプをアピールすることが不可欠です。第19巻目となる今回の『キャンプ研究』には、研究論文3点、実践報告5点の計8点の投稿がありました。

「不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討」は、継続型キャンプが不登校生徒への学校復帰支援に有効であることを示唆しており、今後このような取り組みを広げていく際の布石になります。「テーマパークでの就業体験を利用した体験教育の試み」は、就業体験と野外教育の融合が、社会人基礎力およびコミュニケーションスキルの獲得により高い教育的効果を生む可能性を示唆しており、就業体験にキャンプを取り入れる大変興味深い内容です。いずれの研究もキャンプの持つ力を明らかにし、キャンプの可能性が広がります。「キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究」は、KYTシートを用いた危険認知テストが参加者の危険認知率の向上に効果があることを明らかにしており、今後の効果的なトレーニング法の開発に期待します。

実践報告の「民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析」では、情報が少なかった民間団体が行うスキーキャンプでの分析をしており、重要な情報を与えてくれます。「高校体育科キャンプ実習報告」は、キャンプ実習を通じてスポーツ選手の基礎的な力を育む試みを、「長期キャンプの意義を改めて考える」は、長期キャンプの良さをや指導方法、運営方法について報告しています。また、「くしろアウトドアキッズスクール2015冒険の旅の実践」、「キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム」は、地域の自然を使いながら、子どもたちや学生にキャンプを提供する際の取り組みや課題、指導方法について報告しています。いずれも、教育的な効果を高めることを目指して企画や指導に工夫を凝らしており、実践者の思いを感じていただけたらと思います。

今号も充実した内容の「キャンプ研究」を発行することができました。引き続き、多様なキャンプの研究報告、実践報告を通じて、広く社会へキャンプをアピールしていきたいと思えます。みなさまからの投稿を心よりお待ちしております。

キャンプ研究

第19巻

2016年2月15日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局
発行所 公益社団法人日本キャンプ協会
NATIONAL CAMPING ASSOCIATION OF JAPAN



NCAJ
National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
TEL 03-3469-0217
FAX 03-3469-0504
E-mail ncaj@camping.or.jp

©公益社団法人日本キャンプ協会 写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。



9784904008102



1929075010006

キャンプ研究

第19巻
2016年2月発行

▲研究論文

不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討

—社会教育施設と適応指導教室の連携事例—

築山 泰典・遠藤 浩・橋本 和俊・花田 道子・芳野 和賢

テーマパークでの就業体験を利用した体験教育の試み

～Kidzania就業体験と野外教育の融合～

甲斐 知彦・関口 陽介・秋山 和子

キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究

青木康太郎・横山 誠・粥川 道子

▲実践報告

民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析

稲松謙太郎・砂山 真一・高瀬 宏樹・岡村 泰斗

高校体育科キャンプ実習報告

—スポーツ選手の基礎力を育むことを目指して—

三島 和康

長期キャンプの意義を改めて考える

—「チャレンジキャンプ2015～リヤカーで小豆島一周110kmの旅～」の事例から—

徳田 真彦・伊原 久美子・久田 竜平・高橋 宏斗・飯田 輝

くしろアウトドアキッズスクール2015冒険の旅の実践

森 健太郎

キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

渡辺 亮・永田 千晴・丹藤 里咲・照井 智貴・臼井 勇斗・弓削田崇史・
比留間陵介・高橋 侑椰・大杉 清・岩谷 悠紀・遠藤 栞・辻 直人・
平山晃太郎・倉品 康夫

▲資料

「キャンプ研究」投稿規定

「キャンプ研究」収録題目一覧

CAMP MEETING IN JAPAN 発表題目一覧



NCAJ

National Camping Association of Japan

公益社団法人日本キャンプ協会

定価 1,080円(本体1,000円)